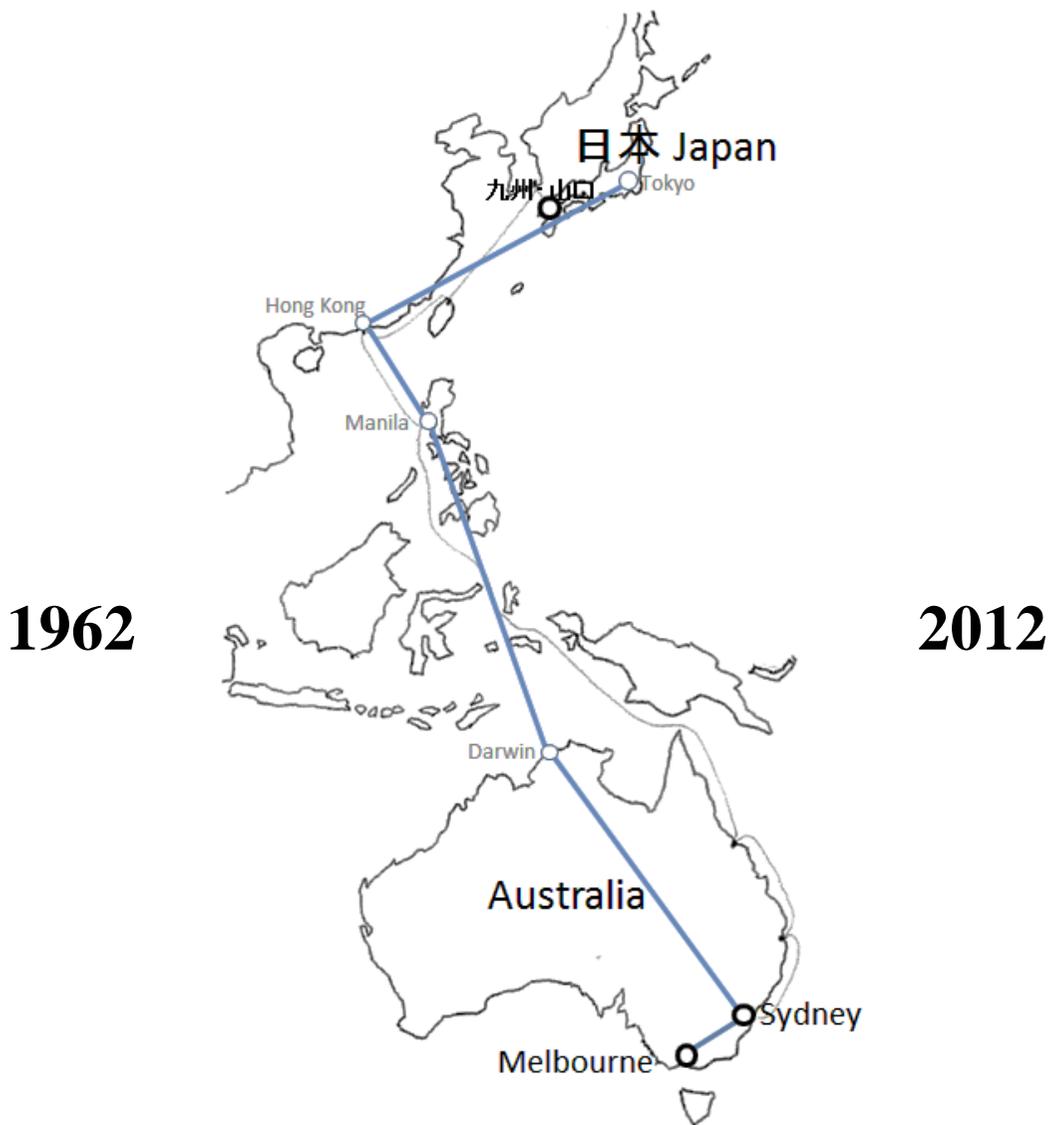


オーストラリア留学から半世紀

Half a Century after our stay in Australia as the First Rotary Exchange Students



ロータリー青少年交換第1期生派遣 50周年記念誌



制作：第1期派遣学生有志

編著：濱 恵介

Produced by the First Exchange Students / Compiled by Keisuke Hama

表紙デザイン：濱 惠介
各章・扉の挿画：辻 数代

序

1962年、日本初のロータリー交換留学生として我々がオーストラリアへ赴いてから50年が経ちました。約1年間の留学生活は忘れがたい思い出として今も心に残っています。しかし、記憶も事実も時の流れとともに風化して行くことは避けられません。

そこで留学から半世紀という節目を捉え、我々の記憶がまだ確かなうちに、また写真や資料が散逸する前に、それらの主要部分を印刷物としてまとめておこうと、有志が相談し「50周年記念誌」を作成することにしました。これは我々自身が楽しかった遠い昔をなつかしむ行為ではありますが、それだけではなく、日本のロータリークラブによる最初の青少年交換の様子を後世に伝える作業でもあると信じます。

ロータリー青少年交換の日本における発端は、1961年5月、日本で初めて開催されたロータリー世界大会（東京）でした。参加者の中に太平洋戦争中、対日戦闘で失明したオーストラリア人ロータリアン、ドナルド・ファーカー氏がおり「和解と親善のために日本人の若者を自国に招待したい」と提案した、と伝えられています。それを当時の370地区（九州全県と山口県）ガバナー松本兼二郎氏が受け止めたのです。

ファーカー氏自身がホストとなってメルボルン南方にある氏のクラブに受け入れられたのが、宮崎洋子。次いでスリース・ラウリー275地区ガバナーの招待でシドニー周辺のロータリークラブに受け入れられたのが、立花万紗子・竹下由美・宮本喜久男・中村数代・前田裕子・松浦尚子・小島敏子・濱 恵介の8名でした。

それぞれの受け入れ環境や本人の対応は様々でした。オーストラリアから招待された時16、17歳だった若者が何を経験し何を感じたのか、どのような形で国際親善に貢献できたのか、当時の日記や両親に宛てた手紙を読み返すことを含め、思い出を新たにしつつ書き綴りました。それ以降の長い人生を送った後の回想ですから、多少の浄化作用を伴っているでしょう。個人的な感情移入もお許しください。

一方、当時のホストファミリーや学校の先生方からも寄稿を頂きました。当時の対日感情や我々がどのように見られていたかを知る貴重な証言です。さらに、国際ロータリー日本青少年交換委員会（RIJYEC）理事長齋藤直美氏と、第一期派遣に最も縁の深い2700地区（福岡県）パストガバナー原田光久氏からは巻頭メッセージを、また長年RI青少年交換に尽力された神田憲氏と Stuart McDonald 氏からは本プログラムに寄せる思いを寄稿して頂きました。この場を借りてあつく御礼申し上げます。

思い出の文章や関連資料を読み返しながら、この留学が我々に与えてくれた貴重な体験の意味を改めて考えます。同時に、この事業が多くの方々の高い志とご尽力があって実現したことを実感します。そして今日、はるかに大きな規模で展開している国際ロータリー青少年交換プログラムの、日本における第一期派遣学生であった光栄を自覚しつつ、お世話になったロータリー関係者・両親・ホストファミリー・先生方に、改めて心からの感謝の気持ちを表します。

この記念誌が国際交流・親善に関心を持つ多くの方々に読まれ、今後のロータリー青少年交換プログラムへの示唆に富む資料となれば望外の喜びです。

2012年5月

元・第1期派遣学生を代表して 濱 恵介

目次

序 Introduction	濱 恵介	3
巻頭メッセージ Prefatory Messages		
青少年交換一期生 50 周年記念誌 発刊に寄せて	齋藤 直美	6
ロータリー青少年交換への感慨	原田 光久	7
歴史探索 In Search of our Youth Exchange History		
青少年交換の端緒・その時代・今へのつながり	濱 恵介	8
第 1 章 元派遣学生それぞれの思い出・感慨		11
§1 Memories and thoughts of the past Exchange Students		
コリマルの家族、友情、そして 50 年間の絆	吉田（小島）敏子	12
留学当時の思い出と今	竹下 由美	24
青春時代の 1 年間	原田（立花）万紗子	28
つながり、広がる友情	辻（中村）数代	32
今に続く私の国際親善	篠崎（前田）裕子	37
幸福の扉の向こう、思い出すままに	福生（松浦）尚子	40
交換留学生、当時を振り返り	関本（宮崎）洋子	48
人生の基礎が固まった 13 ヶ月	濱 恵介	54
第 2 章 オーストラリアの旧知および RI 青少年交換役員からの寄稿		77
§2 Contributions from old Australian friends and Youth Exchange officers		
Our cross-nation friendship since Rotary Exchange 1962	Wyverne Smith	78
Kazuyo at Bossley Park with the Pollard Family	David Pollard	80
The First International Exchange Student to Hurstville Boys' High School		
	Roy B. Reidy	83
Rotary Youth Exchange from Japan in 1962 and what I think of the program today		
	Bede Goodman	84
Congratulations on the Memorial Book	John Moon	86
Acknowledging 50 years of Rotary Youth Exchange	Stuart McDonald	88
素晴らしい R I 青少年交換プログラム	神田 憲	90

第3章 座談会 素晴らしかったあの1年とその後を振り返る 91

§3 Discussions recalling that wonderful year and our lives since then

竹下由美、辻数代、濱 恵介、原田万紗子、福生尚子、吉田敏子
収録 2012年5月26日 筑後・柳川「御花」にて

資料編 Data/Materials 109

1. 第1期派遣学生基礎情報 Basic Information on the First Exchange Students 110

2. 参考資料集 Reference Materials 117

資料1 第370地区ガバナー発 各クラブ会長宛て留学生募集案内 117

資料2 第275地区青少年交換委員長からの招待状 118

資料3 NSW州教育省の就学許可証送付の通知 119

資料4 D370 ガバナー マンスリーレター (1962.1) 120

資料5 在日オーストラリア大使館副領事発、ヴィザ申請に関する通知 121

資料6 日本銀行為替管理局発、留学生選考試験期日の通知 122

資料7 留学生の渡豪を伝える新聞記事 (2) 123

資料8 D370 ガバナー マンスリーレター (1962.2) 124

資料9 門司ロータリークラブ会報 (1962.2) 松本ガバナー講演記録 125

資料10 QANTAS 極東線時刻表 128

資料11 シドニーへの無事到着を知らせる電報 129

資料12 日本からの留学生到着を伝える新聞記事 129

資料13 District 275 Conference 1962 (地区年次大会) 招待状 131

資料14 District 275 Conference 1962 大会資料より抜粋 132

資料15 D370 ガバナー マンスリーレター (1962.3) 133

資料16 D370 ガバナー マンスリーレター (1962.4) 134

資料17 Annual Rotary Ball (ロータリー舞踏会) 招待状 136

資料18 滞在中の新聞記事 137

資料19 D370 ガバナー マンスリーレター (1962.10) 138

資料20 在学・成績等証明書 140

資料21 D370 ガバナー マンスリーレター (1963.5) 141

資料22 中村数代に贈られたテープ・スライド等に関する新聞記事 142

資料23 25 Years of Service, The Rotary Club of Hunters Hill (1983.4) 143

資料24 ロータリーの友 1989年 Vol.37 No.6 地区のたより 144

編集後記 Editor's Comments 濱 恵介 146

「巻頭メッセージ」

青少年交換一期生50周年記念誌 発刊に寄せて

齋藤 直美 Naomi SAITO

50年前、9人の日本の高校生が、オーストラリアのロータリアンたちに初の留学生として暖かく迎えられました。これをきっかけに、日本の高校生は世界へ飛び立ってゆきました。日本の歴史と文化を伝え、様々な平和大使としてその役割を果たしていただきました。

それは、日本のロータリアンや派遣された高校生の予想をはるかに超えた成果となって、成長してゆきました。地区と地区との、誠実なロータリアンを窓口にした交換学生は、やがて社会人となり後輩達にその物語を語ってくれています。窓口となったロータリアンは、来日した高校生の結婚式へ出席のため、海外へ嬉しそうに自慢げに、奥様と飛びだってゆきます。そんな楽しいプログラムだからこそ、応募者が増え個人の枠を超え、地区の委員会の手助けが必要となりました。日本人の特性でしょうか、各地区の委員会の作業手順を均一にして、地区による準備の凸凹をなくしてゆきました。各地区に伝わる青少年交換委員のヒーロー達の手を離れ、膨大となった業務は委員会という組織へと流れ込まざるをえませんでした。

ガバナー会の中に設置されました青少年交換委員会は、10年余の役目を終え、NPO法人RIJYECへと進化しました。そのRIJYECの心を、思いを強くしたものが、2011. 3. 11の惨事でした。青少年交換事業をオールジャパンとして取り組もうとする地区を超えた「絆」でした。海を越えた「絆」でした。東日本大震災後、直ちにオーストラリアのロータリアンから、日本の高校生を夏休みだけでもオーストラリアへいかがですか、とお誘いがありました。その御好意を実現させるために走り回ったのは、なんとローテックスの人たちでした。50年前の暖かい物語を知らない若いローテックス達にも、実は同じ思いが今もなお脈々と受け継がれているのです。その熱意は、両国外務省後援事業となりました。

派遣一期生の皆さんが折に触れ語り部となっていたに、言葉では言えない感謝の気持ちでいっぱいです。皆様方の後を追って、10年毎の同期会が生まれることを祈っています。老いたりといえどロータリアンにはまだそれを応援する力は残っています。せいぜい御利用下さい。

50周年記念誌の発刊おめでとうございます。

NPO 法人 RIJYEC 理事長
第2760地区2006～07年度ガバナー、豊田RC

編者注：RIJYEC：NPO Rotary International Japan Youth Exchange Committee, Inc.
(NPO 法人 国際ロータリー日本青少年交換委員会)

ロータリー青少年交換への感慨

原田 光久 Mitsuhsa HARADA

確か一昨年の初夏であったと思う。大阪で開催された青少年交換プログラムについての全国会議の講演者リストに“濱”という名を見て、はて？と思った。昨年、まだ寒さの残る頃、福岡市で行われた第 2700 地区第 4 グループインターシティミーティングで講演された濱恵介さんご本人とお話しして、「矢張りそうだったか」となった。

小生が高校生の時、父の出張に従って宮崎県小林市にある濱謙次さん（恵介さんのお父上）が工場長をされていた日立製作所に行き、ご一家で歓待していただいたのであった。父源三郎と謙次さんは、九大・冶金の同窓で親交があったようだ。ミーティングの何日か後、その時ご家族の皆さんと撮った写真の複写を頂いた。一番小さいのが恵介さん、小学校に上がったばかりかとても可愛らしく、父や僕の他に（同行した記憶が消えていた）弟も写っている。奇遇としか言えない再会、再発見であった。

恵介さんを含む日本からの最初の交換学生が豪州へ出発したのは、1962 年。この事業を実現させた第 370 地区（九州全県と山口県）のガバナーは、黒崎窯業社長の松本兼二郎さんで、後に国際ロータリーの理事をされ、ハロルド・トーマスの『ロータリーモザイク』の翻訳でも知られている。また、安川電機などの創始者安川敬一郎さんの次男松本健次郎さんのご子息にあたる。

どんな経緯で松本兼二郎さんは全国に先駆けて豪州との青少年交換に取り組んだのか。今に残る「ガバナー月報」や濱謙次さんが書き写した通知文などから判断し、次のようなことであつたらしい。ガバナーに選ばれた松本さんは、米国で開催されたガバナー研修会に参加し、豪州第 275 地区ガバナー Sleath Lowrey さんと知り合った。帰路はサンフランシスコから横浜まで同じ客船の乗客となり親交を深めた。東京でともに出席した国際ロータリー世界大会で Don Farquhar さんによる青少年招待の提案を聞き、率先して引き受けることにした。まずファーカーさんのクラブへ派遣する学生 1 名を一本釣りで選考し、次いでラウリーさんの提案による招待を地区内の全クラブに照会し、応募者を先方に取りつくだ。これが日本の青少年交換の端緒となった。

この度、最初の交換学生の留学から半世紀を記念しまとめられる 50 周年記念誌への寄稿を濱さんから頼まれ、誠にありがたいと思った。小生が青少年交換の始まりに思いを馳せているのは、旧 370 地区の中核をなした 2700 地区を昨年度お預かりたご縁、そして 60 年ぶりに濱さんと再会したご縁からである。

人と人との関係は複雑に絡み合う。人の集団である国と国との関係は、当然格段に複雑になる。その複雑な関係を円満かつ円滑にするには、相手を理解し、自分を理解させる人が肝要になる。異文化を理解するには、自らの文化をほぼ理解した若い人が異文化に接するのが良い。青少年交換の大事たる所以である。

50 年という永い時間を経て自らの道のりをたどり直すというのは、これから同じような努力を続けるのに留意すべき点を際立たせることを意味し、大変ありがたいことだと思う。（2012 年 2 月 記）

第 2700 地区 2010-11 年度ガバナー、小倉 RC

「歴史探索」 青少年交換の端緒・その時代・今へのつながり

濱 恵介 Keisuke HAMA

日本におけるロータリー青少年交換がどのように始まったのだろうか。今回、記念誌の作成に際し、2700 地区パストガバナー原田光久氏を通じ関係者にお骨折りを頂いて様々な記録を発掘した。また元留学生の手元に残っていた手紙や書類にも貴重な資料が見いだされた。それらを総合することで、青少年交換が実現した状況が概ね明らかになった。当時の社会的状況や今日へのつながりなどと併せて整理した。

■ ドナルド・ファーカーの思い

メルボルンの南に位置するローズバッドに、太平洋戦争中の対日戦闘で失明したロータリアン Donald (Don) Farquhar 氏がいた。彼は戦争の愚劣さを痛感し世界平和の重要性を周りの人々に説いた。とりわけ旧敵国日本との友好を確立することが最重要と考えた。そこでこの件について第 280 地区パストガバナーの Joseph (Joe) Bradbury 氏と相談した。かねてから青少年交換を推進し米国からの留学生の招致を成功させたブラッドブリー氏は、ファーカー氏を日豪親善の使節として 1961 年 5 月に東京で開かれる RI 世界大会へ彼を参加させることにし、その費用も募金で集めた。

世界大会に参加したドンは、質疑応答の機会に「自らがホストとなって日本の高校生を招待したい」と提案した。またドンは、会議開催中に彼を助けた日本人の親切さに感激し、大の日本びいきになった。

(資料 9：門司 RC 会報 1962.2 資料 24：ロータリーの友 1989 年 No.6)

■ 松本兼二郎 (かねじろう) とスリース・ラウリーの出会い

1961 年 5 月、1961 - 62 年の 370 地区ガバナーに就任予定の松本兼二郎氏 (八幡 RC) は、米国レークプラシッド開かれたガバナー研修会に参加する機会を得た。そこで松本氏は、オーストラリア 275 地区の同期ガバナー Sleath Lowrey*氏と同じディスカッション・グループに属し知り合う。帰路はサンフランシスコから横浜まで同じ客船の乗客となり親交を深めた。これがファーカー氏の提案への対応と、275 地区からの招待の伏線となる。

(資料 1：留学生募集の通知文の添え書き 1961.11)

*North Sydney RC、声楽分野の奨学金制度 Sleath Lowrey Rotary Scholarship に名を残す。

■ 国際ロータリー東京大会 1961

ラウリー氏が帰国の途上、日本へ立ち寄ったのは、他でもない同年 5 月 28 日から東京晴海で開催された日本初の国際ロータリー世界大会へ出席するためだった。彼とともに大会に参加した松本氏は、ファーカー氏の青少年交換の提案を聞いてこれを率先して引き受け、数ヶ月後のラウリー氏の提案にも対応することにした。

(資料 4：ガバナー月報 1962.1、資料 7：新聞記事、資料 9：門司 RC 会報 1962.2)

■ 派遣学生の選考と一方向派遣

松本氏は、まずファーカー氏の Rosebud クラブ (282 地区＝メルボルン周辺) への

派遣学生を一本釣りの形で久留米 RC 推薦による宮崎洋子を選考した。次いでラウリー氏からの提案による 275 地区（シドニー及び周辺）への招待を 370 地区内の全クラブに照会し、応募者を 275 地区の青少年交換委員長 Alan Mackay 氏（Cronulla RC）につないだ。予定招待枠は 3 名だったが、立花万紗子・竹下由美・宮本喜久男・中村数代・前田裕子・松浦尚子・小島敏子・濱恵介（願書受け付け順）の 8 名が同地区に受け入れられた。彼らが渡豪したのは、翌 1962 年の 1 月から 2 月にかけてである。なお 275 地区は、同年 268 地区と分区し、結果的に留学生も 4 名ずつに分かれた。

（資料 8：ガバナー月報 1962.2、資料 14：275 地区 1962 年大会資料 1962.3）

この年は、オーストラリアからの招待による派遣のみで、日本へのオーストラリア人青少年の招待はなく、言わば一方向交換であった。本来の双方向「交換」が実現するのは翌 1963 年、ケネス・エンジェルが受け入れられことによって実現した。

■当時の日本と生活

1961-62 年（昭和 36-37 年）ごろの日本の状況を振り返ると、「もはや戦後ではない」と言われた 1956 年から 5 年が過ぎ、「高度経済成長」が本格化する時期に当たる。58 年には既に東京タワーが完成しており、62 年には世界最大の石油タンカー日章丸が進水し、国産初の旅客機 YS-11 が初飛行した。1964 年の東京オリンピック開催を控え東京では目覚ましい都市開発が進められ、東海道新幹線も工事が進んでいた。北九州でも日本初の長大橋・若戸大橋が建設中だった。経済成長に伴う人口集中により大都市の住宅難は深刻で、各地で大規模な住宅団地が造成され始めていた。

一方、庶民レベルの生活は、今から見ればまだつつましいものだった。テレビ・洗濯機・冷蔵庫などの家電製品は急速に普及しつつあったが、自家用車を持つ家庭は僅かだった。生活環境としても水洗便所は大都市の一部に限られ、洋式便器も珍しかった。九州では風呂焚きの燃料は石炭や薪だった。

海外へ行くことができたのは、公用・商用・留学など特定の目的を持った人に限られていた。観光目的でもパスポートが発給される「海外渡航の自由化」はまだ数年先のことだ。さらに、外貨を購入するにも厳しい制約があり、海外旅行は憧れに満ちた夢のような存在だった。1 米ドルが 360 円、1 豪ポンドが 800 円の時代である。

■困難だった渡航・留学手続き

このような時代にあって、オーストラリア側から招待はされたものの、留学を実現するには経済的負担が重く、渡航手続きにも苦労が多かった。

現地での滞在費や学費はすべて受け入れ側の負担だが、送り出す側が負担する往復旅費が非常に高額だった。片道だけで 16 万円余という金額は、当時の若い勤労者の年収に相当した。これを負担してでも自分の子供を海外へ派遣し経験を積ませたいと思った親たちは、子女の教育や人間形成によほど熱心な方々だったのであろう。

なお、留学のための旅費支払などに必要な外貨を購入するには、文部省科学技術庁が東京で実施する留学生試験（英語による口頭試問）を受け合格することが原則だった。さらにヴィザの交付申請には、警察署が発行する無犯罪証明書の提出や広島日赤

病院での健康診断も条件づけられた。(資料 5: 在日豪州大使館副領事発、通知 1962.1)

■貴重な経験・文化受容

以上のような背景や状況のもと、困難が伴いかつ前例のない第一期派遣だったからこそ、留学中の体験は何もかも新鮮で、その思い出は貴重なものとなった。大変な思いをしながら掴み取った機会(幸運)という感覚があり、仮にホームシックになっても絶対に途中帰国できないことを覚悟していた。また、日本との通信は事実上郵便に限られ、現地では日本人との接触が減多にない状態だったので、否応なしにオーストラリアの生活に溶け込み、言語・文化・習慣などを素直に自分のものにできたと思われる。各人の体験内容は第 1 章、第 3 章に譲る。

■第一期生再発見

帰国後の元第一期派遣学生たちは、ロータリークラブの青少年交換担当者と継続的な関係を保ったわけではない。親しい友人どうしの個人的な交友関係はそれぞれに続いたが、組織立った連絡網や全体としての活動はなかった。

彼らを「再発見」し一つのまとまりを与えた主な人物が、神田憲**氏とオーストラリアの Stuart McDonald***氏である。2006 年まずマクドナルド氏が、地元ヴィクトリア州在住という関係もあり、最初にメルボルン地域へ招かれた宮崎洋子を苦心のすえ探し出した。結婚し姓が関本となっていた彼女の話から、同じ時期にシドニーには何人もロータリー留学生がいたことが神田氏に伝えられ、柳川出身の原田(旧姓立花)万紗子を通じて他のメンバーと次々に連絡が取れた。

そして 2008 年 5 月、東京で開催された第 13 回ロータリー日本青少年交換研究会・第 5 回 ROTEX 全国会議に全員が招待され、原田、竹下、篠崎(旧姓前田)、福生(旧姓松浦)及び濱が参加し、トークセッションに登壇した。

その後、2010 年 5 月に大阪で開かれた 15 回ロータリー日本青少年交換研究会および 2011 年 1 月に第 2700 地区主催により福岡で開かれた国際交流をテーマとしたインターシティ・ミーティングに濱が招かれ、当時の思い出や青少年交換への考えを報告した。それぞれの会議で使うレジュメを作成しながら、記録作成の必要性を強く感じた濱は、福岡に赴いた機会に、同期生の竹下と辻(旧姓中村)と記念誌作成の構想について語り合った。原田と吉田(旧姓小島)も電話で参加した。

このような経緯で半世紀前の派遣学生が今日の青少年交換の舞台に再登場し、本記念誌の実現にもつながったのである。

** NPO 法人国際ロータリー日本青少年交換委員会 (RIJYEC) 理事

***Rotary International Youth Exchange Committee (2005-08)

* * * * *

本誌に収録する体験録や当時の事情報告が今後の青少年交換にどんな役に立つのだろうか。日本ロータリー初の青少年交換がどのようなものであったかを記録することで、少なくとも、経験談を「歴史」に変える意義はあると思う。まずは元派遣学生の手記をお読みいただき、何かを感じ取り、有益な示唆を抽出していただきたい。

第1章

元派遣学生それぞれの思い出・感慨

Memories and thoughts of the past Exchange Students



(掲載順序は女性優先・旧姓五十音順)

コリマルの家族、友情、そして50年間の絆

吉田 敏子 (旧姓 小島)

Toshiko YOSHIDA (née KOJIMA)

■海外留学の実現と感謝

この記念誌のため、手元に残っている資料や手紙類を読み返し、ロータリー会員の方々の世界平和への祈りの中で私たちに留学の機会が与えられた、ということ強く感じた。戦後の日豪両国関係がまだよくなかった時代に、敵国だった日本の学生を自分の家庭に受け入れようというホストファミリーの勇気に尊敬の念を禁じえない。日本から海外への渡航者数も制限がある厳しい時代に、何の特技も持ち合わせていない高校生の私が留学出来たのは本当に幸運なことだったと思う。自分のことだけで精いっぱいだった若い日の私が期待に応えられたか、役目を十分に果たせたかといまだに確信がもてないが、この機会を借りてご尽力下さった関係者の皆様に心からのお礼を申し上げたい。

また、その頃の我が家の経済状況を振り返ってみると、苦しい中、私の希望を叶え、送りだしてくれた両親にも感謝している。父は当時石炭の卸業を営んでいた。炭鉱に行き買い付けた石炭を貨車で運び、小売商に販売、また、門司港に入港する船舶に燃料の石炭を積み込むのが仕事だ。戦後しばらくは石炭が主要なエネルギー源だったが、船舶も家庭用の燃料も石炭から石油への転換を図っていた時期だったため、父の事業は勢いを失い始めていた。上の学校に行けば掛かるだろう費用を渡航費に充てるからと言ってくれたが、両親にとっては相当の負担だったろう。

一年間の小遣いとして100ドル(=36,000円、300ドルが国の決めた限度額)を貰い、2月9日他の5人の留学生とともにカンタス航空に乗りこみ、香港、マニラ、ダーウィン経由でシドニーに向かった。

往復の航空運賃は留学生側の負担で約32万円。1964年に就職した時の私の初任給が9,000円で、3年間の給料分だったことを考えると、その重さが推測できる。



門司RCで講演される松本ガバナー、出発前の1月18日
私も父と学校長と一緒に拝聴(講演録は資料9に)

翌朝シドニー空港に到着すると、会長の Mr. Tipper (ティッパー) と7月から会長になる Mr. Jarratt (ジャラッタ) が家族とともに迎えに来てくれていた。空港からホストクラブの町 Corrimal (コリマル) へ向かう途中、国立公園の美しい森の中で、オーストラリアらしいリラックスした歓迎ピクニックランチをしてもらって、私のホームステイの生活が始まった。

到着後間もなく、ジャラッタ家で開催されたパーティ

Girl from Japan flies in with a home-made tartan



Miss Toshiko Kojima arrived in Corrimal from Moji Port, Japan, on Saturday in a spotless white blouse, which she had worn for the seventeen-hour journey from Tokyo, and a Black Watch tartan skirt, made in Japan.

She brought a kimono, her mother makes them, but she wears them only sometimes in summer.

Toshiko's smile and giggle, both lovely and frequent, must be evidence of a most equable temperament, since she had only an hour's sleep on the entire journey and before she left home it was snowing.

She is one of the five girls in a party of six High School students brought to Australia by Rotary.

The others will stay around Sydney, while Toshiko will attend Corrimal High School and spend two months each with local Rotarians.

... AND SHE'S REALLY CUTE

Her first hosts, Mr. and Mrs. L. Jarratt, of Powell Avenue, Corrimal, have two daughters, Wyvern, aged seventeen, and Robyn, aged fifteen, and Toshiko's brand new Japanese-English dictionary passed rapidly between the three.

Toshiko wants to become an English language teacher and she feels "very lucky" to be chosen to come to this country and improve her English.

She likes to play tennis, to sing and to play the ukulele but, she giggles, "not good".

She can also do one Japanese dance and she loves to paint, in oils, she says, and "not Japanese style". Her eldest brother, an art teacher, helps her with this.

She had time only for rapid impressions of Australia, but the vast expanses of red earth under the plane from Darwin amazed her. In Japan, she says, "all green".

Rotary are holding a meeting next Wednesday night to which members have been invited to bring their teenage children to meet Toshiko.

PICTURE: Toshiko enjoys a song with two new friends, Wyvern Jarratt, at the piano, and Jill Fenfold.

■暮らした街・ホストクラブ

私が暮らした Corrimal は、Sydney から海岸沿いに約 70km 南下したところにある小さな町で、山と海の間というアボリジニーの言葉の由来*どおり、前は水平線が丸くもりあがって見えるような太平洋が広がり、後ろは Broker's Nose (ブローカーズ・ノウズ) と呼ばれる山が遙か向こうに見え、その山裾まで広がっている住宅街の屋根が緑の中に赤く並んでいた。今でも海岸線は昔のまま、歩くたびにキュッキュと音のする白い砂浜のある美しい町だ。(*アボリジニーの戦士 Kurimul からという説もある)

Corrimal は Wollongong (ウォロンゴン、当時の人口 16 万人) という都市の一部に当たる。ここは近くの炭鉱からの石炭積み出し港であり、また、基幹産業の製鉄所があるという、出身地の北九州市と似た成り立ちの地域である。

Corrimal Rotary Club は 1959 年に設立されたばかりで、とても熱気にあふれていたように思う。会員の年齢層も若くホストペアレントは 30 歳代が多かった。毎週水曜日の夜に会合を開き、例会の 3 カ月に一度は婦人同伴、または家族同伴の食事会を開催し、私も家族と一緒に参加させてもらった。彼らの職業は Corrimal の商店主 (電気器具の販売店、食料品店、薬局、タクシー会社、洋服店) や、銀行支店長、保険代理店、炭鉱の災害救助所長と多彩だった。



コリマル R C、家族同伴の会で 左 : Tipper 会長と、右 : 浴衣姿を披露



コリマル R C、家族同伴の会で
会食・懇談

■ホスト家族との生活

最初の家族 Jarratt 家は両親と 17 歳、15 歳の娘、12 歳の息子の 5 人家族。長女の Wyverne (ワイブン) と同室で最初の二カ月を過ごし、生活の仕方のいろはを彼女から教わった。忘れられないのはお風呂の入りをデモンストレーションしてくれたこ

と。後年、お返しに日本の温泉の入り方を私が伝授する機会があって、お風呂に
関しての楽しい思い出になった。食事の後片付けは Wyverne、次女の Robyn（ロ
ビン）と私の 3 人の仕事だったので、お皿を洗ったり拭いたりしながらおしゃべりしたり、2
部に分かれて合唱したり、レコードを聴いたりした。息子の Philip（フィリップ）は
何を担当していたか記憶がないが、どこの家庭でも家族の一員としてだれもが仕事を持
っていた。食事の準備の手伝い、後片付け、洗濯物を取り込むとかたたむ、新聞や牛乳を
外に取りに行くなど年齢に応じた役割をこなしていた。



到着直後、Tipper さん・Jarratt さん両家族とともに

その後、コリマルクラブ会員の 5 家族、隣の Bulli（ブルアイ）クラブの 1 家族と全部で 7 家族と生活を共にした。最初の家庭だけは落ち着くために 2 カ月、そしてその後は各 6 週間の滞在となった。一家庭からだけでは見る視点が偏るということで留学生は複数の家庭を周ると聞いていたが、コリマルでは引き受け希望家庭が多かったので 7 家庭にもなったと聞いている。

家庭生活：

英国からの移民が大多数を占めていたため、英国色の濃いものだった。オーストラリアが現在の多文化国家になるのは 1973 年に白豪主義を撤廃してからになる。午前 10 時頃、午後 3 時頃のお茶の時間には家庭でも、学校でも、職場でも“Let’s have a cuppa”（お茶にしましょう）とゆっくりとお茶の時間を楽しんでいた。

2010 年にオーストラリアに行った時、コーヒー文化に影響された彼らの生活では、ティーポットに茶葉を入れて皆同じ紅茶を飲む習慣は消えていた。幾種類ものティーバッグから好みの一つを選びカップに熱いお湯を注いでもらうというのは、あの時代とはちょっと違うお茶の時間だった。

子供の躾：

日本では小さい子には甘いと言われ、電車の中で大騒ぎしている子供を見かけたりするが、オーストラリアではマナーの悪い子供を余り見かけなかった。何も分からない小さい子には厳しく教え込み、大きくなるにつれて緩やかにというのが両親の方針だった。悪いことをすれば何がいけないのかよく話したうえで、お尻を叩く、食事を抜く、部屋から出さないというお仕置きなどもよくあった。大人の生活と子供の生活

の時間がはっきり分けられていて、10歳くらいまでの子供は夜9時には就寝させられていた。1歳の赤ちゃんでも自分の部屋に一人で寝かされているのを見て、自立心がこういう風に養われるのだと納得した。

テーブルマナー：

一番厳しくしつけされていた。食卓に着いたら両親の許可を得てからしか立つことはできない。遠くにある塩など無理に手を伸ばして取ってはいけない。音を立てて食べるはいけない。肘をテーブルにつかない。背中をまっすぐして腰かける。何かしてもらったら必ず「ありがとう」の言葉が出るように、などなど、食事の度に両親からの注意が飛んでいた。他の人の食べるスピードに合わせてながら、会話を楽しみ、そして上記のマナーを守りながら食べるのは社会生活をする時に必要なこととして、家庭の重要な躰とされていた。日本でも食事時の、特にお箸のマナーは注意されていたけれどもそのマナーは全く役に立たず、最初はフォークとナイフとテーブルマナーに悪戦苦闘した。

男子の躰：

男の子には女の人をいたわる、保護するという気持ち（chivalry 騎士道）を小さい時から植え付けるようにしつけをする場面がよくあった。ホストファーザーが5歳の息子に「ちょっと席を外すので、その間敏子の面倒をみてなさい。」などと言い、「わかった」と答えた男の子は、父の居ない間18歳の私の話し相手となり気遣ってくれる。

エレベーターなどで女性を最初に(ladies first)というエチケットに慣れるのには時間は掛からなかったけれども、これは日本に帰ってから元に戻るために頭のスイッチを切り替えるのに時間が掛かった。西洋と日本の人たちがミックスされた場所でどちらの習慣に従うのか戸惑うことが今でも多い。

食事：

さすがに牧畜の盛んな国だけあって牛乳やチーズ、バターなどが豊富で美味しかった。毎朝配達される1パイント（0.57リットル）の牛乳瓶の上部は牛乳が濃厚なためクリーム状になっている。アメリカから支給された粉ミルクを学校給食で飲んで育った時代の子供にとっては夢のような味がした。特に、ミルクバー（軽食のコーナー）で目の前で好みの味（例えばチョコレートやブルーベリーなど）とミルクを入れてミキサーで作るミルクシェイクを最初に飲んだ時の美味しさは忘れられない。

肉類が好きだったのでオーストラリアの食生活に関して全く好き嫌いはなく何でもよく食べたが、その結果すごく体重が増えて洋服のサイズが合わなくなって困った。戦後の日本では食糧事情が悪いため、太っていることは豊かなこととしか考えてなかったし、全くダイエットについて気にもしていなかったための大きな失敗だった。

ハグとキス：

習慣で大きな違いはハグやキスで、日本では成人した家族同士でハグするような身体的な接触は少ない。家族同士、または、友人同士の軽いキスを見るだけで、最初の

頃はどぎまぎして顔が赤くなっていたので、ホストの家族から笑われていた。1年間の生活が終わって私が感じたのは、握手したり、ハグしたりという相手の体温を感じることは、言葉と同じように素敵なコミュニケーションだと思った

なじめなかったこと：

最後までなじめなかったのは二つ。ひとつは、家の中でもずーっと靴を履いて過ごすこと。家の中で裸足や靴下のままでいると靴を履くようにと注意を受けた。最近は靴を脱いで家の中に入るといふ人たちがオーストラリアで増えているようだ。汚い泥を持ち込まないという衛生面かららしい。もうひとつは、お風呂。シャワーだけでも問題はなかったけれども、日本式のお風呂がとても恋しい時があった。

留学制度：

ロータリーの留学制度の最良の点は家族と一緒に家庭生活を1年間過ごせることにあった。家族と家庭生活の日々を共有することは習慣、言語、文化を学ぶ上で最良の方法だったし、家族との深い友情を育てる上でもとてもよかった。困ったことが起こればホストペアレントにすぐ相談できたし、子供たちにも手助けしてもらった。生活を共にするというのは何気ないことだけれども大きな意味を持っていて、その後ずっとホストファミリーと本当の家族のような友情を育むことができたのは共に暮らしたことが大きい。

■ 学校生活、勉学・行事

地元の男女共学の公立高校 Corrimal High School の4年生に編入された。高校は5年制で、3年（中学3年）までが義務教育、5年卒業時に統一試験が行われ、その結果次第で大学への道が開かれていた。

履修科目：

クラス全員が同じ科目を履修しなくてはならない日本の高校と違い、自分の興味のある科目を選択することができた。私は英語（国語は必須）、歴史、美術、生物、数学Ⅲ、家庭科を選択した。（年の途中で家庭科から数Ⅲへ変更）試験は年に2回。英語はとても難しかったので免除してもらい、他の科目については試験を受けた。課題が提示され論文形式で書き込むもので日本の〇×式の試験は全くなかった。美術については実技と美術史。



学校の制服姿で、Jarratt きょうだいと一緒に
左から Philip、私、Robyn、Wyverne

制服：

冬はブラウンのブレザー、ジャンパースカート、薄いブルーのワイシャツにブラウンとブルーの縞のネクタイ。四角い皮のカバン。夏はブラウンの麻のジャンパースカートと薄いブルーの半袖シャツ。

通学：

学校までは自転車で通学したり、遠い所からは自動車で送り迎えだったりした。

時間割：

午前中は2時限の授業の後の recess (休憩) では家から持ってきたビスケットや果物を食べ、その後2時限の授業。昼食は、家から持ってきたサンドイッチまたは売店で買うことも出来た。そして午後は2時限の授業。水曜日は昼から全校体育で、好きなスポーツを申請してグループで運動した。特別だったのは宗教の時間があったこと。各教会の牧師さんが学校に来て、生徒は宗派に分かれて自分の牧師さんのところに集まる。私は毎回違う教室に参加して見学させてもらった。教室の掃除は午後授業終了頃に掃除をするプロの人たちが来ていた。

学校行事：

夜、各種の発表会で父母などに公開された。体操の上手な生徒の演技を見せるジムナイト Gym Night、演劇や音楽の発表をする文化祭など。文化祭では、シドニーにいる留学生(立花さん、前田さん)にお願いして来てもらい日本の歌を披露した。終業式にあたるスピーチナイト Speech Night では、学校生活を共にした生徒やお世話になった先生方に感謝の気持ちとお別れを述べた。



クラスメイトと、左：Social Night (ダンスパーティー) の後 右：Speech Night (終業式) 記事

以上の学校行事は日本の高校でも似たようなものがあるが、絶対に無いものは学校のダンスパーティー。体育館に生バンドが入り男子はスーツ、女子はドレスに着飾って集まってきて、普段学校では許されていないメーキャップもしているし、ハイヒー

ルも履いている。最近の日本の高校生の化粧は一般化しているようだが、その頃の私には全く考えられないことだった。学校教育の一環として社会生活に必要なことを学ばせることが方針であり、ダンスや社交の場でのマナーを学ぶ場となっていたのだ。社会に出た時に社会生活できるように学ぶ機会を作るという全人的な教育をするオーストラリアを日本はもう少し学んで欲しいと思った。

■日本との通信事情

電話：

国際電話は非常に高価でオーストラリアに滞在中に日本にいる家族と電話で話したことは一度もなかった。私がオーストラリアに無事到着したとホストクラブから家族への連絡も電話ではなく電報が使われた（資料-11）。

国内の電話代も市外通話は高価で、シドニーにいる他の留学生と自由に電話で話すということは無かった。「2 シリング分だけ話していいよ」とホストの方から許可がでると大喜びし何回か電話させてもらったことがある。その地区には日本人の居住者が居なかったので留学生と電話で話すというのは日本語を話すことが出来る貴重な時間だった。（1 シリングは 1/20 ポンド、1 豪ポンドは 800 円）

郵便：

日本との通信手段として私が見えるのは郵便しかなかった。心配をしている日本の親たちに自分の経験を伝えたいという思いがいっぱいだったので、週に一度は家に手紙を書き、友人たちには手紙を貰うたびに返事を書いていた。親に書き送った自分の手紙を今回読み返してみても驚かされるのは字の小ささだ。一通の中になるべく多くを書こうと思ってだろうけれどもびっしりと書いてある。手紙よりも安い航空書簡を使うことも多かったが、毎週ホストファミリーから支給されるお小遣い 10 シリングは切手代にほとんど消えていたように思う。

■喜び・驚き・悩み

驚き：

生活水準の違いは大きかった。日本では車を持っている家庭などまだ少数だった時代に、地域が広いので車なしでは生活できない事情もあるが、2 台の車を持っている家庭も多かった。家のサイズが大きいこと、キッチンには人が歩いて入れるくらいの大きな冷蔵庫、洗濯室には大きな洗濯機、水洗トイレ、ベッドルームに付属しているトイレ、広い芝生の庭など。移民の夢は芝刈り機で芝を刈れる家に住むことと聞いたことがあるが、どこの家の庭も芝生、歩道の舗装以外は芝生、学校のグラウンドも芝生で公園のように美しいと思った。

悩み：

私が Corrimal に住むことになってそこで日本人に会ったのは二人。一人は戦後すぐにオーストラリアの軍人と結婚した女性。もう一人は骨折のため入院した船員の通訳に行った時だけ。日本人との接触がないことは覚悟していたけれども寂しい時もあった。そう感じたのは、私だけがシドニーから遠く離れた町に住んでいた状況にもあっただろう。それに英語で十分に話せなかったこともあって、シドニー近郊にいた他の留学生に会って日本語を思いっきり話せるのはとても楽しみだった。竹下さん、立花さん、前田さん、濱さんのホストファミリーが招待して下さったこともあるし、竹下さんの所には何度も泊まらせてもらい日本語のおしゃべりを満喫した。留学生のみなさんありがとうございました。

悲しみ：

第一次世界大戦以降の戦争に従軍したオーストラリアとニュージーランドの兵士に敬意を表するアンザックデーANZAC Day (4月25日)の祭日が迫ってきた頃、ホストマザー (Mrs. Jarratt) からその日はなるべく出歩かないようにとの助言を受けた。第二次世界大戦で日本軍からひどい扱いを受けた人や、戦死した人の家族もいるし、日本に対する憎しみをまだ抱いている人もいるので、危害を加えるようなことは無いとは思いますがもしもの事を考えると安全な所に居てほしい、ということだった。Corrimal は小さな町で、私のことを知っている人は多く、私が知らない人からも「トシコ、今日は元気？」と声をかけられるほどで、一度もいやな目に遭ったことはなかった。その日も予想通り何事もなく過ぎた。中学でも高校でも歴史の教科で近代史を学んだことは無かったし、連合軍の一員であること以外オーストラリアと日本の戦時中の関係については殆ど知識がなかった。

5番目のホスト Mr. Hamment から Cowra (カウラ) の捕虜収容所事件の話を聞いた時の驚きは忘れられない。捕虜になることは恥辱と考えていた日本人捕虜が死を覚悟で脱走し殺されたことは、オーストラリアの人々に大きな衝撃をあたえたようで、捕虜に対する考え方の違いが大きな悲劇をもたらした。私は何も知らないことが恥ずかしく、戦場でもないのに悲惨な死を選んだ人たちのことを思うと悲しかった。日本には戦争を放棄したという条項のある憲法があるのもう二度と戦争はしないと云えたのは少し自分に対する慰めになった。しかしその後間もなく日本の海上自衛隊の艦がシドニーに入港した時、新聞には Japanese Navy と書いてあった。戦争はしないはずなのにこれは何だろうと不安に思ったことを覚えている。

困惑：

宗教が日常生活に色濃く反映されていて、各家庭では新教、旧教、ユダヤ教などそれぞれの信ずる宗教について話してくれるし、当然あなたの宗教は何ですかという質問がくるがこれが一番困った。宗教は持っていないというのは不謹慎なことだという雰囲気だし、仏教徒だとは言ってみても日曜日毎にお寺に行くわけでもなく、教えについてはほとんど何も知らない。また、神道の影響も受けているので神社について話

そうとしても、十分な英語力も知識も無かったので、きっと何の説明にもなってなかっただろう。

驚き：

ホストのご夫婦がどの方たちもパートナーとして対等であったこと。私の父は明治36年生まれ、母は大正元年生まれで、新聞を読むのも、風呂に入るのも、何事も家長の父が一番という明治風な家庭だったので、2番目の家庭のカー（Carr）家でこんなことを初めて目にした時はびっくりした。Carr 夫妻が二人とも椅子に座ってお茶を飲んでいる時に、Mrs. Carr が「向こうの部屋の本をとってきてくれない？」と言ったら Mr. Carr が“OK”と言って取りに行った。家では父が母にはそんなことを言うかもしれないが、その逆は絶対ないと思った。家長制度は新しい憲法では無くなってはいたけれども私の家ではそのまま、夫婦の関係は上下関係だと思っていたのだ。

喜び：

出会う人々、食べ物、見るもの何でもが面白く、刺激に満ちていた。本当に新しい経験満載の一年間だった。

英語に関してはとてもおぼつかないレベルだった。私に向かって話す時はだれもがとてもゆっくり話してくれ、それでも分からない時は辞書をめくりながらの会話が多かったし、学校での友達同士の早い会話はまるで鳥のさえずりの様に響いていた。3ヶ月くらいたった頃のある時そのさえずりがふと会話として耳に止まりだした時は嬉しかった。自分の書いた手紙を読み返していると、その頃から英語を直訳したような日本語になっているので可笑的。

後年、オーストラリアンナショナルラインという船会社に2年、(財)北九州国際交流協会に10年足らず働いたこと、公民館や自宅などで英語を教えてこられたのも、その頃の英語の基礎があったからだと思う。

■個人が代表する国と文化

お世話になった各家族は移民の何代目かになるので家族の背景は様々だったし、沢山の人たちから興味深い話を聞いた。世界の歴史や宗教の背景を身近なものとして学んだ。ユダヤ人の Mr. & Mrs. Reed (リード) はドイツ人の友人が助けてくれて、ナチの手から危機一髪で逃れオーストラリアに移民して来たご夫婦だった。まるで映画の中の話のようであった。家の中では英語、ドイツ語、ヘブライ語が飛び交っていて、自分たちのルーツであるユダヤ教について熱心に話してくれたので、今でもユダヤ人といえば Reed 一家を通してイメージする。

Corrimal の友人の中に、日本といえば私を思い出し、私を通して考えてくれている人がいたらいいなとも思う。人の話を聞く、また自分のことを話すというのが人間関係の第一歩だというのがその頃学んだことで、今も一番大切なことだと思っている。

親善が最大の課題であった留学生活を送るにあたって両親からは、「日本人を代表する人だと思って心して行動しなさい。」と助言され、その言葉をいつも私の中に抱え込んでいた。自分を律するためにもよいアドバイスだったと感謝している。もう一つの助言は「先祖のことについて質問してはいけない」ということ。移民してきた四人の先祖にまでたどれることは今のオーストラリアの人々にとって誇らしいことなので、今となっては笑い話だが、その時はその助言も真面目に守っていた。

■今に続く交友関係

初めてオーストラリアを再訪したのは 1990 年のこと。同年 4 月に両親を続けて亡くした時、ホストペアレントの方々から「私たちを本当の親と思って」という心のこもった慰めの言葉をいただき、(既に亡くなった方もあったが) 彼らの命のあるうちに訪ねたいと強く思った。帰国してひと月して Mr. Jarratt の訃報を聞いた。

7 家族のうち現在も生存しているホストファーザーは残念ながら一人もいないが、ホストマザーは 2 人いらっしやる。2010 年に夫とオーストラリアに行った時、そのお二人 Mrs. Jarratt と Mrs. Hamment (ハマント) に何年かぶりに再会した。退職者村 retirement village 中の一軒家(客室もある)に住んで、出来る限りのことは自分でして、出来ないことはその施設のサービスを利用するという生活を二人とも選択していた。独立心が強く、自立した生活を大切にしてきた二人のお母さんたちの強い生き方を私はずっと尊敬してきたが、これからも手本にしたい。2010 年の旅行はそれまで交友の続いているホストファミリーの子供世代も訪問するのが目的だったので、散らばっている家族を訪ねて回った。Brisbane の Paul Tipper は 7 番目の家族の長男で当時 10 歳。2002 年に妻の Margot とハネムーンに来日し、我が家に一週間泊まったので、8 年ぶりの再会となり、彼の家で 10 日間泊めてもらって川下りのカヌーや海でのサーフィンを楽しんだ。

Wyverne & Keith Smith (一番目の家族の長女夫妻) は 2005 年二人で来日し、山の中の我が家で 3 週間過ごした。彼らの運転で Brisbane から自宅のあるビクトリア州オルベリー (Albury) へ向いながら Dianne Tipper(8), Jane Hall (19), Anne Findlay(8), Robyn Jarratt (15), Beverly Hamment (8), Douglas Hamment (10) (カッコ内は当時の年齢)を訪ね、懐かしい友人たちとの再会を喜び合った。小さい町のロータリークラブの会員だった家族同士も知り合いで、訪問先では Corrimal の人々や昔の出来事などで話が弾んだ。

ホストファミリーと私のこの 50 年という長い間の友好関係が築けたのは、家族とともに暮らすというロータリークラブの留学制度のお陰だ。若い世代に新しい経験をさせるだけではなく、滞在した国に家族のような絆という種をまき、その小さい種が人々を繋ぎ、平和を紡ぎ出すのだと思う。ロータリークラブのこの素晴らしい留学制度がずっと続くことを祈りたい。



1963.1 私の帰国を伝える新聞記事
コリマル RC の送別会、Jarratt 会長と

* * * * *

下：1990年に初めてオーストラリアを再訪した際、Jarratt 夫妻との喜びの再会

Corrimal Rotarians on Wednesday night said "sayonara" to Japanese pupil Toshika Kojima, 18, at a Rotary dinner at Corrimal Surf Lifesaving Club.

Toshika, a pupil at Corrimal High School since February last year, arrived in Australia under Rotary District 275 scheme to sponsor an Asiatic student's visit to Australia.

She was given an official "goodbye" before she returns home next Wednesday after having lived with various Corrimal Rotary families.

The president of the club, Mr Lew Jarratt, said on Wednesday night that the exchange scheme had been "extremely successful".

He said Toshika had made many firm friends with teenagers her own age.

She had been so popular that many of her friends had wanted to attend the dinner.

Mr Jarratt said the exchange scheme had done "a magnificent job of goodwill."

People's views about

• "SAYONARA"

Toshika is going home

Japanese people had been greatly changed by Toshika's behavior and friendliness.

Attractive Toshika, wearing an all-white dress, white high-heeled shoes and a single string of pearls, commenting on her stay in Australia, said: "I enjoyed every moment of my stay in your country very much. "I am glad to go back to Japan, but also very sorry.

"I have made so many wonderful friends."

Toshika, hardly able to speak Australian when she arrived, spoke with a slight hesitancy, but with a distinct Australian accent.

After the dinner, Mr Jarratt presented Toshika with a typically Australia-

lian gift to take back to Japan.

Sixty-four people were at the dinner.

A committee-member of the international committee of the club, Mr Warner Reed, said a Japanese schoolgirl who stayed at his house, Yasuki Hijikata, had recently written and announced the birth of a baby, Tadaaki.

He had corresponded with her regularly since her one-night stop at his home with his family.

Mr Reed's daughter, Vivian, was also at the dinner.

In the picture, the president of Corrimal Rotary Club, Mr Lew Jarratt, presents Toshika with a gift on behalf of the club.

—Memories of a warm welcome bring ex-student back

Toshiko still calls Australia 'home'

By

JULIE BEUN-CHOWN

For Toshiko Yoshida, home is where the heart is.

And for the 46-year-old Japanese woman, her heart is in Corrimal.

Originally one of the first Japanese exchange students brought to Australia in 1962 by the Rotary Club, Toshiko began her Australian love affair as a frightened 17-year-old with a sketchy command of English.

She spent a year at Corrimal High School, learning about the "lucky country", the English language and Aussie tucker.

Although she returned to Japan to start her adult life, the demure Japanese woman never forgot the friendly Australian people or her "parents" in the Illawarra.

Now, 29 years later, Toshiko has fulfilled her heart's desire and returned



● Home is where the heart is for 46-year-old Toshiko Yoshida. The former Japanese exchange student this week returned to Corrimal after 29 years to visit her Aussie "parents", Margaret and Lou Garrett.

"home".
"I have come just to see my parents here. I don't care if I don't see anyone else or anything else. I haven't seen them for almost 30 years — it's a long time but it seems so short," she said.

The 46-year-old architect, housewife and mother

says she feels time has stood still in her beloved Corrimal, but not in Japan. "Corrimal hasn't changed very much — there are more houses, but the people haven't changed. They're still warm and friendly and I feel at home.

"But the big change has been between Japan and

Australia. Australia was a rich country compared to Japan at the time. There was lots of space and money. But Japan has changed too, now."

Lou Garrett, Toshiko's foster father, said the petite girl he first saw in 1962 made a big impact on his life and community.

"She was the first student we had and it was a wonderful start. She came here at a time after the war when there was still a lot of enmity in people about the war. But she did a lot to change people's attitudes," he said.

Mr Garrett, now 74, and his wife Margaret, 67, have

taken in more than a dozen students from around the world since the early 1960s.

Although Toshiko plans to return to Japan in two weeks, she first wants to convince Lord Mayor Alderman Frank Arkell to twin Wollongong with her southern Japanese city of Kitakyushu.

留学当時の思い出と今

竹下 由美

Yoshimi TAKESHITA

■ 応募の動機、決断

1961年の終わり頃だったと思いますが、小学校からの友人の原田（立花）万紗子さんから電話で「ロータリークラブで交換留学の話がある」という第一報を受けました。

まず、オーストラリアという国の存在もおぼつかなく、とっさに「オーストラリアって何語をしゃべると？」と尋ねたくらい、話される言語も知らない状態でした。

当時、高校3年生だった私は、日本で進学するより海外で英語を学びたいという気持ちがありました。交換留学の話聞いた時「これがチャンス」と思ったのです。万紗子さんが応募するつもりがあることを聞いて心強く思ったこともありました。

当時は海外の情報も乏しい時代で、今思い出しても大変無謀な決断したように思います。実際に出発するまでの手続きはかなり煩雑で、出発の数時間前にやっとビザを取得できたことをよく覚えています。



東京羽田発・シドニー行きの QANTAS 機へ乗り込む

左列上から：小島・立花・竹下・前田・松浦、右上：濱

■ ホストクラブ、ホスト家族との生活

私はシドニーの都心のすぐ南に位置するボタニーのロータリークラブ（Rotary Club of Botany）に受け入れられました。このクラブは工業地区にあったため、ホストファミリーは通学可能な地区在住に限られましたので2家族のみでした。しかし、学校が休みになると他の家族にも招待され楽しく過ごしました。ロータリアンの皆さんの生活レベルはオーストラリアの中でもとても裕福で、田舎町から行った私にとっては大きなカルチャーショックでした。

ロータリークラブの行事でいちばん記憶に残っているのは5月に開催された地区のAnnual Ball、いわゆる舞踏会です。出席のロータリアンの皆様は正装で、私たち留学生の女子は着物、男子はタキシードを着て緊張したことを思い出します。

日本の家族へは毎週のように手紙を書いていました。当時、国際電話はかなり高額でしたが一度だけプレゼントとして電話させてもらったことを覚えています。



バーベキュー、ホストのミルズ夫妻

■ 学校生活・勉強

やはり英語力不足のため授業についていくのはかなり難しかったと記憶しています。日本でも女子校へ行っていましたが、生徒が女子だけの規律が厳しい環境には違和感ありませんでしたが、学校以外では日本よりかなり自由だったと思います。

学校ではユニフォーム（制服）を着て高校生らしく見える同級生たちは、週末になるとおしゃれをしてきれにお化粧して、実年齢は私の方が年長なのに、彼女らの方がすっかりお姉さんに見えたのが驚きでした。



学校の同級生（前列左端が私）



学校の友人たちと

■ 余暇・休暇

学校の休み中、ゴールドコーストへ2週間招待していただきました。昼間、子供達はプールで泳いだり、ビーチへ行ったり、特に何をするでもなく陽に当たってゆっく

り過ぎました。日本では長期休暇をとって家族旅行する余裕のなかった時代だったので、休暇・余暇・週末のすごしかたでは驚くばかりでした。

週末にはよく万紗子さんのホストファミリーに声をかけていただいていっしょに旅行しました。ブルーマウンテンへ行ったり、パームビーチの近くにある別荘に滞在したりしました。私のホストファミリーとは、親戚が経営する牧場への旅が思い出されます。シドニーから北へ5時間くらい行った小さな町の郊外に広大な牧場を持っている家族でした。早朝に乳牛の乳しぼりを見学したり、初めて乗馬の体験をして広い草原を走ったりしました。

■喜び・驚き・悩み

嬉しかったこと驚いたことなどは、たくさんあります。家族との時間をとても大切にし、余裕のある生活の中で恵まれない人へのボランティア活動も盛んに行われていることを知りました。私のホストマザー、ジュディは、毎週1回、恵まれない人への「温かい食事」を配る活動を永年続けていました。日本ではまだ個人が参加して活動することは知りませんでしたので、とても印象深く私の心に残りました。

今思えば、無知だった私を受け入れた頂いたオーストラリアのみなさんの心の大きさに感謝するばかりです。その時に受けた“hospitality”は私の宝物になりました。

一方、当時はまだお互いの国をよく知らない状態でした。第二次世界大戦後まだ17年という中で、実際に戦地で日本軍と戦ったり、捕虜になったりした経験をお持ちの方も多かったので、いやなことも経験しましたが、私の中では楽しかったことだけが思い出されます。ずっと後になって戦争中のオーストラリアとの戦いのことを知り、改めて両国の歴史に関心を持ちました。

■帰国後の生き方

帰国の日、空港で帰りたくない気持ちで泣いたことを思い出します。

1年間のオーストラリア滞在は私の人生の方向に大きな影響を与えました。数年後、就職を希望していた時、カンタス航空の福岡支店開設で社員募集があり、留学が有利になって就職ができませんでした。その後、再度オーストラリアへ渡り、現地の航空会社で2年間働きました。帰国後も外資系航空会社で働くことができ、オーストラリアへは休暇を使って時折訪ねました。

英語の勉強も続けてきましたので、海外の友人ともEメールのやり取りをするなど、日常会話では不自由しませんが、これも1年間の留学経験が基礎になっています。私の人生の中では貴重な経験でした。この経験がなければ私に人生もずいぶん違ったものになっていたかと思います。

オーストラリアで受けた恩恵はどこかでお返しをしたい、という気持ちはずっと持ち続けてきました。まだ、余力があるうちに退社しましたので、ボランティア活動を始

めることができました。例えば、子供の国際交流団体では、各国代表の11歳児（男子2名、女子2名）が、21歳以上のリーダー、開催国のスタッフ（5、6名）と4週間の集団生活を送るプログラムがあります。これを通じてお互いの国のことを学び、友達を作るのです。スタッフとして参加した私は大変でしたが、新しい経験をしました。

また、2ヶ国間でホームステイをしながらお互いの文化を経験するプログラムでは、リーダーとしてタイに17日間滞在し、観光旅行では得られない体験をしました。

その他、老人施設でのボランティア活動など自分に出来る範囲で続けていますが、時間の使い方、新しい友人との出会いなどに留学が大きな影響を与えました。これもオーストラリアでの経験がなければ、やっていなかったような気がします。

■今に続く交友関係

50年前に知り合った人、数人とはクリスマスカードの交換をしています。Eメールをやり取りしている人もあります。暫く、オーストラリアは訪問していませんが最後に行ったときの印象はとても多民族になったということでした。半世紀の間に両国間の交流も身近になり気軽に旅行できるようになりました。



万紗子さんと、彼女のホストの娘さん夫婦(ウエンディ+グラハム・サウスウェル)と伴に

半世紀前となった1年間のオーストラリア滞在はとても貴重でした。そして私の人生の宝物になりました。改めてご尽力いただいた両国のロータリアンの皆様に心より感謝いたします。そして、私を新しい世界へ送り出してくれた両親にいつも感謝の念を持っています。

ほんとうにありがとうございました。

青春時代の1年間

原田 万紗子 (旧姓 立花)

Masako HARADA (née TACHIBANA)

あの東日本大震災から1年が経ちました。大震災の直後、世界中の沢山の友人から温かい応援のメッセージを頂きました。その中には50年前、第1回ロータリー青少年交換学生としてシドニーに渡りホストファミリーとしてお世話になった方達もおられました。思いもかけない国難とも言われる今回の大震災は50年前には想像も出来ないスピードでその様子がニュースとなって流れ、我が事のように心配して心を寄せて頂きました。あれから50年。人生で最も澁刺として輝いていた青春の1年間を、明るく健康的なオーストラリアのシドニーで過ごすことができたことは何にも替えがたい宝物となり、私の人生に常に誇りとある種の責任を感じさせてくれています。

地元の高校伝習館の3年に在籍していた当時、ロータリアンだった父の勧めでシドニーに交換留学生として行くことにしました。若さゆえの怖いもの知らずで渡豪した私達をオーストラリアのロータリアンの方達は大変温かく親切に迎えてくれました。今にして思えば、英語もろくに喋れない日本人学生を受入れたホストファミリーにとってはさぞかし大変だったのではないのでしょうか。私の場合はホストファミリーが8家族以上で、殆ど1ヶ月ごとに引越しをする忙しさで、引越しをする度に荷物が増えていくことに呆れられたものでした。

最初のホストファミリーは歯科の開業医でした。当時オーストラリアンハズバンドという言葉があるくらい、豪州では歴史的にレディーファーストの国で、とにかく男性は献身的に女性のために良く働くという典型的なオーストラリアンハズバンドの家庭でした。早朝奥様のためにご主人はモーニングコーヒーをベッドまで運んで来ることから始まり、夕食の後の皿洗いは当然で、何かとために家庭でも働く男性を見ることは亭主関白の日本から見たらかなり大きなカルチャーショックでした。いつも遊びに来る3歳のお孫さんが英語を上手に話す(?)ことをとても羨ましく思ったものでした。

2番目のホストファミリーはデンドーさんというパン屋の経営者でした。年齢的に私と近い姉と弟がいてとても素敵な家族でした。帰国後も3代に渡って本当に長い交流が続けていますが、当時一緒に遊んでいたホストブラザーが10年ほど前に癌で亡くなる前に電話でお互いに若くて健康で、青春を謳歌していた頃の話をしたことがとても印象深かったらしく、最後まで彼の家族にそのことを話していたと聞き、悲しくも懐かしい思い出として心に残っています。

公認会計士だったムーンさんというホストファミリーも素晴らしい家族でした。大変熱心なロータリアンで、その後ガバナー、RI理事を歴任し世界中のロータリアンとの交流を持たれていました。つい一昨年の8月に、15年ほど前にロータリーの交換留学生として来日していたシェリーという女の子のシドニーの家に孫がホームステイを

させてもらいました。その折、私もシドニーに行き、孫と一緒にムーンスンや私のホストファミリーを訪問しました。50年前にお世話になった方に孫とともに訪問するという時代の流れが感慨深いものでした。当時のオーストラリアでは対日感情が必ずしも良いという状況ではありませんでしたが、ホストクラブもホストファミリーも常に公平で親切でした。

学校は、ハンターズヒルというまだ創立間もない共学の公立高校でした。学校長がホストクラブのロータリアンといこともあり、とても良く面倒をみてくれました。クラブ活動でオーケストラに入部したことがきっかけで、ルシール・パイパーという親友に出会うことができました。彼女は当時から信仰心が篤く、現在パプア・ニューギニアで女性宣教師として立派な活躍をしています。つい最近彼女から来た手紙によれば、これまでの彼女の国際的な分野での教育、健康に貢献した功績を讃え、オーストラリア勲章（OAM）を授与されたそうです。素晴らしい友人との50年間の親交を持てたこともこの留学のおかげと感謝しています。

さて学校では英語のハンディであり授業については行けない中で、選択した数学、美術、そして日本語で点数を稼ぎ、卒業試験にパスすることが出来たことも思い出の一つです。

後日談として、20年ほど前に、主人が2580地区の青少年交換委員長としてお世話をしていたオーストラリアへの派遣留学生の一人がホストファミリーの家族の友人というお宅と一緒に訪ねた折に、その友人という老夫婦が「自分も以前日本からの留学生をお世話して、今でも手紙をやりとりしているよ」と言って写真を見せてくれたところ、何と私と私の家族の写真だったと驚いて報告をしてきてくれました。その老夫婦こそ元ハンターズヒル高校の校長先生でした！まさしく世界は狭いというか、余りの偶然に本当にびっくりしました。

50年前といえば1ドルが360円で、今とは違いオーストラリアは遠い国で日本に電話をかけることなど考えられませんでした。そんな中で一番の楽しみは日本からの手紙でした。両親から、姉妹から、あるいは友人からの手紙が来ていないかと毎日郵便ポストを覗いたものでした。季節が真反対の日本から、シドニーが冬でとても寒い8月に、「暑中お見舞い申し上げます」と書かれた手紙にびっくりした記憶があります。こちらからもせっせと手紙を書きました。両親にとっても遠い国のオーストラリアの様子はとても興味があったようで、帰国したらきちんと手紙がファイルされていました。

1年間を通してホームシックにならなかったかと言えば、確か3ヶ月を過ぎた頃にとっても日本が懐かしく日本のことばかり考えていた頃があったと記憶しています。幸いにシドニーには一緒に留学した竹下由美さんがいて、ちょっと寂しくなると会うことができ、殆ど毎晩のように電話で思い切り日本語で喋ることでストレスを解消していたようです。ホストファミリーが「もしもし・・・」というフレーズを覚えたほどでした。1年間日本を離れたことで、日本の良さに気づくとともに、家族との絆を本当に大切に思えたことは大きな喜びでした。

現在は東京池袋ロータリークラブの会員である主人と一緒に、RI 第 2580 地区の交換留学生のホストファミリーを何回も引き受けて当時のご恩返しを少しずつさせていただいています。毎年クリスマスにはこの 50 年間欠かさず昔のホストファミリーに近況報告を兼ねてお便りを続けています。今年のお正月にはムーンさんのお孫さんがご主人と一緒にスキー旅行に来日し、元旦を我が家の家族と一緒に過ごしました。あの 50 年前の留学はそこで終わってしまったのではなく、今でも綿々と繋がっています。亡き父立花和雄はいつも、「世界平和と友情を実現するためにこのロータリー青少年交換学生は本当に素晴らしいロータリーのプログラムだ」と誇らしげに言っていました。そのプログラムの第 1 期交換留学生としてオーストラリアに派遣して頂いた事に、あらためてお世話になった多くの方々への感謝の気持ちと御礼を申し上げます。

2012 年 3 月 11 日



1962. 2. 9 羽田空港
見送りに来た家族と



私・竹下由美さん

VISITORS PAUSE FOR TEA



An Indian student and six Japanese students drink tea during a break at the Rotary conference at Randwick racecourse yesterday. The students were brought to Australia as exchange students for a year by District 275 of Rotary International.

At the conference yesterday, Rotarians were introduced to nine exchange students Rotary has sponsored.

Eight of the students are from Japan and the other is from India.

All wore national costumes.

A Rotary official, Mr L. Becker, said that they had been in Australia only about two months.

All are being billeted by members of Rotary.

1962. 3. 7 新聞記事

275 地区大会・お茶の時間、「民族衣装」の女子交換留学生達
左からバンダーリ・竹下・前田・中村・立花・松浦・小島



ルナパーク（北シドニーの遊園地）でのご愛嬌

制服姿の当時の私



つながり、広がる友情

辻 数代 (旧姓 中村)

Kazuyo TSUJI (née NAKAMURA)

■はじめに

1962年といえば日本はまだ貧しく、一般的に人々はつつましい生活をしていて、外国に関する情報も今とは比較にならないほど乏しく、オーストラリア留学が決まっても、私が周囲の大人から得られる情報は殆ど皆無であった。

当時の私が想像できた西洋の風景といえば、“綺麗な家に白いカーテンがかかっている”といった程度のものである。実際にオーストラリアに到着し、空港からホストの家に向かう道のりで目にしたのは、明るい煉瓦造りの家々と窓から覗くレースのカーテンで、まさに夢に描いていた光景を目の前に見る思いであった。未知の国のオーストラリアでの一年間に、不安より期待に大きく胸を躍らせたものである。

あれから50年の間に、日本は急激な変化を遂げてきた。今、日本人はどの国よりも贅沢で快適な生活を送っているのではないだろうか。私を含め、貧しかった日本から最初のロータリークラブ派遣の交換留学生としてオーストラリアに行った学生たちは、現在の豊かさの中で育った若者たちが受ける以上の鮮明な印象を留学生活から受け、それがその後の人生に於いても多くの影響を及ぼしているのではないかと思う。

かつては遠い国であったオーストラリアが、今では日本に次いで身近な国に感じられるのも、この留学経験のお陰だと思っている。

■渡航準備と心構え

故郷である山口県の小さな城下町、萩市では、留学について具体的な情報を得られることはほぼなかった。ロータリークラブや学校の先生方に尋ねても、周囲に留学の経験者はいなかったし、田舎の町には旅行業者すらなかった。結局渡航に必要な情報源は東京の業者に頼るしかなかったのだが、業者から指示された手続きはきわめて煩雑で、一人で市外へ出たこともなかった17才の私が、あるときは夜行列車に乗り上京し、文部省、オーストラリア大使館へ面接や試験を受けに出かけ、あるときはバスと汽車を乗り継いで広島の日赤病院へ健康診断に行かなければならなかった。萩市にも大きな病院はあったものの、その頃の日本はまだ国際的な信用を得られておらず、戦後オーストラリア軍が駐留していた呉市に近い日赤病院が指定されていたのだ。

出発間際に萩高等学校の校長先生から手紙が届いた。それには「日本の代表だという気持ちを持って頑張ってくるように」という旨の激励と注意が長々と書かれていた。いざ留学が始まってからも、シドニーの日本総領事館から「日本人として恥ずかしくない行動をするよう」伝達され、世間知らずな高校生は身の引き締まるような思いで受け止めた。そうした忠告や期待はありがたい反面、学校で良い成績を取らなければというプレッシャーにつながり、思い悩んだのも事実だった。

■ホスト家族との生活

渡豪してからは毎日が異文化体験の連続だった。さまざまなケースで、日本で培ってきた常識や習慣がくつがえされ、しばしば父にその驚きを書いて送ったものである。家庭内での体験で、今でも鮮明に思い出される記憶がいくつかある。

ホストとなった最初の Everingham 家では、初めての登校日に新品の靴を用意されていた。それ自体は嬉しかったものの、朝食の最中に、ホストマザーがにこにこしながら「今日からこれをはいて学校に行くのよ」と言ってテーブル上に靴を置いた。新品とはいえ食事の皿の横に靴を置かれたのには驚いた。

留学が始まり間のない頃のあるパーティでは、お菓子のお皿をさしだされ勧められたのだが、食べたい気持ちはあったもののつい遠慮してしまった。“No, thank you”と言ってしまったのである。それが間違いだったと気づくには時間はかからなかった。その場では二度と私にはお菓子を勧めはくれなかったし、日本的なマナーである「遠慮」をした結果、それが理解されることもなく、その後周囲には私は甘い物を好まないのだという情報が行き渡ってしまった。それ以来、率直に態度に出して気持ちを示すことを学んでいった。

二軒目のホスト Pollard 家族では、初対面の大学生 David が台所でパンケーキを作っていた。今となっては日本でも男性が料理をするのは珍しくなくなったが、当時は男性が台所で料理をする姿を見たことがなかったので、大変な驚きだった。

また、ホストシスター Toni とバスに乗っているときに、近所に住む男性に偶然出会ったことがあった。彼は Toni に彼女のお兄さん David のことをしきりに褒めていたのだが、兄に対する賞賛が終わると、彼女は「誰もそう認めています」と得意げに答えるのだった。身内が褒められても決してはにかんだり謙遜することなく、率直に嬉しさを表現するという文化の違いを実感した出来事であった。

ある家庭では、夫婦喧嘩に巻き込まれたこともあった。その日はホストファーザーと一緒に彼の会社を訪ねていたのだが、仕事が片づかず夕食の時間に帰宅が間に合わなかった。腹を立てたホストマザーは、夕食に間に合わなかった夫と、一緒に行動していた私たちの食事をみんな片づけてしまっていたのだ。お陰でその夜、ホストファーザーと私の二人は夕食にありつけなかった。数十年経つ今となっても、ホストマザーは会うたびにそのときのことを弁解して気にしているのだが、我が家では仕事で帰りが遅くなった父をねぎらう母の姿を見ていただけに複雑な思いをした。

■学校での出来事

初めての登校日は渡豪して一週間後のこと。やや緊張しながらホストマザー Mrs. Everingham とご挨拶に行くと、校長先生の Miss Dear がにこやかに迎えて下さったのが印象的であった。言葉の問題もありいきなり最終学年（ハイスクール5年）に入るのは大変だろうという配慮から、4年生に入ることになった。時折教育委員会の担当者と思われる人が学校を訪ねてきて、私の様子を聞いたり学校側と話をしたりしていたが、学校にとっても初めての留学生ということもあってさまざまな配慮がなされて

いたのだと思う。私は登校したその日から他の学生とすべて同じ授業を受け、同じように試験を受けることとなったため、勝手のわからない学校生活に初めのうちはかなり戸惑ってしまった。とはいえ、日本よりも一つ下の学年に入ったこともあり、本来苦手な数学も授業を理解するのに問題はなかった。その他の科目は、自分の英語力を考慮して数学、英語、家庭科、化学、芸術などの分かりやすいものを選んだ。

最初のホストの家に行った間、友人が通学途中に毎朝誘いに来てくれたのだが、ある日私が登校の準備に手間取り二人とも遅刻してしまった。校舎の前で監視をしていたのは大好きな化学のルーク先生だった。先生は困った顔をして「これも経験だから」とおっしゃり、遅刻の罰を言い渡された。その日の放課後、二人とも他の遅刻した生徒と一緒に一クラスに集められ、罰として1時間ほどの居残りをさせられたのだが、いつも優しく接してくれた友人に迷惑をかけたことは今でも申し訳なく思っている。

選択科目の家庭科で地域の議会が主催する料理コンテストに参加し、他校生と料理の腕を競ったこともあった。先生から日本のものを料理するように言われた私は天ぷらとオムレツをつくった。オムレツが日本食とは思えないが、自分の少ないレパートリーの中から精一杯頑張って料理したところ、私たちのグループが優勝となった。とても信じられない結果であったが、日本食はほとんど知られてない時代だったので、私の料理したものがユニークに感じられたのかも知れない。優勝の褒美として学校に新しい厨房設備が加えられ、日頃笑顔を見せない家庭科の先生までが満面の笑みで喜んで下さった。私のつたない料理でも少しは役に立つことが出来た、嬉しい出来事であった。

JAPANESE GIRL FOR COOKING CONTEST

Fairfield Girls' High School student, Kazuyo Nakamura, of Japan, will be a member of the school's cooking team which will compete in a cooking contest to be conducted by Prospect County Council.

Kazuyo's home science teacher, Miss J. Fisher, said yesterday that Kazuyo would prepare a Japanese meal.

Prospect County Council's culinary adviser, Miss Lorna Nash, said yesterday that girls' high schools in Fairfield Municipality would visit the council's cooking demonstration rooms in Ware Street, Fairfield, to compete in the contest.

The first team would visit the rooms on August 7.

The contest, she said, would be part of the Education Week programme.

Prize for the winning team would be electrical equipment for the home science section at the team's school.

Teams competing would be from Fairfield Girls' High School, Merrylands Girls' High School, Bonnyrigg Girls' High School, and Liverpool High School.

GIRL FOR

They are their school's best cooking students



On the Friday, August 10, Miss Nash said a home science student from Liverpool Girls' High School would give a public demonstration of cooking at the showrooms.

The schedule for the contest is—
 Tuesday, August 7: Fairfield Girls' High School.
 Thursday, August 9: Merrylands and Bonnyrigg Girls' High Schools.
 Friday, August 10: Liverpool Girls' High School.

The trophy donated by council will be awarded for the best cooking display.

All sessions will be open to the public.

● Pictured on the right above are members of Fairfield Girls' High School's team. They are (left to right) Kazuyo Nakamura, Marie Chesson, Lesia Berkowalynj, Pam Campbell, Dale Poord, Roslyn Ludgate, Klara Kulik and Mrs. J. Fisher (home science teacher).

料理コンテストを伝える新聞記事、左端が私

一年間の学校生活が終わる日には、校長先生が記念植樹を提案して下さいました。日本をイメージする木が良からうという配慮から、そこに用意されていたのは“Japanese

maple”（もみじ）だった。オーストラリアの大地を彩る綺麗に紅葉したもみじを想像しながら、無事育ってくれることを祈るような気持ちで植えた。

■休 暇

1年間の滞在中、私は7家庭と一組のご夫妻のホストファミリーにお世話になった。そのうちの一組、Baker 夫妻は、休暇の度に旅行やイースターショーなどの催し物に連れて行って下さった。また、12月の長くて暑いクリスマス休暇には、6番目のホストファミリーと南海岸の避暑地カラロングで約一ヶ月過ごした。一日中水着を着て、ホストの兄弟や友人と、岩に囲まれた天然のプールで泳いだり、海岸で釣りや散歩などをして過ごした。クリスマス中は家族みんなとユーカリの木を飾り付け、その下に家族それぞれの贈り物を置いた。当日の朝は家族みんなでプレゼントの開封を楽しんだ。そのとき贈った手作りの人形を、ホストシスターの Louise は今でも大切に保管してくれている。

■心に残るその他の体験

イギリスのエリザベス女王の任命を受けた総督が招かれ、275 地区のロータリークラブの舞踏会が行われた。われわれ留学生も招待され、出席者全員正装し会場は華やいだ雰囲気だった。そこはいわばロータリアンの子息の社交界へのお披露目の場所だった。私たち留学生は一人一人総督に紹介され、急遽教わった片膝を床につけて敬意を現す礼儀作法に従って、緊張しながら謁見式に臨んだことを覚えている。

また、一年間の豪州滞在中、白人以外に会うことは殆どなかった。というのも、1962年のオーストラリアは白豪主義政策（1972年に撤廃）を採っていたからだった。そんな中で唯一出会った日本人が、戦争花嫁と呼ばれていた二人の女性だった。彼女たちは戦後日本に駐留していたオーストラリア兵と結婚してオーストラリアに移住したのだった。今では彼女たちも暖かな家族に囲まれ幸せな生活を送っておられる。しかし当時は日本から留学生が来たという情報だけで、はるばる日本人恋しさに訪ねてこられたことから、さぞ日本への郷愁が強かったことと察せられた。戦後 66年の間に両国の関係も変化し、今現在、日豪両国が隣国として友好的関係にあり、多くの人が自由に交流を行っていることは、とても喜ばしいことと思う。



ロータリー275 地区舞踏会の席で。左から私、ホスト家族の David, Phyl and John Pollard

■おわりに

再びオーストラリアを訪れたのは1976年のことで帰国後既に13年も経っていた。

久しぶりに会うホスト家族は以前と少しも変わらず、心から再会を喜んでくれた。Everinghamさんは会う人ごとに「私の日本の娘がやっと帰ってきたのですよ」と言って紹介してくれた。

滞在中には Parramatta で開かれた Women's Gala (経営者や専門職についている女性の会) に思いがけずゲストとして招待されたほか、Fairfield の学校を訪れたときは新しい校長先生が出迎えて歓待して下さいました。

ロータリークラブの family night 会合にも招待された。13年の間に新しいメンバーも増えていたが、懐かしいメンバーの方々や駆けつけて下さったホスト家族に再会でき、懐かしさで感慨深いものがあった。

オーストラリアに留学してすでに半世紀を迎えるが、今思えば、当時の多感な高校生はまるで乾いたスポンジが水を吸い込むように、西洋社会での経験の中から多くを吸収していったように思う。

振り返ってみると、数十年続けてきた国際交流活動も、ドイツやロシアなど海外での墨彩画(水墨画に淡い彩色を施した絵)の個展を可能にしたのも、50年前にオーストラリアに留学した一年間によるところが大きいような気がする。2009年にシドニーで開いた個展には、ホストブラザーやホストシスターたちはもとより、フェアフィールドハイスクール時代の先生や学友たちがお祝いに駆けつけてくれた。多くのゲストを前にスピーチを自ら申し出てくれたのもホストブラザーであった。個展会場で集まって下さったホストの家族や友人たちを前にしたとき、1962年からオーストラリアで築いてきた人との繋がりの集大成がそこにある様な気がした。偶然ではあったが個展を見に来て下さった女性の一人は、ロータリー青少年交換でオーストラリアからごく初期に日本に来た留学生であった。

私自身の留学体験は私たちだけで終わるのではなく、子どもたちにも少なからず影響を与えた。そしてホストの家族とは、第三世代に至る現在でも家族のような友情が続いている。留学プログラムが留学生当事者だけにとどまるのではなく、世代を越えた息の長い友情と相互の理解に大いに貢献することを体験から実感している。

A 'daughter' comes home

There were tears of joy at Sydney Airport last week when a former Japanese exchange student came back to see her Australian friends.

Thirteen years ago Mrs. Kazuyo Tsuji spent 12 months in Australia as a student at Fairfield High School.

Now she is back to see her "family", school chums and teachers.

Last week she stayed with her Australian "mother", Mrs. I. Everingham, of Dundas.

"When she was here 13 years ago she was a teenager of 17," Mrs. Everingham said.

"Now she is a married woman with responsibilities. After all those years she still remembered us."

Mrs. Tsuji was one of the first group of six Japanese students to come to Australia.

She spent two months with each of six Australian families.

She found the Australian way of teaching very different to that of Japan. "But I did quite well, although I had difficulty at first with the language."

"I could read and write, but when it came to conversation I was a bit lost."

Mrs. Tsuji said she had to sit for exams just like the other girls.

"Sometimes that was a bit hard," she said.

"Now I feel happy to be back in Australia and I feel I have never been away."

"I have seen so many of my friends and have many more to see."

She has been to lunch with some old school friends, visited her school, old teachers and the families she stayed with.

VISIT AFTER 13 YEARS



Former Japanese exchange student Mrs. Tsuji with her Australian "mother", Mrs. Everingham.

Mrs. Tsuji now teaches English in Japan.

Mrs. Everingham said Mrs. Tsuji's appointment book was full while she was here.

"Everyone is delighted to have her back," she said.

"She is my adopted daughter."

"When she went back to Japan after a holiday at the beach she was a typical Australian teenager."

13年ぶりの再訪 新聞記事、私と Mrs. Everingham

今に続く私の国際交流

篠崎 裕子 (旧姓 前田)

Yuko SHINOZAKI (née MAEDA)

もう50年が過ぎてしまったのですね。1961年の暮れ、父がロータリークラブによるオーストラリアへの留学生の募集を新聞で見て私に応募をすすめ、願書を出すことにしました。

当時、佐世保にはアメリカ人も多くいて、父の仕事の関係では、多くのアメリカ人とのつき合いもありました。そのような環境の中、楽天的な性格もあってか、留学に関しては両親も私もあまり心配していなかったと思います。後日、オーストラリアから招待状が届き留学が決まった時は、嬉しくて飛び上がったことを思い出します。

佐世保で私が通っていた学校は聖和女子学院と言って、オーストラリアの善きサマリア人修道院のシスター達の経営でしたから、もともとオーストラリアとは関係が深かったわけです。

私と一学年下の松浦尚子さん(福生さん)が初めて留学して以降、聖和女子学院では独自で交換留学を毎年実行するようになりました。夏休みには、コーラス部などが渡豪して、このプロジェクトは今も続いているようです。はからずも、私達が参加した第一期ロータリーの交換留学が、わが校の国際交流の先駆となったわけです。

さて、私達がシドニーに着いた時は、あまりの大歓迎ぶりに、大変驚きました。新聞記者やテレビ局なども取材に来ていて、一体何事かと思いました。その時の新聞記事をご紹介します(左は松浦さん)。

学校生活は、とても楽しくたくさんの友人が出来ました。しかし、私の英語力が足りなく、なかなかついていけなかったと思います。生徒たちは皆、先生方に対して礼儀正しくて、日本のような友人みたいな接し方では、ありませんでした。テストの際は、論文形式で問題に答えることが多く、日本の授業とは異なっていました。

Happy day



NAOKO MATSURA, 17 today, and YUKO MAEDA, 18—two of six Japanese teenagers who arrived in Sydney yesterday to spend a year in the homes of Rotary International club members.

Yuko settles down to our T-bones and tennis

Students at MacArthur Girls' High School have opened their hearts to an 18-year-old Japanese girl, Yuko Maeda.

Yuko, from Sasebo Nagasaki Prefecture, has been sponsored on a study visit to Australia by Rotary International.

The school sports day last week gave Yuko an excellent opportunity to

practice her English (she speaks little) and to get better acquainted with her new schoolfriends (she understands them perfectly).

She is pictured below relaxing after a game of tennis with Dianne Lean (14), of Wentworthville (at right), and Dorothy Miller (14), of Rydalmere.

The first week at school was a full and exciting one for Yuko.

She was a keen participant (before an interested audience) at the school sports day.

Yuko has been "adopted" for her stay in Australia by North Parramatta Rotarian, Mr. Charles Robinson, and family.

The Robinson's three children, Janette (17), Judith (16) and Marah (9), were enthralled by Yuko's display of traditional Japanese costumes and dances.

Although she brought her chopsticks with her, Yuko said she was keen to try as many western style meals as possible — including Australia's traditional T-bone steaks!



学校生活にも慣れ、クラスメートとくつろぐ様子が新聞に

ホームステイは、どの家でも大変親切でとても良くしてくれました。食後は、家族皆でお皿洗いとかして楽しかったです。

国は違っても親子・家族の関係は、だいたい同じだと感じました。ただ、家計のお財布はご主人が握っていたのが、日本と違っていました。やはり、その国の文化を学ぶなら、ホームステイが一番だと思いました。

私は、1978年に初めてオーストラリアを再訪して以来、その後3、4年に一度、ホームステイした方々や友人に会いに行っています。特に最初のホームステイ先のロビンソンさん一家（今は同世代のホスト姉妹）とは、今もなお親密なお付き合いをしています。子供たち（ホストペアレントの孫世代）の結婚式にも二度出席しました。あちらからも、たびたび私の家（うさぎ小屋？）に泊まりにきます。

私もオーストラリアへ行った時は、いつもロビンソン家の次女ジュディーの家に滞在しています。昨年（2011年）、あちらに行く予定でしたが、東日本大震災のために中止しました。

昨年のことですが、留学時からの友人の一人アナと二人で、浅草、日光、秋葉原、東京タワーと歩き回り、学生時代に戻ったかのように楽しく過ごしました。毎日しゃべっていると、ずいぶん英語力が、戻ったと思いました。

私はこの30年間、子供たちに英語を教えています。幼稚園と保育園の朝の授業に入って、ピアノを弾きながら英語の歌を歌ったり、アルファベットを教えたりするのです。また、午後はイギリス人の先生と一緒に小学生に教えています。このような活動が続けられるのも、50年前のロータリークラブによる留学のお陰と思っています。

このたびの大震災の時は、多くのオーストラリアの人達からお見舞いの電話を頂き本当にうれしく思いました。感謝の気持ちをこの誌面でもお伝えしたいです。

これからもオーストラリアの友人達と行き来して、仲良く国際親善につくしたいと思います。



近年の交歓風景



幸運の扉の向こう、思い出すままに

福生 尚子 (旧姓 松浦)

Naoko FUKUSHO (née MATSUURA)

■応募から渡航まで

幸運の扉はある友人の示してくれた「豪州留学生を募る」という新聞記事によって開かれました。私は当時、聖和女子学院高等部の2年生でした。この学校は、オーストラリアにある善きサマリア人修道会が、戦後の日本の女子教育の再建をカトリックの教えを通じて導くために設立されたものです。私達を含めた多くの日本人を、特に若人のために、幾多の困難にもめげず使命感を持って、はるばる船で来日されたシスター方の母国に非常に関心がありました。「チャンスがあれば是非行ってみたい」と強く思っていたのです。

佐世保ロータリーと聖和のシスター方の御協力で、申請まではトントン拍子に事が運びました。しかしいざ留学が決まり渡航手続きになると、現在と違ってパスポート以外にビザが必要でしたし、条件がいくつかありました。高額な渡航費用も準備しなければなりませんでした。これは祖母が準備してくれました。健康診断のため指定された広島の日赤病院まで1泊2日で行きました。一緒に行く事になった前田裕子さんのお母さんに彼女と一緒に連れて行ってもらったのです。

手続きに時間がかかり、向こうの新学期が始まる1月中旬に出発しなければならなかったのに、予定には間に合いません。結局、ビザは東京のオーストラリア大使館で直前に受け取り、派遣第一期生として他の5人の高校生と羽田空港から出発したのは、2月9日になりました。

飛行機は途中香港、マニラ、ダーウィンと給油のために立ち寄り、およそ16時間かけてシドニーへ向かいます。私は機内にいる間具合が悪く、先輩の裕子さんが「ナオちゃんおいしかよ、食べんね」と言うのを耳にしながら、「今からこんなことでは、大丈夫なのだろうか？」と不安に押しつぶされそうでした。

■ホームステイの始まり

真冬の日本から真夏のオーストラリアへ。出発翌日の午前中、シドニー空港へ留学生生活の第一歩を印しました。青白い顔をして黒の分厚いオーバーをはおって降りてきた私を出迎えたホストファミリーの方々は、どう思われたでしょうか？日本に対するイメージはどんなものだったのでしょうか。到着するといきなりテレビ局のインタビュー。自分の英語力に不安があったのですが、ゆっくりと判り易い口調で質問してくれたので、思った以上に理解でき少しほっとしました。

われわれ留学生は、空港でそれぞれのホストファミリーに連れられて、色々な地域へ別れて行きました。私はシドニー空港から南へ車で30分ぐらいのところにあるクロナラ Cronulla という町へ行きました。1770年にキャプテンクックが最初に上陸したボ

タニー湾のすぐ南側に位置し、砂浜の海岸線が広がる小ぢんまりとした町です。メインストリートが南北に通り、その両側に様々な店が並び生活に必要なものが売られ、その奥に住宅が建っているという可愛らしい町の様子が目に浮かびます。

最初にお世話になったホストファミリー、マッケイさんの家は、商店街の一角にあり階下が衣料品店で、階上が住居になっていました。到着した夜に、ロータリークラブの数人が集まって歓迎会を開いていただきました。その時はじめて4軒の家族と3ヶ月ずつ過ごすということを知り、1軒にずっと居ると思い込んでいたので、少し驚きました。でも、色々違った家族と親しく生活できて本当に良い経験でした。

マッケイさん一家は、ご夫妻と長男ギャリー（17歳）、スー（14歳）、それに次男ロス（8歳）の5人家族。私のためにスーのベッドを両親の部屋に移したことなど、知らないまま迷惑をかけたようです。私の世話を優先するお母さんに甘えられず、スーはしばらくストレスを抱えていたのではないのでしょうか。時々かんしゃくを起こしていました。その時は自分の事に精いっぱい余裕がなく、彼女の気持ちに気づくまでギクシャクしてしまい、申し訳なかったです。



Rotary Ball、マッケイさんご夫妻と

■学校での様子、出会い



ハイスクール制服姿の私

次の日から学校へ通い始めました。制服は、うす緑色のジャンパースカートと白いブラウス、麦わら帽子、茶色のソックスと靴。それに鞆は茶色の箱形。なかなかおしゃれな恰好でした。歩いて20分ぐらいのところにある公立校、クロナラ・ハイスクールへ1年間通う事になりました。

科目は選択制で、英語（国語）、生物、地理、経済、古代史、美術、体育の7科目です。私は全く様子が判らず学校にお任せでしたが、クラスの全員が同じ科目でなく選択するのは大学みたいで珍しい事でした。それに授業ごとに生徒が教室間を移動するのも面白く思いました。英語はもちろん

必須で、しかも古典のシェークスピアだったので、最後までチンプンカンプンでした。今思い返しても、マクベスだったのかリヤ王だったのかさえ覚えていません。生物と地理は植物を描いたり世界地図を写したりだったので、何とか理解できたかもしれませんが。経済と古代史は大学の講義のようで、ひたすら先生の言葉をノートに書く授業だったと思います。

初めのうちはアイリーンという友人がノートを取ってくれたり見せてくれたりして助けてくれました。アイリーンは同じところに住んでいて、通学する時も同行してくれ、クリケットに誘ってくれ、本当に世話になりました。彼女とその友人達に連れられて、お休みには遊園地や海水浴などよく行き、自分が外国人とは全然感じないほど溶け込みました。

困ったのはスクールダンスの時でした。日本で通っていた高校は男女共学ではないし、男女交際の経験もなく、アイリーンをはじめクラスの友人たちが色々気を遣ってくれて申し訳なかったです。後年、娘達にその話をする、「信じられない、ボーフレンドが出来たかも知れないのに。」と笑われてしまいました。それも今は楽しい思い出です。

友人たちは自分の気に入ったボーイフレンドをゲットするのに一生懸命。そのファイトと情熱は見ていて気持ちの良いものでしたし、ちょっと羨ましくもありました。皆本当に学校生活を楽しんでいました。成績なんて何のその、自分の適性に合った進路を上手に選んでいるのには感心させられました。中学を卒業してすぐに職業に就く人も多かったし、自立心が強いのに驚きました。

入学してから3ヶ月ぐらい経った時、校長室に呼ばれた事がありました。何かと行ってみると、私よりもずっと小柄な女の子がベソをかいていたのです。何と彼女は日本人で松原啓子という子でした。お父さんが京大の物理学の教授で、シドニー大学へ招聘され一家でクロナラへお住まいという事だったのです。啓子ちゃんはピアノが上手で、級友から弾いてくれと頼まれたのに意味が判らず文句を言われたと勘違いしたようでした。松原夫妻は40代、そして二人の娘さんは中1と小1くらいだったと思います。現地の学校に入れられて、さぞかし大変だったことでしょう。

その事件以来、私がいろいろ彼女のお世話をすることになり、松原家に招かれるようになりました。お寿司や味噌汁など色々な日本食をご馳走になり、本当にお世話になりました。まさか異国の地でご近所に日本の方が住んでおられたとは。今の時代にはよくある事でしょうが、当時としては珍しいご縁でした。お陰でホームシックにもかかる事なく、元気で頑張れたのだと思い、本当に感謝しています。日本に戻ってからも度々旧交を暖めていましたが、10年ほど前に奥様が他界され、先生御自身も現在東京の啓子さんのところへ行かれました。

体育のマクミュラン先生や古代史のリンチ先生には可愛がっていただきました。宗教の時間というのがあり、私はキリスト教信者ではなかったのですが、母校の関係でカトリックを選び、その中心がリンチの先生でした。大柄で声がしわがれていて、いつも怒鳴っている様子なのですが、実はとても優しく「ナオコ、ナオコ」と気かけ

ていただきました。数年前まで文通をしていましたが、残念ながらお亡くなりになりました。

テストの時は辞書を持ち込んでよいと言われ、英語の意味調べの時は、ちょっとしたカンニングみたいでした。3ヶ月も経つと会話にも慣れてきましたが、それは回りの人達がゆっくり話してくれるおかげで、友人同志の会話について行くにはあと3ヶ月かかりました。

■ホームステイ、2軒目以降

2軒目は、管工事の事業をされているブラッドリー一家でした。ご夫妻と長女ジャニス、次女リン、そして長男ジョン。二人の娘さん達は就職し、ジャニスは結婚し家を出ていましたがよく帰宅し、リンも婚約中。そしてジョンは法律家を目指して勉強中で、バーバラという可愛いガールフレンドがいました。大人達ばかりだったので、私は夫妻の3人目の娘という感じで「新たに子育てを楽しんでいる」と言われていました。

山奥にあるセカンドハウスやキャンペラにも連れて行ってくれました。お友達を招いて私の事を紹介し、お習字道具のミニチュアを見せて、とか「君が代」を歌ってほしい、と頼まれたりもしました。招かれた友人の一人にイスラエルから移住して来た人がいました。ご主人が獣医さんで、その奥さんが私に会うと決まって「テルミー ナオコ」と色々尋ねるのです。私達は彼女のことを密かに「ミセステルミー」と呼んでいました。ブラッドリー夫人は、私がクノールのチキンヌードルスープが好きと知ると、毎朝用意してくれるのですがさすがに飽きて、丁重にお断りしたのも懐かしいことです。



ブラッドリーさんと

3軒目は、サザランドに住むハンドさん一家。ご夫妻には、私と同じ年のジェネファという一人娘さんがいました。クロナラからサザランドは車で20分ぐらいのところにあり、今思い返しても町の様子は殆ど覚えていません。クロナラへは基本的には電車で通学していたのですが、朝だけは隣に住む方の息子さん（クロナラの別な高校の教師）に車で送ってもらうことがありました。出発の時間に遅れないよう、気を付けたものです。途中、私の生物担当のMissカークワードと一緒に乗せていました。もしかしたら、後に結婚されたかも知れません。私はとんだお邪魔虫だったのかも。

ハンド夫妻はオーストラリアに移り住んだ生粋のイギリス人で、材木業を営んでいました。生活様式はすべてイギリス式だったのでしょう。食事の前にお祈りをし、テーブルマナーやその他のルールにも厳しく、質実剛健がモットーの家庭でした。ハンド夫人はいつもニコニコを優しく、お料理もとても上手。ジェネファの教育にも熱心

でした。ジェネファはキリスト教系の私立女子高に通っていて、ピアノがとても上手でした。一度その学校に招かれ日本の生活様式についてお話する機会があり、色々質問されたのに上手に答えられなかったことがありました。いかに自分の国について知らないか、という事を一度ならず思い知らされました。

ハンド一家は30年前にイギリスに戻られ、ジェネファは結婚してフランスに住んでいます。

4 軒目はクロナラに戻り、印刷業を営むブレイクスピアさん一家にお世話になりました。名前を聞いた時、シェークスピアさんと勘違いし、あの文豪の親戚かと思ったのです。ご夫婦、長女イレーヌ、次女ヘレン、三女のマーガレット、そして長男のアランという家族構成でした。イレーヌはしばらくしてドイツに、スキー・インストラクターとして行ってしまいました。雪の少ないオーストラリアでこんな職業選択とは、とちょっと不思議な気がしました。ヘレンは私と同じ年ですが、スラリと背が高い美人で、すでにタイピストとして就職していました。ジョンというカンタス航空勤務のフィアンセがいました。その後二人は結婚し、二人の男の子に恵まれています。マーガレットも働いていて、ビルというボーイフレンドがいました。こちらもその後結婚して幸せそうです。アランは当時まだ12歳、サーフィンに夢中で、毎日のように海にでかけていました。皆それぞれに生活を楽しんでいて、独立心が旺盛な一家でした。

家が海のすぐ近くだったので、私も毎日海に行っていました。真っ黒に日焼けして帰国した時、母が嘆いていました。それなのに、殆ど泳げないままだったのです。とにかくよく遊ばせてくれました。大きいヨット（クルーザー）やディンギという一人乗りの小型ヨットにも乗せてもらいました。ある時は、モーターボートで太平洋まで出て魚釣りにも興じました。さらに、泳げもしないのに水上スキーにも挑戦しました。その時、ヨットの舵のところで左の太ももを10センチほど切っけてしまい、今もその跡が残っています。この傷跡は私の勇敢に遊んだ勲章です。

他にも遊びの事は沢山思い出され、遊園地に行った時は、観覧車で逆さまになり、気を失ったこともあります。タルンビというところへキャンピングカーで小旅行へ出かけた時は、牧場で牛の乳搾りや羊の毛を刈ることや、馬に乗る体験もしました。圧巻はカンガルー狩りでした（捕まえてみせるだけ）。大きなライトに照らされ何頭もの大小様々なカンガルーが飛び跳ねる様は、自然の雄大さが感じられ興奮したものです。

■旅行・余暇など

長期休暇が取れた時は、マッケイさん一家に600kmほど北に離れた海辺の町ヤンバに連れて行ってもらい、海の家のようなところへ5日間ほど滞在しました。その間は魚釣り三昧。ある時、沖で釣竿が上がらず、針を岩に



Yamba での釣り

引っかけたかと思ったのです。ところが、「もっと強く引け」と言われるので、力一杯持ち上げると、少しずつ上がってくるではありませんか。岩だと思ったのは何と大ガニ。「ハサミに気をつけろ、指が切れるぞ」という声。本当に驚きました。暴れるカニを押さえつけハサミをロープで縛って持って帰りました。大鍋に入れ、蓋を上に乗せてゆで上がったカニ、それと黒鯛のソテーが、その晩の夕食となりました。但し、滞在中ずっと同じメニューだったことも付け加えておきます。

メルボルンには日本にいた時以来のペンフレンド（女性）がいたので、ロータリーの好意で会いに行きました。勝手に押しかけたみたいで、相手は当惑していたかもしれせん。

クロナラに一軒だけあった映画館では、映写が始まる前に国歌 God save the Queen を斉唱するのにはびっくりしました。映画にはたまたま日本兵が出てきて悪役を演じていました。まだ戦後の悪い対日感情が残っていて、新聞等にジャップと出ている事もありました。しかし、直接悪意のある言動を受けたことは皆無で、私は感謝の気持ちで一杯です。

他の観劇の思い出としては、ウェストサイドストーリー（映画）に連れて行かれた時は啓子ちゃんも誘ってもらい、嬉しい思いをしました。またオペラ「将軍」では、奇妙な衣装で日本の着物であるはずなのに中国風の衣裳だった感じでした。映画もオペラも人気があるものは、3年以上のロングランなんて普通でした。

■ 思い出の服で

シドニー周辺には8名の交換留学生在が滞在し、それぞれのロータリークラブで別々に受け入れられていましたが、数回だけ全員集まる機会がありました。その最後が、シドニーの日本総領事館の二俣総領事主催のパーティでした。ブレイクスピア夫妻と出席しているので、帰国間近の時期だったと思われます。



シドニー総領事招待のパーティで、左から濱、小島、前田、中村、竹下、立花、松浦、宮本

私はそのためブレイクスピア夫人がヘレンとお揃いで手作りしてくださった紺のワンピースを着て行きました。彼女は裁縫がとてもお上手で、この素敵な服は帰国の時も着たのを覚えています。

クリスマスを過ぎてからいよいよ帰国することになりました。帰国に際して、お世話になったクロナラロータリークラブの例会に招かれ、記念にオパールの指輪を頂きました（写真＝新聞切り抜き）。年が明けてから裕子さんと二人で、思い出一杯のオーストラリアを去りがたい気持ちで後にしました。



A NEW AUSTRALIAN AMBASSADOR

Miss Naoko Matsura accepts an Australian opal from Mr. Alan Mackay, watched by President of Cronulla Rotary Club, Mr. John Adair, at her farewell visit to the Cronulla Club last Tuesday night. Miss Naoko Matsura's 12 months' stay in the Shire was sponsored by the Cronulla and Caringbah Rotary Clubs and during this time she stayed in the homes of Rotarians and attended Cronulla High School. This project, which was begun last year, is an attempt by Rotary Clubs to increase International Goodwill and understanding with our Asian neighbours.

■おわりに

ロータリー青少年交換の第一期派遣 50 年記念誌に寄稿を、と依頼された時は簡単に承諾したのですが、50 年という長い年月が経過して、記憶は飛んでしまっているところがあり、細かなところは自信がありません。思い違いも多少あると思いますが、思い出すままに書きました。楽しく遊んでばかりいたような内容ですが、実際はそれ以上の社会勉強をしたのだと思います。

思えば食が細く好き嫌いが多かった私ですが、帰国後は殆どなくなりました。乗り物酔いも激しく、出発時に横浜の伯父の家から羽田までの道中は苦しく、飛行機の中でも半ば病人のようでとても不安でした。機内の記憶が具合の悪さだけだったのも事実です。シドニーに到着して出迎えに来ていただいた多くの人達に会った途端元気になり、その後一度も乗り物酔いをせずすっかり治ってしまいました。1年間の滞在中、病気になることなく心豊かに過ごせたことは、ホストファミリーはもちろん、他のロータリアンの方々、クロナラの人達、学友達のさりげない思いやりのお蔭だと思い、改めて感謝の気持ちでいっぱいです。

反面、せっかくのチャンスに、もっとはっきりした目的意識を持って行っていたら、少なくとも今より積極的な人生を歩んでいたのではないか、と当時の自分の未熟さに反省しきりであることを付け加えずにはいられません。また 50年過ぎた今、まだ何の恩返しもできていないことを申し訳なく思います。

最後に、この幸せに満ちた1年を過ごさせていただいたロータリアンの皆様、そして今は亡き両親と祖母に感謝の気持ちを捧げます。

交換留学生、当時を振り返り

関本 洋子 (旧姓 宮崎)

Yoko SEKIMOTO (née MIYAZAKI)

日本からの最初の交換学生として私が渡豪したのは1962年、今から丁度50年前の事になります。出発前の数か月、現在では考えられない多くの困難がありました。実家のある福岡県久留米市からオーストラリア領事館のある広島県呉市まで、母と満員列車で立ちっぱなしの状態の中疲労困憊でたどり着き、無犯罪証明と健康診断を受けた記憶があります。

渡豪する日が迫っており、パスポートに記載するビザを申請するため真夜中の12時に出発する当時の一番安いフライト、ムーンライト便で上京しましたが、福岡―東京便の機材はプロペラ機のYS11で揺れがひどく最悪の初飛行体験でした。渡航を目前に控え夜行列車ブルートレインで16時間をかけ再度上京しました。海外渡航解禁になっていない時代、ビザ発給の許可が下りず途方に暮れ父親と日本橋ロータリークラブの例会に飛び込み窮状を話し何とか助けを頂けるよう申し上げました。日本橋ロータリークラブの会員であった森脇さんにご尽力頂きようやくビザの発給にこぎつけました。森脇さんとはその後長年に渡ってお付き合いをさせて頂きました。

当時は一般人でさえ、まして16歳の高校生がロータリーの交換学生とは言え単身で海外に出るなどとは、およそ考えられずオーストラリアまでのフライトチケットの購入に関しても、久留米の旅行代理店が右往左往する有様で、すべての手続きにおいて紆余曲折の状態。父親も経験したことのない大変な苦勞を覚えたことと思います。

当時の航空運賃は現在では想像できない程の高額なもので、スポンサークラブの久留米ロータリークラブの会員の皆様からお金を出し合って費用を捻出して頂いた事は本当に有難く今でも深く感謝致しております。

当時の国際線ターミナルは羽田に



メルボルン空港に到着：前列左から Pippa and Sally Parkinson、私、Mr. D. Farquhar、後 Mr. F. Jarman

国内線ターミナルと共にありました。現在は成田—シドニーの直行便がありますが、当時は東京～香港～マニラ～ダーウィン～シドニーという飛行ルートで約 16 時間を要していました。ムーンライトのプロペラ機にしか乗ったことの無い私が羽田からシドニー行きのボーイング 707 に乗り込んだのです。戦後たった 16 年の事ですから、自身の生活環境から考えるとまるで別世界！！離陸前スマートなスチュワードから受けるホットタオルやオレンジジュースのサービスに目をまん丸く！！別の星に行った感覚でした。

シドニー空港で第一ホストファミリーのファーカーさんに出迎えて頂き、プロペラ機でメルボルンまで、2 時間以上要したと思います。メルボルン、エスンデン空港にはホストファミリー全員の出迎えを受け車で 1 時間半の目的地ローズバッドに到着しました。すでに日が暮れて夜になっていましたが、ファーカーさんの長男 Ian(当時 17 歳)と次男 Alan(15 歳)と 3 人で卓球を楽しんだことを懐かしく思い出します。

第 2 次世界大戦中、パプアニューギニア近くのブーゲンビル島、ラバウルで戦闘機のナビゲーターをしていたファーカーさんは、日本軍の高射砲によって両眼を失明されました。それにも拘わらず 1961 年世界東京大会に出席され、かつての“敵国日本”との友好親善こそ両国に平和をもたらすものと提案され、交換学生を日本から招待するなど日豪親善にご尽力されました。



学校での家庭科授業

ファーカーさんのご家族とクリスマス休暇（その間英語を聞き取ることが出来ず常に英和辞典持参でした）を楽しんだ後、ローズバッドハイスクール共学高校で勉強することになりました。1 学期が始まる前、ハドソン校長先生とパット・ワラー教頭先生に高校内を案内して頂きましたが、まるで（ちんぷんかんぷん）お互いに不安を持ったのではないのでしょうか。ローズバッド高校では親し

いクラスメートに恵まれ楽しい高校生活を送ることが出来ました。

1 年間 4 家庭にそれぞれ 3 か月お世話になりましたが、いずれの家庭でも暖かい配慮をして頂き全く初めてのオーストラリアの食事もそれはそれは美味しく頂き、痩せていた私も見る見る豊かになって行きました。現在のように家庭から家庭への電話が通じることも無く、携帯もパソコンも無く、日本への通信手段は手紙のみの生活でしたが、優しいホストファミリーに囲まれホームシックにもならず、毎日毎日が感動と興奮の中で過ぎて行きました。

帰国後は再度オーストラリアに戻りたいとの強い希望で、カンタス航空の客室乗務員として 3 年半お世話になりました。その後、東南アジア、オセアニアに限らずヨーロッパも見てみたいとの思いが強くなり、スカンジナビア航空（SAS）に移り北欧を

含むヨーロッパ各国で様々な経験を致しました。オーストラリアでの1年間の留学生活が私にとって人生の一番大きなターニングポイントであったと確信しております。



Sally・Mr. Parkinson・私・Pippa (2007)

結婚後途絶えていたホストファミリーとの交流も久留米ロータリークラブの倉田正平さん、オーストラリア、ビクトリア州ヒールズビルロータリークラブのステュワート・マクドナルドさんのご尽力で第3ホストファミリー、現在クイーンズランド州ケアンズの近くにお住いのパーキンソンさんご家族と感動の再会を果たしました。

又2011年12月、当時のホストロータリークラブが日本との交換学生50周年を迎えるにあたって、第一号交換学生であった私宛に招待状が届き記念事業式典にてスピーチをさせて頂く機会を与えられました。まさに50年振りに私にとって第二の故郷であるローズバッドを訪れ級友と第一、第二のホストファミリーとの劇的な再会を果たし感激の数日を過ごしました。これで本国の英国に帰国された第四ホストのご家族を除きすべてのホストファミリーとの交流が再開出来た事になり現在その喜びは頂点に達しております。



Alan Farquhar・私・David Jarman (2011.12)



Alan Farquhar ご夫妻と



Rosebud High 時代の親友 Roberta Mose と



David Jarman ご夫妻、Jarman 家の長女 Cay Kellaway ご夫妻と

Innocent schoolgirl stepped across the bitterness of war

By DENISE RYAN

YOKO Miyazaki didn't realise that some people opposed her visit to Australia — and that was probably a blessing.

As a 16-year-old in 1962, she applied to be Australia's first Japanese Rotary exchange student, at a time when many older Australians remained deeply upset about the events of World War II.

When Ms Miyazaki returned recently to visit her former host families and friends at Rosebud Rotary, she marvelled that she had felt so welcome as a teenager that she had not realised the extent of the furor surrounding her visit.

Her host brother, Alan Farquhar, was more aware of how some saw the exchange. "It was very controversial," he says.

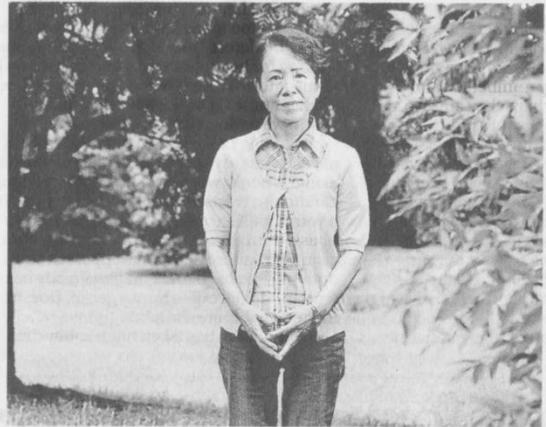
The exchange came about through the dogged efforts of an unlikely advocate. Mr Farquhar's father, Don, was blinded during the war by a Japanese attack on the RAAF plane he was navigating.

Alan Farquhar recalls: "In 1961 he decided to go to one of the first international Rotary conferences held in Tokyo after the war. Many of his close friends in the RSL tried to talk him out of going."

At that event, Don Farquhar proposed a youth exchange program between the two countries. That this was proposed by a veteran with such a serious shrapnel injury inflicted by the Japanese confounded many.

Few could understand why Mr Farquhar wasn't bitter. His son recalls how his father's determination to forge links between the nations inspired others to support the program. "For the Rotarians to decide this needed to happen only 15 years out from such a hell of an event was extraordinary," Alan Farquhar says.

"And don't forget there was still a White Australia policy. Not everyone wanted it but from the moment Yoko arrived any negativity was swept away by her personality."



Don Farquhar died in 1984 but his generosity of spirit was remembered in the 1988 book *Unsung Heroes & Heroines of Australia*, edited by Suzy Baldwin.

Looking back, Ms Miyazaki is surprised her parents were not worried about her travelling to Australia. "It was

unusual at that time. They were very open-minded."

Ms Miyazaki made many friends and the experience helped her gain work as a flight attendant for Qantas and other airlines. She later lived in Egypt before returning to Japan.

"My life became exciting and broader," she says. "My



Yoko Miyazaki today and meeting her host families, including Don Farquhar (above right), in 1962.

host families treated me like a daughter or sister, and I met so many people from different countries that I became more open. My father was taken aback when I came home and threw my arms around him and kissed him."

Staff and students at the then Rosebud High School were also ahead of the times in 1962, with *The Mikado* performed by the school in honour of their visiting exchange student. Ms Miyazaki was in the chorus.

Rosebud Secondary's focus

on Japan has endured, with language learning from years 7 to 12, a sister school in Japan and regular exchanges.

Principal John Miller says students and parents were visibly moved when Rotarian David Jarman explained Don Farquhar's link to the school's Japanese language program at last year's awards ceremony. "They sat up and their jaws dropped."

Ms Miyazaki spoke to the students and presented a new Rotary scholarship to support year 10 students to study Japanese.

Rotarian Stuart McDonald, who is co-ordinating coming exchange programs, says Ms Miyazaki's experience demonstrates the power of — and the bonds formed — during international exchanges.

Applications close on March 31 for exchanges to Japan, France, Germany, Switzerland, Denmark, Sweden, Brazil, Taiwan and other countries this year.

LINK

▶ rotarioyouthexchange.org.au

2011年12月、Rosebud で開かれた青少年交換50周年の式典に参加した際の新聞記事

ロータリー青少年交換学生プログラムを通して貴重なチャンスと素晴らしい経験を与えられました事に心から感謝し、これから青少年交換学生として海外留学される皆さんには、それぞれの国の異なる文化を受け入れ何事にも興味を持って有意義な日々を過ごして、貴重な体験を人生に役立たせて頂きたいと願っております。

* * * * *

1988年に「未だ、称えられていないヒーローとヒロイン」という本がオーストラリアで出版されました。オーストラリア全国から200名の方が選ばれましたが、その中の一人に第一ホストファミリーであったファーカーさんが選ばれています。出版物の中から抜粋して皆様にご紹介させて頂きたいと思います。

UNSUNG HEROES & HEROINES of Australia

Edited by Suzy Baldwin

Preface

Late in 1986 the Australian Bicentennial Authority invited us to form an assessment panel for the 200 Unsung Heroes and heroines programme. This became better known as the *200 Greatest Stories Never told*, a title coined by John Singleton.

A national advertising campaign was set up to involve Australians in all walks of life, getting them talking, comparing notes, and submitting stories of heroic people they knew or knew about. The 4020 stories submitted by the people of Australia demonstrate the success of that campaign.

The assessment panel's task, when first explained, seemed challenging but straightforward enough. We were to read all the stories and select the best two hundred for publication in a commemorative book. Some aspects of the assessment, however, proved tantalizing and at Times frustrating.

What was heroism, and how would we identify its presence in an Individual or an action? What was meant by unsung? Was someone whose deeds were well known in one state, but not elsewhere, an unsung hero or heroine? Did a military decoration or a civilian award mean that the recipient could still be called unsung?

The panel was concerned about these issues. From the outset, we agreed not to be too rigid on the definition of heroism, or on the notion of being Unsung. Such an exercise had not been attempted before, either in Australia or elsewhere, so we had to develop our own criteria through regular discussion.

We recognized that stories of outstanding people would often have improved in the telling. So part of the challenge was to identify those stories which were not only impressive and inspiring, but also factual. In this we were assisted by the dedicated and professional work of a small team of researchers. Some six hundred of the four thousand and twenty stories were progressively identified as a long short list and handed to the research team. With the benefit of the researchers' reports, the panel was then able to reduce the list to the two hundred reproduced in this book.

We accepted that, even after careful research, some of the chosen Stories might retain an element of myth or embellishment. Nevertheless we believe that all the stories finally selected fulfill the spirit of concept.

We did not attempt to select the stories according to occupation, gender, geographical distribution or state of origin. The final selection reflects the pattern of groups and eras in the stories submitted.

The most exciting and inspiring aspect of this whole exercise has been that we have been able to participate in the gathering and recording of a unique set of documents of Australian social history. The stories in this book, and the

others which have not been reproduced here, are truly a people's history of Australia.

The panel is pleased that the 3820 stories not included in this book will not be lost to the future. The national Library of Australia has accepted them for permanent preservation in the Library's Australian Collections. There they will be available for researchers to read about that great band of people whose lives have been shown to us.

The stories in this book reveal the soul of Australia. We are grateful for the opportunity the project has given us to help Australian speak to one another about outstanding men and women who have done noble deeds and endured great hardship with fortitude and often with great humour. We believe that their stories will inspire and encourage Australians to face courageously the challenges of our time.

Donald Norman Farquhar

1913-1984

Triumph over prejudice

Written by Katie Lawley

Nominated by Alan Farquhar

'My father was a fiercely determined man, intent on encouraging Greater international harmony,' says Donald Farquhar's son. 'Although blinded in World War II by a Japanese attack on the plane that he was navigating, he did not become bitter. In fact it seemed to make him more determined to pursue his belief in the necessity of building up goodwill between nations.'

In the late 1950's Donald Farquhar joined Rotary. To demonstrate his internationalist convictions, he turned first to Japan the country at whose hands he had suffered the most. In 1961 his efforts were rewarded by an anonymous contribution enabling him to attend an international Rotary convention in Japan. The outstanding conclusion to this trip was his successful sponsorship of the first Japanese student to attend school in Australia --- a young girl called Yoko Miyazaki who arrived in 1963*. Given the post war climate of prejudice and hostility towards the Japanese, this was a major triumph.

Complementing this singular achievement, Farquhar was a dedicated Worker in community services, providing a courageous example to The blind and giving counsel and assistance to many in his retirement years. He died having achieved a lifetime goal. His contribution to the Australia-Japan Student Exchange Programme helped it to blossom into a remarkable example of international cooperation.

Editor's note: 1963* ought to be 1962.

人生の基礎が固まった13ヶ月

濱 恵介

Keisuke HAMA

忘れえぬ青春期のオーストラリア留学。それ以降50年にわたる人生を振り返ると、あちらで暮らした11ヶ月に加え、渡航準備のための1ヶ月余と帰国の旅の1ヶ月は、私の生き方に極めて大きな影響を及ぼした。人生の基礎がこの13ヶ月間でほぼ固まったと言っても過言ではない。

やや紙幅を使いすぎて恐縮だが、1.渡航までの大騒動、2.ホストファミリーとの暮らし、3.苦しみながらも頑張った学校生活、4.ロータリー関係の行事、5.日常の余暇、6.休暇中の旅行、7.つらい別れと新たな旅立ち、8.帰国後の針路と生き方への影響、という順序で私の留学の思い出とその後について、できるだけ詳細に記述したい。

1. 渡航までの大騒動

1960年代初頭、外国旅行は仕事か留学かの目的を持つ極めて限られた人々に与えられる特権と言うべきものであった。それだけに、いつの日か外国（特に欧米先進国）へ行ってみたいという気持ちは、憧れに満ちた夢に近かった。私は宮崎県の小林という田舎町で育ったから、外界への関心がより強かったのかもしれない。

私が高校2年生だった1961（昭和36）年の12月初旬、英会話クラブ顧問の横山馨先生から突然「外国留学の話が来ているが、行く気はあるか？」という意味の打診を受けた。たまたま、その年の夏にNHKラジオ番組でアメリカ留学から帰国した高校生男女の体験談の放送を聞き、羨ましく思っていたこともあり、一も二もなく「行きたいです」と返事した。ロータリークラブのYouth Exchangeというプロジェクトで、留学先はオーストラリアとのことだ。

私に意向打診が来た理由は、生徒会長を務めていたことに加え英会話クラブで活動していたこと、だったのだろう。経緯はもはや不明だが、形式としては学校長の推薦で私にお鉢が周ってきた。

家に帰って父に、しかじかの話があつて是非行きたいと返事したことを報告すると、「何だ、お前が推薦されたのか、これは大変だ。」と驚いた様子。父は創設されたばかりの小林ロータリークラブの会員だったから、留学生募集の件を知ってはいたが、他人ごとのように思っていたらしい。

ともかく、早急な願書の作成と提出が必要だった。勿論英語だから、横山先生にお世話になりながら完成させたが、向こうの責任者Alan Mackay氏の住所Cronulla, N.S.W.がオーストラリアのどこにあるのやら見当も付かない。願書は小林RCを通じてガバナ―事務所へ郵送されたのだろう。

募集の案内はロータリー第370地区（九州と山口県）の全クラブに行ったはずで、どのくらいの応募があるのか、書類だけで選考されるのか、選抜試験があるのか分か

らない。正直なところ、実現の可能性は低いと思っていた。ところが、年末になっていきなり先方から招待状が届いてしまったのだ。

びっくりするやら嬉しいやら、私が有頂天になったのは言うまでもない。あとで分かったことだが、この枠での受け入れ数は8名で、全員がニュー・サウス・ウェールズ州、主にシドニー周辺のクラブに分散して受け入れられることになった。それから出発に至るまで1ヶ月余りの準備・手続きが大変で、家族を巻き込んで“てんやわんや”の大騒動になった。

まず肝心のパスポートの取得をどうしたらよいか、田舎町には経験者がだれもおらず見当がつかない。八幡製鐵所に勤めていた兄がいろいろ探してくれて、小倉の日本通運が必要な渡航手続きや航空券の手配などを引き受けてくれることが分かった。本籍地の福岡県庁でパスポートの申請してもらおう。それだけでは不十分で、渡航先の国が出すヴィザ（入国査証）なるものが必要なことも初めて知った。

言葉の方も心細く英会話部に属していたものの、英語が話せると言えるレベルではない。毎朝、登校前の1時間ほど市内に住む唯一の西洋人家族、カナダ人 Paul Boschmann 牧師の家に英会話の特訓に通った。向こうで最低限の意思疎通に困らないためだったが、その前に文部省が実施する留学生選考試験（英語による口頭試問）に合格することが必要だった。滞在費は先方持ちだったが、旅費は自己負担、いわゆる part guarantee なので、その外貨枠の確保の条件だったからである。

当時、わが家の誰かが小林から東京へ行くには、まず博多駅までディーゼルの準急「えびの」に5時間乗り、親の実家に一泊してから急行「筑紫」に約21時間乗るのが普通だった。東京直通の急行列車が通る日豊本線全線と山陽本線の一部はまだ電化されておらず、この区間は蒸気機関車かディーゼル機関車が牽引していた。

留学生試験のための上京の前に、広島へも行く必要があった。健康診断は何故か広島の日赤病院と指定されていたからだ。1月19日朝自宅を出て、小倉の日通に立ち寄ってから急行「阿蘇」に乗ったがその汽車は遅れ、一人広島駅に降り立った時は夜中の12時ごろ。幸い駅の宿泊案内所がまだ開いていて駅近くの安い旅館を紹介してもらい泊まった。翌朝、宇品行きのバスで広島日赤病院へ行き、そこで同じ目的で萩から来ていた宮本喜久男君に出会った。このたまたまの初対面に、さっそく助けられることになる。所定の健康診断を受けたが胸部X線直接撮影の費用が予想外に高く、困ったことに帰りの自動車賃が足りなくなってしまったのだ。宮本君に付き添って来られた彼の叔母さんに千円貸してもらった。いろいろ心細い思いをしながら、外国留学という自己鍛錬の序章が既に進行していたのだ。

もうひとつ、ヴィザ申請に犯罪の記録がないことを証明する書類を出すことが必要だった（資料-5、オーストラリア副領事からの通知）。地元の警察署で発行してもらおうのだが、10本の指全部の指紋を、側面も含めるため指を一本ずつ180°回して、取られた。ねばねばする黒いインクの不快な記憶は今も生々しく残っている。

渡航費用の工面も大変だった。準備のための出費もさることながら、航空運賃だけで16万3千円。大卒の初任給がまだ1万数千円の時代だから、今の貨幣価値なら200

万円くらいの負担感だろう。それも片道だけで、帰りの費用はまだ考えが及ばない。事業の行き掛かりで負債を抱えていた父は、後で聞いた話だが、その費用を銀行からの借り入れで工面してくれた。本当に有り難いことである。

当時、日本とオーストラリアを結ぶ飛行機は直行便がなく、QANTAS 航空が東京とシドニーの間を香港・マニラ・ダーウィン経由で 16 時間以上かけて飛んでいた。それも 1 週間に 3 便だけ。向こうの新学期は 1 月なので、向こうのロータリーからの要請は 1 月下旬までに到着することだった。

このように手続きだけでも簡単ではなかったが、可能な限り早くという要請もあり、パスポートとヴィザが整う目処の 2 月 9 日の便で出発することになった。6 日に小林を出発し、福岡県庁でパスポートを受領。その時のパスポートは今も手元にある。表紙が濃紺の本皮装・金文字、日本語本文は縦書き、和・英文とも記入内容は手書きとゴム印である。



パスポート：本皮・金文字の装丁、手書き～ゴム印、和文縦書き、外務大臣の氏名・公印

そのパスポートに挟まれて黄ばんだ新聞の切抜きが残っている。毎日新聞の宮崎県版。今読み返すと少々面映いが資料編に収録する。

7 日の夕刻、大きなスーツケースを持って、博多駅から夜行特急列車に母と乗り込んだ。車両の大半は寝台車だったが、それはまだ身分不相応。特急に乗ることさえ二度目だった私にとっては、リクライニングシートの席でも贅沢な旅に思えた。東京には父からの速達郵便が届いていた。出発を祝う激励と「日本国民の代表としての自覚」を促す内容。ホストファミリーから届いた電報も同封されていた。日本橋の東京銀行本店まで赴き手持ちの外貨として 150 米ドルを購入した。

東京三田のオーストラリア大使館領事部でヴィザが発給されたのは出発当日、9 日の朝。ぎりぎりまで渡航手続きが整った。荷物を取りに宿泊先にもどり、夕方 17 時発の飛行機（QF275 便）で羽田から出発した。見送りには母と東京に住む姉二人が来てくれた。私は詰襟の学生服に白線 2 本が入った学生帽姿だった。

同行したのは、門司の小島さん、柳川の立花さん・竹下さん、佐世保の前田さん・松浦さん。文部省の試験会場で一緒になった小島さん以外は、その日に大使館で初めて会う。萩の宮本君・中村さんの出発は少し遅れた。外国に行くのは勿論、飛行機に

乗ることさえ初めての経験だ。見送りに来た家族の心配をよそに、こちらはワクワクした気持ちで一杯だった。

出国手続きを済ませ、機体後部に横付けされたタラップ（屋外の階段）から飛行機に乗り込む。見送りデッキに家族を探すが薄暗くてよく分からない。機内に入ると中は「外人」ばかり、聞こえる言葉は英語、そこはもう外国だった。日本人は我々6名と仕事で出張する数名の男性だけだったと記憶する。

既にジェット旅客機が就航し、乗る飛行機はボーイング 707（通路の左右に3席ずつ）。いよいよ離陸、エンジン音が高まり強い加速で座席の背に体が押し付けられるのに驚いた。その後幾度となく飛行機に乗ったが、その時の感覚を今でも思い出す。機内で出される食事、スチュワーデスの様々なサービス、飲み物用の使い捨てプラコップなど全てが珍しく、緊張しながらも初体験を素直に楽しんだ。

備忘録 シドニーに到着した時の驚き・感慨 10項目

- 1) 交換留学生を出迎えた大勢のロータリアンと家族、新聞・テレビなどの報道陣。
- 2) 最初のホスト家族と一緒に乗った大型乗用車が、立派な舗装道路をすべるように走る爽快さ（私が住んでいた町は、目抜き通り一本を除き道路は砂利敷き）。
- 3) 自動車運転は手でも合図。車にはブレーキランプと方向指示器（ウィンカー）が装備されているにもかかわらず、停止の際にはドライバーが右腕を窓の外に出し手の甲を後ろ向きに肘から先を立てて後続車に合図する。同様に、左折の際は手の平を内側に立て、右折の際は手の平を下に水平に出す。
- 4) 抜けるような青空の下、緑多い住宅地にゆったりと並ぶ赤い屋根、煉瓦造の家々。道路はどこも広く歩道付き。歩道は中央部だけがコンクリートで残りは芝生。
- 5) 一番目のホスト Andreasen 宅に到着し、最初に頂いた昼食。奥様がいろいろ準備してくださった特別なご馳走だったはずだが、日本の「白飯とおかず」の組み合わせと違い、料理だけ、それも沢山、デザート付きの豪華さに圧倒される。
- 6) ホストマザーが目覚めの果物ジュースをベッドまで持って来て下さり夢のよう。
- 7) 洋式便器は初体験。浴槽、洗面台と便器が一緒の「バスルーム」も初めて。
- 8) 太陽は南から照るものと思い込んでいたが、北側から日が射していた。北緯 32° の故郷に暮らす人達は自分と違う角度で（横向きに）立っている、という想像も。
- 9) お金は Australian pound。1 ポンドは 800 円に相当。その 1/20 が 1 シリング、さらにその 1/12 が 1 ペニー（複数はペンス）。硬貨は 2 シリング、1 シリング、6 ペンス、3 ペンスが銀色で、1 ペニー・1/2 ペニー（ハイプニー）が銅貨。表を飾る肖像は若いエリザベス女王の横顔だけでなく、先代のジョージ 6 世、稀にジョージ 5 世（1920・30 年代）のものまで混じっていた。毎週支給される 1 ポンドの小遣いは厚遇で嬉しい。
- 10) 季節が逆で、草木も土も、言葉はもちろん鳥のさえずりも、人の顔つきも全て日本とは違う。「ここは異国、遠い遠いところに来たんだ」という思い。

2. ホストファミリーとの暮らし

お世話になったホストファミリーは5家族。ロータリアン（ご主人）の職業と苗字をたどると、最初が苗木農園主 **Andreasen**、次が肉屋 **Hayes**、3番目が弁護士 **Hancock**、4番目が電気技師 **Everitt**、そして最後が印刷所経営者 **Scott** だった。それぞれに特色があり忘れがたいが、ここでは最も印象に残る3軒目 **Hancock** 家の例を紹介しながら、家族、住まい、日常生活、出来事などを書き留めたい。

家族構成は弁護士（Solicitor）のご主人 **Ted**（Edward）と奥様の **Betty**、長男 **Ken**、長女 **Pat**（Patricia）、次男 **John**、次女 **Glen**、の6人。年齢的に私は4人きょうだいの丁度まん中にいた。私はホスト夫妻を **Mr. Hancock**、**Mrs. Hancock** と呼んでいた。

家は高級住宅地とされる景色の良い水辺の斜面に建ち、入り口や食堂・居間・夫婦寝室・娘達の寝室などは最上階にあって、息子たちの寝室・書斎・パーティールームなどが中間階に、さらに階段を下りた最下階に客室（私の個室）と洗濯場（ローンドライ）があった。

家の入り口は客を迎えるメイン・エントランスと台所に近い日常用ドアの二箇所に分れ、食事する場所



Hancock family とともに：後列左から Glen, Ted, John, 私, Ken
前列左から Pat, Betty

も台所と一体になったコーナー（ダイニングキッチン風）と、食堂（ダイニングルーム）があった。普段は夕食も台所の食事コーナーで摂っていたが、日曜日のディナーやクリスマスのような改まった場合にのみ食堂が使われた。

ガレージには家族用（兼ご主人の通勤用）の大型乗用車と奥様の小型車、それに長男 **Ken** のスポーツカーがあった。パーティールームのテラスから広い階段を降りたところには庭園。ほぼ平らな芝生の部分の向こうには、様々な植物が茂る急斜面が水辺まで続いている。階段を下りてゆくと、水泳用の小型プールとモーターボートとセールボートを格納する艇庫へ達する。水面は **Georges River** と名前は川だが、水は海水が混ざり風景は入り江のようだった。

理想的な住環境、家の立派さ、自家用車の保有状況などから、当時の日本とは比べ物にならない豊かさを感じさせられた。オーストラリアの中でも極めて恵まれた階層の例には違いないが、住まいにまつわる豊かさや可能性を強く印象づけられ、後年の職業活動へも少なからぬ影響を及ぼす居住体験となった。

少し戻るが、私が最初にこの家を訪れたのは、まだ2軒目のヘイズ家にいた4月。18歳の誕生日をこのパーティールームで祝ってくれた時のことだ。ホストクラブの関

係者家族はもちろん、シドニー周辺にいた日本からのロータリー派遣学生とそれぞれのホスト家族も招かれ、手紙の記録によれば 60 人近い人数だったらしい。記憶に残るのは、1 フィート角以上はある大きな特製フルーツケーキへのナイフ入れ、様々な贈り物、そしてダンスパーティの賑やかで華やかな雰囲気だ。ダンスは不慣れだったが、素敵なお相手にも恵まれ本当に楽しかった。その後の人生を含め、こんなに盛大に祝ってもらった誕生日は他にない。

さて、日常生活で日本と最も違ったのは、自分を含め子供たちが夕食後の片付け・皿洗いをすることだろう。洗濯は奥様の仕事だったが、けた違いに広い家の掃除には家政婦に任せていたようだ。ご主人の家事は週末の庭仕事だった。

日常の食事は朝食も肉・卵料理が出た（肉屋のヘイズ家ではソーセージやベーコンだけでなくポークチョップなども）。イギリス式をベースにしたオーストラリア風なのだろう。飛行機内で初めて食べたコーンフレークスも朝食の定番。平日の昼食はサンドイッチを準備してもらい学校に持って行く。夕食はステーキやローストなど肉料理が多かった。牛肉は日本ではたまにしか口にできなかったから、オーブンで焼いてその肉汁でソースを作る程度の（いま思えばお手軽な）料理でも、若い食欲には大ご馳走だった。そもそも日本のご飯におかず（主食・副食）という観念から、全部が料理（おかず）というのは、慣れるまで大変贅沢な感じがした。付け合せは、マッシュポテトやグリーンピース（豚肉の場合は白いインゲン豆）など、パンは薄切りの食パンが通例。オーストラリアの食事は大体好きだったが、日本食が恋しくなる時もあった。

日本語で言いなれた「いただきます」に相当する表現はない。但し、日曜日の昼のディナーだけは、家族の誰かが指名され **Thanks Lord for what we are about to receive, amen.** と祈りの言葉 **grace** を捧げてから食事を始めた。普段の夕食がティー **tea** と呼ばれていたのは、今でも不思議に思うことだ。

ご主人の **Ted** はユーモアに溢れ陽気な性格である一方、職業柄だろうか言葉をきちんと選び、ゆっくりと話してくれたので、私にとって様々な理解が進んだ。今でもありがたく思っているのは、毎夕食後に行われた英語の指導だ。教材はその日の新聞。記事の中から私が適当に選び、テーマが何であれとにかく声を出して読まされる。理解できればそのまま読み進み、分からない単語や表現が出てくると、その都度とまって意味を説明してもらう。せいぜい 30 分程度だったと思うが、非常によい勉強になった。学校だけでなく家庭での訓練のお陰でずいぶん英語の力が付いたと思う。

奥様の **Betty** は、几帳面で心配性ながらとても優しい方で、私にとっては素敵なお母さん代りだった。食事、洗濯など日常生活の世話だけでなく、目の具合が悪くなった際に眼科医に連れて行ってもらったり、彼女が母親を連れキャンベラへ旅した折には、同行させてもらったりした。

彼女には一度だけひどく叱られたことがある。私の帰宅がかなり遅くなったからだ。あらかじめ伝えておくのを忘れたのが原因だが、毎週金曜日の放課後は **Reidy** 先生の英語補講があって、日の短い季節だったから帰宅した時はもう暗かった。I am sorry. と口先で謝ったが、本心でないことを見透かされ、**You are not sorry!** とやり返された。

自分が親になってから実感できたが、預かった子の安全が気懸かりなのは当然だ。その晩、遅くなくても帰って来ない私のことを、彼女はどんなに心配したことだろう。姉のような長女 Pat が色々弁解し、私をかばってくれたのは嬉しかった。

帰国までにはまだ半年以上あったが、帰りの船旅を段取りしてもらったのもハンコック氏だ。いくつかの選択肢を探し、家からの送金や予約の仕方を実務家らしく的確に指図してくれたお蔭で、別に記述する海路の帰国が実現した。

ハンコック夫妻はその後2度そろって日本に来られ、私は日光や京都にまで観光のお供を務めた。その後、結婚直後に私がフランス東部のストラスブールに留学していた時期にも、現地でお会いした。お二人がヨーロッパを旅行された際、ライン河を船で下る旅程を一部列車に変更して立ち寄ってもらったのだ。新妻朝子と一緒に美しいストラスブールとアルザス地方の風物をご案内し、わが家での夕食後、近くの運河沿いに停泊するクルーズ船に乗ってもらった。



Ted & Betty Hancock を京都へご案内
二条城にて 1966年

フランスから帰国して3年後の1976年、初めてオーストラリアを再訪した際は、妻と2歳の長女それに私の母親連れで1週間以上も懐かしいお宅に逗留させてもらった。

お二人は既に他界されたが、長男 Ken と長女 Pat とは今なお交流がある。2007年には Ken は娘を連れてわが家に逗留し、その翌年、私はメルボルンで開催された持続可能な建築・都市に関する国際会議へ参加した際にシドニーにも立ち寄り、彼の家に泊めてもらった。Pat もシドニーへの来る時期を調整してくれて一緒に食事を楽しんだ。

当時わずか2ヶ月間、家族のように一緒に暮らしたご縁が、50年後の今日まで続いているのは、文字通り有り難いことである。



2008年 Sydney、Ken & Rachael
Hancock (右奥) ご夫妻の自宅で

Pat Ellis/ Hancock 家の長女 (左
手前) と Gay/彼らの従妹 (左奥)

Dr. Barry Pearson /ホスト RC で
1962年当時から会員である唯一と
りの人 (右手前)

3. 苦しみながらも頑張った学校生活

私が通った学校は、Hurstville Boys' High School という男子校だった。校長の Mr. Ross Thomas がホストロータリークラブの会員であった縁による。5年制の第5学年は卒業試験 (leaving certificate) 対策が中心とのことで、私は4学年に編入された。クラスメイトは自分よりも2歳は年下で、「子供っぽい連中と一緒に」という感覚はあった。クラスの担任教師は Mr. Bede Goodman、英語の教師でもある。

辛かったことは忘れてしまいたい人情そのままに記憶から遠のいていたが、改めて手紙や日記を読むと、学校へ通い始めた頃の苦しい様子がよみがえる。勝手が違いどう行動したら良いのか分からず、言葉も通じず、勿論授業で先生のしゃべる英語も理解できず、オロオロしていたようだ。両親への手紙でも「辛い、苦しい」としきりに訴えている。但し、土曜日に授業がなく、週末がいつも連休というのは嬉しかった。



授業の難易は、科目によって極端に違った。理数系はすでに終えている内容が殆どだったので、英語での表現に慣れた後は簡単だったが、問題は予想通り英語。特に古典には苦しんだ。シェイクスピアの戯曲や古い形の詩など、授業には殆どついて行けず、前期の試験は、英和・和英辞書を使って良いという条件緩和にもかかわらず、散々な結果だった。

日本の高校では最上位だった自分が、急に劣等生になってしまったような気がして随分悩んだ。しかし、その悔しさをテコに何とか頑張ったと思う。英語でもスペリングのテストだけは対抗できた。あらかじめプリントが配られるから、予習さえしっかりしておけば、テストは大体できる。

英語の授業でとても愉快なことがあった。Goodman 先生が「苦しみを与えずに死なせる方法」という言葉を生徒に問うたことがあったが、誰も知らない。私は日本語の安楽死という言葉を出し急いで和英辞書をめくった。先生はその様子に気づき、しばらく時間を置いてから「ハーマ、見つけたか？」と、声をかけてくれた。自信のない発音で“euthanasia?”と答えると、先生は笑顔で“Right!”。クラス中がどよめいた。外国人であることが英語で有利に働いた珍しい出来事だった。

留学先の高校で最も面白かった科目は何といても Technical Drawing (製図) だろう。この高校がもともと工業学校として発足したことが背景のようで、職業的な選択科目として経済、木工、金工、そして製図があった。当初、これらの実技は無理だから、と経済を選ばされたが、さっぱり面白くない。「経済は自分に向かない、むしろ製図への興味が強い」と申し出でて乗り換えた。クラスメイトは1年生のときからやっているコースだが、途中からでも特に難しくない。当年度以前のものを含め、片っ端から練習課題を図面化する。学校の製図室に加えて家に持ち帰ってもやった。提出す

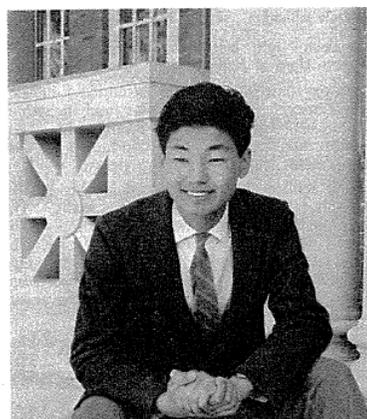
ると図面に教師が点数をつける。実質上の最高評価、95点を結構もらった。最後の試験ではとうとう学年の最高点を取ってしまい、自分自身の適性ないし潜在能力を発見することになった。学校を去る時、貸与されていたドイツ製の製図器セットを「記念に」と担当の Cross 先生から頂いた。特別なご褒美だったのだろう。

オーストラリアはスポーツが盛んな国だ。学校でも正課としての体育の時間以外に、毎週水曜日の午後はすべてスポーツの時間。その代わりにクラブ活動という形のスポーツはない。冬期・夏期とそれぞれ好みの種目を選んで、技量によってグループ分けされる。私は夏期にバスケットボールを選んだ。他校との試合もあり、男女共学の学校へ出かけるときは、チームメイトの張り切りようが違った。冬期にはテニスを選んだが、オーストラリアで初めて経験したテニス（硬式）は、その後大学時代と会社員時代を経て今なお続けている。

School Cadet というのは希望者グループに与えられる一種の軍事教練、またはそれに参加する生徒のことである。1ヶ月に1度だったか、彼らはカーキ色の制服・制帽、軍靴という姿で登校する。それは朝礼（屋外）のある日で、ライフルを担ぎ整列して行進し、国旗掲揚の儀式を執り行った。一般生徒は掲揚された国旗に向かい、胸に右手を胸に当て号令に合わせ“I believe in God, I salute my Flag, I serve my Queen”と唱和する。日本では経験したことのない行事で、国家への忠誠心を育む教育と思われた。私はオーストラリアや女王に忠誠を誓う理由はないから、(胸に右手を当てはしないが、失礼がないように) 国旗の方向を向くだけで唱和もしなかったが、非難の視線を受けているようで何とも居心地が悪かった。

補習授業も経験した。Mr. Roy Reidy は私のことを何かと気遣ってくれた英語主任教師である。5年生が対象の卒業試験 (Leaving Certificate) 受験者の補講に私を招いてくれ、親身になって私の英語力向上に配慮してもらった。週に一度だけ正課が終わったあと、新築の図書室に移動し英語の練習問題に取り組む。内容はもはや記憶にないが、多分良い訓練になったのだろう。

英語の最後の試験は、辞書なしで挑戦



Keisuke Hama — Visitor from Japan

by staying with a Rotarian and his family, who showed me many exotic sights.

Soon I started school, where I also found things rather strange. For instance, it was hard for me to understand that we could not be in our classroom at playtime, lunch-time and even before school; also we must enter a room in lines led by a teacher.

Another thing which surprised me was borrowing all the text books from the school, for, in my country, we have to buy them ourselves.

One custom which may make me lazy, was that there was no school on Saturdays. This was unusual, as in Japan, we go to school six days a week. In one respect I am lucky compared to my Japanese friends, as in Australia, pupils are not duty-bound to clean up the rooms after school.

The real reason that I came to this country was not only to study in a foreign country, but to make friends with you, that is, to promote goodwill and understanding between Australia and Japan and finally to bring peace to all the world. This is very important. I realise my duty and have been trying to achieve this purpose. I believe this exchange project will fulfill something helpful to world peace.

—KEISUKE HAMA, 4B.

MY SIX MONTHS IN AUSTRALIA

One very fine day of the New Year I was presented with the most magnificent message that I was ever given. That is, I received an overseas air-mail letter which invited me to come to Australia as an exchange student. I was really beside myself with happiness.

Five weeks later, I left Japan full of hope. Arriving at Sydney, I was rather bewildered by so many people who welcomed me in a strange and completely different language.

For the first few weeks I was quite excited at the different way of life, which I experienced

した。自分なりに頑張った結果が 29 点。それでも、最下位ではなかった。記述式の歴史は 61 点獲得し合格。全科目合計では最高点を獲得し、“Kei が Dux（首席）では？”と噂された。しかし、英語が不合格な上に、一時的に席を置いた学生という理由から、この名誉ある称号は頂戴できなかった。資料-20、在学・成績証明書参照。

その他、記憶に残ることを列記する。

制服：明るい青色のブレザーに灰色のズボン、空色の長袖シャツ、それに青・黄色のストライプのネクタイ。制帽はなし。ブレザーの左胸（ポケット部分）には黄色の糸で Thought Courage Success とのスクール・モットーを含んだ校章の縫い取りがある。

教材貸与：教科書は購入するのではなく学校から貸与される。学年が終われば返却し、次の同学年生がまた使うのだから、カバーをして丁寧に扱う。書き込みは出来ないが資源と費用の節約になる。製図版、T 定規、コンパスなど製図用の道具も大部分は貸与だったし、バスケットボールのユニフォームも購入した覚えがない。

体罰：校則違反などを犯した生徒には、罰として cane（籐か黍の棒）による鞭打ち（caning）が行われていた。その現場に出くわすと、ちょっとした恐怖を覚えたものである。罰を受ける生徒は片腕と手を水平に伸ばし、教師は生徒の指の先端あたりに cane を振り下ろす。cane は軽く細いから、外傷が残ることはないにせよ、一瞬鋭い痛みが走るに違いない。

掃除：日本では教室の掃除が当番で回ってきたが、通学先ではその義務はなく、楽をした記憶がある。

昼食：昼食はホストマザーが準備してくれるサンドイッチと果物を持参した。まれにタックショップという売店でサンドイッチ又はミートパイを買うこともあった。飲物は（手紙の記録によると）紙パックの牛乳などを買っていたようだ。

スクールダンス：上級生のダンスパーティである。たまたま開催日がロータリーの行事と重なり、参加することはなかった。しかし、肝心の女性パートナーがいなかったもので、仮に参加することになっていたら一体どうしたのだろう。逆に、同行した女子留学生からパートナー役を頼まれて、二度よその学校のスクールダンスに出かけたことがあった。

他校訪問：よその学校と言えば、スポーツの試合だけではなく授業にも参加したことがある。それも生徒としてではなくゲストのような役割で。Fort Street Boys' High School では当時としては非常に珍しい日本語の授業が行われていた。担当の Mr. Derek Dalglish から招待されて、日本語クラスへお手伝いに出かけたのだ。この高校はシドニーで最も古い歴史を誇る名門校（1849 年創立）である。ダルグリッシュ先生は終戦後、占領軍の一員として呉に駐留し日本語を習得されたそうだ。日本語を選択する生徒は学年を超えて約 30 名。一所懸命、日本語で話そうとしてくれる少年たちが可愛かった。先生の授業は日本の言葉だけでなく、書道も含まれた。硯で墨を擦り毛筆で漢字や仮名を書く練習だ。私は得意とは言えない書道のお手本を示す立場になり、ちょっと当惑した。後日、先生の依頼に応じて日本の小学校の使用済み教科書などを友人に集めてもらって届けたりした。

帰国後もダググリッシュ先生との文通は長く続いた。1976年に家族とともに再訪した際は、ご自宅に招いてくださり、二度目の訪問の際は、同伴した長女とともに市内の新しい名所などのご案内をしていただいた。2004年、三度目の訪問の際は既に介護施設に入っておられ電話でお話しはしたが、もはやお会いすることは叶わなかった。

さて、10ヵ月間の通学が終わりいよいよお別れの時期がやってきた。学校の年度が終わる儀式は何故か **Speech Night** と呼ばれた。12月10日の夜に式典が開かれ、挨拶・演説や表彰が行われる。クラス仲間はいつもと違ってスーツを着てきたが、私は慣例を知らずに学校の制服姿だった。学年・科目ごとの最優秀者には、あらかじめ自分で選んでおいた図書が賞品として授与される。その時期が近づくと移動図書館のようなトラックが学校に来て、該当者は希望する本を自由に選ぶ段取りになっている。

式典の中、私はロータリー交換留学生として特別に紹介され、スピーチをする機会が与えられた。私がオーストラリアへ来た理由、平和と国際親善の大切さなどについて原稿なしでスピーチした。その頃には英語もかなり流暢になっていた。感謝とお別れの言葉で結ぶと、万雷の拍手がわき起こり自分自身が感動してしまった。出席してくれた4番目のホスト **Mr. Everitt** が“**Marvellous, marvellous!**”とほめちぎってくれた言葉が忘れられない。

1年に満たない学校生活は、私にいくつかの貴重な財産を残した。英語の実践的能力、図学・製図の技量、格段に増した社会的対応性などである。

英語主任だったリーディ先生は、帰国後、近年に至るまで美しい筆記体で私に手紙を書き続けてくださった。後年オーストラリアを計4回訪問した際、先生には勤務する学校あるいはご自宅に欠かさず挨拶に伺った。

1989年、中学生の長女めぐみを連れて二度目のオーストラリア再訪をしていた時、彼からの情報で、担任だったグッドマン先生が校長として母校に戻って来ていることを聞き、娘と一緒に学校まで会いに行った。この再会によりグッドマン先生との交流が復活し今日まで続いている。クラスメイトで今日まで連絡を保てたのは、同じ地域から通っていた **Ron Langley** 唯一人である。

リーディ先生は、体の衰えから介護施設に入られているが、99歳のご高齢となった今も私のことをよく覚えておられ“**Kei** はどうしているか”など気遣ってくださるそうだ。視力などの衰えにより芸術的な手書きのお手紙はもはや書いてもらえないが、息子さん **Trevor** のEメールを通じて相互の様子を今なお知らせ合える。何と有難いことか。なお、リーディ先生とグッドマン先生の寄稿文が第2章に収録されている。



長女を伴い通った学校を訪ね Goodman 校長
(当時の担任) と 27 年ぶりに再会

4. ロータリー関係の行事など

私が受け入れられたクラブは第 275 地区 Rotary Club of Hurstville である。初めて例会に参加したのは到着 9 日後。夏の盛りなのに背広とネクタイ着用を聞き、夏服など持っていないのでどうなることかと心配した。慣れない英語でご挨拶をしたのだろうが、もはや記憶にない。記念品としてオーストラリア紹介の立派な本を頂いた。内容はカラー写真が豊富で、扉の部分には Keisuke Hama に進呈するという飾り文字を中心に全会員のサインがある。テニス用のラケットも一緒にプレゼントされた。右は当日のスピーカー、Alan



Davidson (クリケットの名選手) との記念写真である。私の背広は兄からの借り物。

大きなロータリー行事として最初のもは地区の大会だった。我々が招待されたのは交換留学生を紹介するセッション。National costume で、との指示があったので女子は着物、私は学生服で済ませた。日本以外の留学生はインドの Rita Bhandari ただ一人だった。夜は背広に着替えて劇場へ移動しミュージカル“Oliver”を見た。ミュージカルを見るのも初めてだった。その客席で右手指の中 3 本がないロータリアンを紹介され握手した。ひょっとしたら戦争中に失ったのかもしれない。その時は気持ちが動揺して確かめる勇気がなかった。今でも気にかかる。

Annual Ball という年に一度の舞踏会は特に大きなものだった。小島さんを除く他の



舞踏会にて 濱、立花、竹下、宮本

交換留学生が再び一緒。これはロータリアン子女の社交界デビューという意味合いがある。社交ダンスの経験が全くない私はホストマザー Rita Hayes から家でダンスの特訓を受けた。Ball 本番ではロータリアン夫人達とのダンスをなんとかこなした。服装は本来タキシードだが、手持ちの背広（ダークスーツ）と、ホストファーザー Ron から拝借した蝶ネクタイで済ませた。

その際、招待されていた前 NSW 州総督 (Governor) 留学生一人一人を接見する儀式があった。総督というのは、イギリス女王から形式上の統治者として任命される「元首ご名代」のような存在。小太鼓が打ち鳴らされる中、赤い帯状のカーペットの一番奥に立つ

前総督のところまで一人ずつ進み、紹介され握手する。まるで昔の王様が遠い国からやってきた使節を歓迎する儀式のようで、思い起こせば興味深い。

夜遅く帰宅して、鏡に映る自分の姿を見てびっくりした。ほんの数か月前まではイガグリ頭の学生服姿だったのに、髪もほぼ整いダークスーツと純白のシャツに身を包み、蝶ネクタイをした自分が、いっぴしの紳士に見えて感激してしまったのだ。

他の行事で記憶によみがえるのは野外のバーベキュー。ホストクラブ単独の行事だったらしいが、インドからの交換留学生 Rita も招待された。いかにもオーストラリア風の企画だが、彼女は肉類を一切食べず、文化の違いとは言いながら気の毒に思った。同じイベントでは、スキーのスラロームのように旗門を立て、自分の車を運転して所定のコースを走り抜ける時間を競っていた。日本では考えがたい危ない遊びだが、これも豪州風ということだったのか。

他のクラブからの招待もあった。South Sydney ロータリークラブへは竹下さんと一緒に招かれ、自己紹介と青少年交換の目的や自分の役割などについて短いスピーチをした。その時頂いたセットのグラス（ロータリーの紋章とクラブ名入り）でビールを飲む時に、その出来事を思い出す。

ホストクラブの例会には、近況報告を兼ねて何度か参加した。滞在中最後のイベントはクリスマスパーティだったが、気まずい思い出しかない。開催日時がたまたま学校の終業式 Speech Night と重なり、事実上参加できなかった。遅れて会場へ行ったものの、私はパーティ会場へ入ることを許されなかったのだ。雰囲気や言い訳から推測して、未成年者の参加が不都合な事情があったらしい（学校の制服を着ていたことがまずかった）。帰宅することもできず、控室でパーティが終わるまで待つ羽目となった。このような結果になったことについて、当時会長だったホストの Scott さん夫妻が「悪かった」と謝ってくれたが、気持ちは晴れず後味の悪さだけが残った。

年末最後のクラブ例会は、インドから帰国した交換留学生 Gary Andreasen の帰国報告と私の感謝とお別れの挨拶をする機会となった。

帰国後のホストクラブ訪問は2度ある。1976年、初めての再訪の際、妻と一緒に参加しスピーカーとして確か両国の女性の地位比較についてお話した。にわか作りのテーマで中身は薄かったと思う。その頃は知った顔がまだ沢山いて、再会の喜びと懐かしい思いが一杯だった。

2004年、3度目の訪問時には、Hurstville RC の例会に次女まゆみを連れて出席し、帰国以来の経歴について手短かに報告する機会をいただいた。その段取りをしてくれたのが、唯一人当時からの当クラブ会員 Barry Pearson であった。彼は医者で、留学を終え東南アジア経由で帰国する私に必要な予防接種をしてくれた人でもある。

同じ旅行中に、当時の会長 John Crawford さんを訪ねるため、シドニーへの移動の途中ニューカッスルへ立ち寄った。奥様とまゆみを加え4人で食事をしながら40数年ぶりの再会を喜び合った。ご高齢ながら当時のことをよくご記憶で、有難く思った。

5. 日常の余暇

学校のない休日や余暇時間には何をしていたのか。思い出すままに書き留める。

ドライブ：

到着直後の2週間ほどは、ホスト家族の長男、大学生の **Allan Andreasen** がピックアップ型のトラックであちこち連れて行ってくれた。北はシドニー都心部からパームビーチ、南はウルンゴンあたりまで遠出した。実家に自家用車はなかったから、車で出かけることだけでも嬉しかったし、ましてや知らない国の風景をいろいろ見せてもらえる「ドライブ」という楽しみを堪能した。

外出・買い物：

向こうでの生活にある程度慣れてから、一人で **City** まで買い物などに出かけることもあった。**City of Sydney** とは（ロンドンの場合と同じで）シドニー都心部の狭い一画のことを指し、それ以外の地域は **Sydney** という地名は公式には使わない。最寄り駅の **Hurstville** 駅までバスに乗りそこから電車で約30分、郊外電車がそのまま地下にもぐり環状線を回ってふたたび郊外へ向かう形だ。

シティは私にとって初めて見る西欧型都市だった。整然とした区画割に重厚なファサードを持つビル群、都心部の公園、タウンホールの時計台、そして大聖堂。港の風景も印象深い。シドニーのシンボル、ハーバーブリッジが都市の南北を結ぶと同時に深い入り江のゲートのようにそびえる。旅客ターミナルには豪華客船が停泊していることがある。オペラハウスはまだ工事中で、基壇部分が形を見せていた。



1962年当時のシドニー風景、左) オペラハウスは工事中、都心部に超高層は1棟のみ、中) George Streetの景観、右) 今日の歓楽街 Kings Cross にもまだ19世紀の面影が残る

シティまで出かけ実際に買い物するのは本屋 **Angus and Robertson** くらいで、あとは街の探索だった。街の中をあちこち歩き回り、目にするあらゆる様子が興味深かった。後年、都市計画を専攻することになる背景の一部が、この散歩にあったような気もする。屋台のサンドイッチや **fish & chips** を買って食べたりもした。

手紙書き：

家族や知人との通信は、手紙が事実上唯一の手段だったから、毎日のように誰かに手紙を書いた。封書が1シリング6ペンス（60円）、エアログラム（航空書簡）が10ペンスで、小遣いの主要な使途になっていた。

手紙を頻繁に書くことは今思えば大いに有益だった。内容はともあれ、出来事や考えを文章に書き表すという力が身についたと思う。また、手紙を書くのは漢字を思い出す良い機会になった。国語辞書を持って行かなかったので、漢字を調べるには和英辞書が役に立った。両親に書いた手紙は70通以上、いま手許にある。

手紙を受け取るのは日常生活の中で最も大きな楽しみの一つだった。配達の日曜日は週3便の飛行機に合わせて大体決まっていた。日本にいたらこれほど多くの手紙をやりとりすることはなかったはずだ。あまり口をきいたことがなかった女の子からも手紙を書いてもらえたのは留学生の特権のような気がした。

写真：

カメラを持ち写真を撮影することはオーストラリアで始めた。兄が手持ちのカメラを貸してくれ、主に白黒写真を撮った。兄の勧めでカラー写真もかなり写している。コダクロームというスライド用フィルムは、撮影が終わると巻き取って返送用のタグを付けたアルミ缶に入れ現像所へ郵送する。しばらくするとマウントに嵌められたスライドが小箱入りで送り返されるという仕組みだ。値段は非常に高く、1枚が約100円に相当したと記憶する。小遣いの使途として大きな割合を占めた。



コンサート：

Hancock 家の長男 Ken と長女 Pat に連れられて、シドニー・タウンホール（公会堂）で開かれたコンサートへ出かけた。それまでレコードやラジオでしか聴くことのなかった交響楽を初めてオーケストラの生演奏で聴いて感激した。予約した座席がステージの後ろ側というのも珍しい体験だった。

6. 休暇中の旅行

週末には一度だけ2泊で、まとまった休暇には1週間前後の旅行を3回している。

オレンジ Orange：

イースター休暇に次のホストファミリー、ハンコック一家に招待されて、シドニーから内陸へ約200km入ったオレンジへ旅した。この町のはずれにハンコック氏が所有するリンゴ園があり、ご主人の妹夫婦（ハンコック夫人から見ると実兄夫婦）に管理を任せていたのである。4月下旬、ちょうどリンゴの収穫期で、リンゴの摘み取りを手伝った。宿泊は果樹園を見下ろす場所にあるコテージ風の住まいに同宿。向こうの長男・次男に連れられてウサギ狩りに行き、ライフルで初めて実弾を発射した。私は仕留められなかったが、狩りの獲物が夕食に供された。都市部ではないから、トイレは水洗ではない。穴の開いた腰掛（便座も木製）の下にバケツが置いてあり、汚物はどこかに捨てるのだろう。田舎での暮らし方を学ぶ貴重な経験をした。

チューロス湖 Tuross Lake :

とある金曜日の午後、学校が終わると校門のところまでヘイズ夫人が出迎えてくれた。家族でなるべく早く2泊の週末旅行へ出掛けるためのはからいだ。行き先はシドニーの南約250kmにあるTuross湖畔の別荘。夜中に現地に着いて翌日は湖で遊ぶ。小型のセールボートで入り江のような静かな水面を走る。風の力でこんなに速く静かに進むものか、と感心した。地引のように網を引くと小エビが沢山取れる。鍋で茹でて塩味で食べるとこれが美味しい。土産にも沢山持ち帰った。

グラフトン Grafton :

この旅行は、渡航前に父と一緒に宮崎市南部のゴルフ場で会ったロータリアン John Gilroy 氏の招待である。所用でシドニーに来ていた同氏が家まで迎えに来てくれ、車で海岸線を北上し約500km先のグラフトンへ向かった。海岸線の素晴らしい景色を楽しみながら、途中モーターで一泊(氏とは別室)。グラフトンではご自宅へ泊めてもらうものと思っていた。ところが、到着するや同氏が経営する小さなホテルの1室をあてがわれた。ホテルが自宅を兼ねていたのかもしれない。その上、家族の紹介はなく、食事もホテルのレストランで一人だった。会話は主に同宿の芸術家とだけで、滞在中はほったらかし状態だった。面倒を見てくれ人は誰だったのだろう。その人の運転であちこちドライブしたり、牧場で馬に乗ったりして遊んだ。帰路は飛行機に乗せられ、短時間でシドニーへ戻った。よく分らない旅行だった。

キャンベラ Canberra :

8月下旬、ハンコック夫人が彼女のお母様と旅行するのに、車に便乗し連れて行ってもらった。キャンベラは言うまでもなくオーストラリアの首都、人工的に作られた都市だ。当時は建物も少なく、国会議事堂も仮のもので、まだ閑散としていた。

キャンベラ滞在中で最も思い出深い戦争記念館について思い出を記す。館の正面、前庭中央にはシドニー港深くに潜入したものの、敵艦の攻撃に至らず自爆沈没した日本海軍の特殊潜航艇が展示されていた。館内には南方のジャングルで収集されたものか、日章旗に武運長久の文字と寄せ書き、鉄兜、アルミの水筒、など戦闘をしのばせる遺品の数々陳列されていた。その時の気持ちを手紙から拾うと「旗に書かれた『祝出征 清水先生・・・学校生徒一同』を見て、先生が生きて帰れたのか絶望の中に死んだのか、などと考えて涙が出た」とある。

留学が決まった時、私に「オーストラリアは太平洋戦争で戦った旧敵国」という実感は全くなかった。連合軍と戦ったのだから、英連邦軍の一翼にオーストラリア軍がいたはずなのに、戦争相手はアメリカという意識ばかりで、真珠湾は知っていても、日本海軍がシドニー港の敵艦船への攻撃を試みたことなど全く知らなかったのだ。

メルボルン Melbourne :

キャンベラから Yass まで車で送ってもらい、そこから列車で一人メルボルンへ向かう。ニュー・サウス・ウェールズ州とヴィクトリア州の境の駅には税関があり、防疫

上の理由からオレンジと生の豚肉の持ち込みは禁止と聞いていた。実際、プラットフォームに備えられた回収箱に何かを入れる人もいた。「オレンジは食べてしまえばいいのよ」と隣の乗客が言ってくれた。窓からの景色は、ユーカリの茂みと牧場、羊、蛇行する川、おおらかな大陸の風景だ。しかし実に単調。1、2時間眠りこけて目が覚めても同じ景色だったのがっかりしたものだ。

メルボルンには夜になって到着。ターミナル駅 **Spenser Street Station** にはハンコック家の親戚ジム・リード **Jim Reid** 氏が出迎えてくれ **Moreland** という郊外にあるご自宅に泊めてもらう。ここでは奥様の **Rita** さんに食事などの世話になった。住宅は平屋の一戸建てで、シドニーよりも寒冷的な土地のため、居間の暖炉には火が燃えていた。古くから開けた都市だからか、気候が似ているためか、暖炉をはじめイギリス風の雰囲気はシドニーより強く残っている感じがした。リード氏はロータリアンで、地元の **Coburg Rotary** の会長。私をクラブの例会にも連れて行ってくれた。

メルボルンの中心街にはトラムで行く。旧国会議事堂、コリンズ通りなど、一人であちこちを見物してまわった。メルボルンは歴史と風格のある美しい街だと思った。ところが、シドニー人はメルボルンのヤラ川がいつも濁っていることを揶揄して、「メルボルンでは水と泥が上下逆さまに流れる」と言う。一方、メルボルン人はお返しに「シドニーには **a nice little coat hanger** が掛っている」とハーバーブリッジをけなす。オーストラリアを代表する2大都市のライバル意識の表現だったのだろう。

帰路は海岸線のルートを走る長距離バス「パイオニア」に乗ってシドニーへ向け出発する。食事の時間はレストランに停車。夜は走行せず、**Eden** という小さな街で一泊。わびしい安宿で、いやが上にも旅愁を誘う。翌日は海岸沿いを北上する。たまたま経路の **Princes Highway** はホストの家の近くを通っていたので、適当な場所で降ろしてもらい、11日間の旅行は終わった。

なお、この旅行で乗った列車、バス、トラムの料金は、自分のお金で支払ったものの、宿泊や食事、自動車での移動など他の一切を、ホストファミリーとその親戚の方々のご厚意に甘えた。今さらながら、本当にありがたいことであった。

* * * * *

46年後の2008年、メルボルンを再訪する機会に恵まれた。建築関係の国際会議が開かれ、情報収集と研究発表をするため参加したのだ。空き時間を利用して、当時の住所を頼りに、お世話になったリードさんが住んでいた場所を訪ねてみた。「もしや縁のある人が住み継いでいるのでは」というかすかな期待を抱いて。「確かにここだった」という家は見つかったが、住み手は「**Reid** という人は知らない」とのこと。あまりにも長い時間が経過していた。

7. つらい別れと新たな旅立ち

1963年1月6日、11ヶ月の滞在を終えて日本へ発つ日、帰国するために乗る船がシドニー Darling Harbour を出港する日だ。4週間にわたる船旅はオーストラリア留学を締めくくり、人生の新たな扉を開けるにふさわしい新鮮な体験に満ちていた。

帰国準備は半年以上前から進めていた。当初から考えていた「船で帰る」ための選択肢は時期と料金から結果的に限られ、条件に合ったのは、香港の China Navigation Company が運航する Changsha「長沙」という名の貨客船（約7500ト）だった。途中、ブリスベン、タウンズヴィル、マニラ、香港、基隆（台湾）及び釜山に寄港し、神戸・横浜へ向かう航路だ。運賃は168豪ポンド（13.4万円）。親に頼んで実現した選択としては、飛行機よりも安くて幸いだっただ。

最後のホスト夫妻 Wal and Olga Scott と同居する姪の Carol が接岸中の船まで見送りに来てくれた。当初夕方の出航予定だったが、貨物の積み込み作業が遅れ夜にずれ込む見込み。それまでは待ってもらえないので、船が出る前につらい別れの挨拶を済ませた。「もう二度と会えないかもしれない」という思いに涙がとめどなく流れた。

深夜12時頃、たった一人の旅立ちとなった。中国風の銅鑼が鳴りわたり船体が岸壁を離れる。甲板に立ち出港の様子を見守る。周囲に知る人は誰もいない。船はハーバーブリッジの下をゆっくり通過する。橋の巨大な鉄骨が頭上にかかり、街の灯りも過ぎてゆく。再び涙、涙。「必ず戻って来てまた会いたい、そのためには早く一人前になって稼がなければ」という決意を心に抱いた。

船旅は一時的な船酔いを除き快適だった。私のキャビンは1等船室の中で最も料金の安い部屋なので、2段ベッドが2台ある4人用。たまたま同室の船客はなく、独りで気兼ねなく使えた（定員の半分、約40名しか乗っていなかったため）。船の中の位置は最後尾に近く縦揺れ（ピッチング）は上昇と下降として感じられる。窓は小さな丸窓が二箇所あるだけ。荒天の場合は、船員が来て金具で締め付け密閉する。

部屋に洗面台はあるがトイレ、浴室・シャワー（個別ブース）は共用。驚いたことに浴槽に注がれる湯は塩水、つまり海水だった。港内に停泊中は濁って使えない。シャワーだけは真水だが、細く少量しか出ない。いずれも節水の徹底のためだろう。

一等船客は西洋人で占められていた。日本人は私だけで、東洋人も見当たらない。香港から中国人ビジネスマン風の乗客が一人乗ってきたのが例外である。実は船倉に3等船室があって、中国人はそれを使えたらしい。3等船客は甲板に出ることは許され



帰国の旅・航路図（実線）

ないので、顔を合わせることはなかった。

船長以下高級オフィサーはイギリス人らしい西洋人ばかりで、中国人は下級オフィサーや作業担当の船員。かつて西欧列強がアジアを支配していた図式が、船上にはまだ色濃く残っているのを感じた。親しくなった中国人船員の李さんは、「中国人と日本人は目の色も顔立ちも同じ。戦争は駄目、我々は友達だ。」としきりに語った。そして、私は日中戦争について何も知らない自分を恥じた。

食事は中央部にあるダイニングルームで朝昼晩の3食が供される。それ以外に中国人のボーイが、紅茶又はジュースを毎朝キャビンに届けてくれる。朝食と昼食の際はくだけた服装でも構わないが、夕食だけは(男性は)上着とネクタイ着用とのことで、その規則に従った。幸いダイニングルームには冷房が入っており、不都合はない。それどころか、一人の大人として扱われている気分がした。昼食・夕食には、その都度印刷されたメニューが一人ひとりの席に置かれていた。その表紙は日本の木版画が日替わりであしらわれている。メニューの何枚かが今も手許にあり、フランス語まじりのコース料理が毎回出たことが確かめられる。ワイン・ビールなどは一切口にせず(飲みたいとも思わず)、真面目な高校生ぶりだった。コーヒーはラウンジで。

船の中は居心地良く、時間もたっぷりあった。ソファの並んだラウンジはもちろん、書斎のような部屋(writing room だったか)があって自由に使える。重厚な木製のカウンターデスクがあり、手紙を書いたり勉強したりするのに適したお気に入りの場所だった。帰国後に備えて、日本の教科書や練習問題集を開いたのもここだ。

入港する度に上陸し土地の風物を見聞した。その際、船は寝室と食事が提供されるホテルのようなものだ。ブリスベンはまだホームステイの続きという感覚で街を散策したが、マニラと香港では全く異次元の世界へ飛び込んだ思いがした。

マニラでは、布教のために韓国へ赴任するオーストラリア人宣教師家族と一緒に古いタクシーを借り上げて市内観光へ出かけた。名所めぐりの通りすがりにスラム街を初めて目にした。粗末な小屋のような家並みと貧しい人々。シドニーの美しい街並みや豊かな暮らしぶりとは比べ、ここまで極端な差があることにショックを受けた。夜は別な人について「ハイアライ」という球技に賭け事をする怪しげな場所へ行き、たばこの煙に満ち酒を飲みながら遊ぶ大人の世界を垣間見た。

香港でさえ今日とは全く違う顔を見せていた。表通りはビルが並び繁華だが、その背後にある山の斜面には、粗末な材料で作った無秩序な住居群が(その時の感覚で)まるで皮膚のカサブタのように張り付いていた。中国本土の共産党支配を逃れてたどり着いた避難民 refugees の不法占拠地と聞いた。

マニラと香港が私に与えたこれらの強烈な印象は、25年後にインドネシアで居住分野の技術協力に携わる下地になったと思われる。



香港・北角に停泊中の Changsha 船上にて

珍しい見聞や体験を重ねながら船は少しずつ日本へ近づく。台湾での寄港地は台北の外港である基隆（キールン）。港は細長い入り江で、対岸の丘の上には日本家屋らしい建物が数多く見えた。聞くと戦前に日本人が住んでいた家々らしい。ここでも宣教師家族と一緒に車で台北見物に出かけた。ガイドをしてくれた若い男性も上手な日本語をしゃべる。太平洋戦争が終わるまで日本が統治していた場所なのだ。

真夏のオーストラリアを出て赤道を越え、東シナ海を北上するころには、気候はすっかり冬になる。神戸着の予定を航行中の船から電報（無線電信・英文）で家に送った。最低料金にするため、宛先を含め10単語以内に納める。

最後の寄港地は韓国の釜山。船は接岸せず小型船で上陸した。短時間の滞在だったが街並みや路面電車の様子が日本とよく似ており、いよいよ故国に近づいた思いがした。しかし、港に係留されている数多くの日本漁船は、当時の厳しい日韓関係を象徴するものだった。まだ国交は回復されておらず、李承晩ラインという軍事・漁業境界線を越えて操業したとして拿捕（乗組員は抑留）された船なのである。以前ラジオや新聞の報道で知ってはいたが、その現場を眼前にして恨みの気持ちがこみ上げた。

一泊して翌朝には出航。玄界灘を越えればすぐ日本だ。本州の西端らしい陸地が見える。雪をかぶった山々が美しい。とうとう帰ってきた。水先案内人が乗り込んでくる。久々の日本人に懐かしさのあまり話しかけたが、無愛想な男だった（こちらの感激など知る由もない）。関門海峡へ差し掛かると町の様子がよく見える。電車が走っている。警笛も聞こえる。海峡を抜けて周防灘へ入るとそれまでのどんよりした空が一気に晴れて、夕映えが美しい。門司で降りしてくれたら家は近いのだがそうは行かない。船は夜の瀬戸内海を航行して2月3日の朝に神戸港の沖に停泊した。

いよいよ下船。入国と税関の手続きは船の中で済ませ、長旅で仲良くなった乗客・船員に別れを言って、スーツケース3個を携えて屋根のない小船に乗り込む。そしてメリケン波止場へ上陸。そこには母と兄と長姉の3人が出迎えに来てくれていた。母と抱き合って再会を喜ぶ。その時に口から出た言葉がまるで英語の日本語訳のようで、アクセントも変だと言われた。それに母と抱き合うなど、出発前には決してなかったことだ。すっかり日焼けした顔で雰囲気も変わった私に、母も兄姉も驚いていた。

およそ1年間の外国生活、日本語を殆ど話さない暮らし、地球の表面を四半周する船旅を終えて、ふるさと日本に帰った時の文化的ギャップは、一時的なものながら不思議な感覚であり、笑いを誘う対象でもあった。

その後、大阪と福岡の親戚の家に計3泊し、母とともに小林に戻ったのは6日。期待に胸膨らませ出発してから丁度1年、涙のダーリンハーバー出港から1ヶ月が過ぎていた。駅のプラットフォームには父とロータリー会員が大勢出迎えてくれ、故郷に凱旋したような気持ちだった。父とどんな言葉を交わしたのか、もはや記憶にないが、英会話の特訓をしてくれたボッシュマン氏とは英語で話して上達ぶりを披露できた。

こうして私のオーストラリア留学から家に帰る長旅は終わった。しかし、この旅行の記憶は、繰り返し思い出される対象として、また私の人生航路に影響を与える源泉の一つとして生涯残り続ける。

8. 帰国後の進路と生き方への影響

留学中に決心した進路

2月に帰国してすぐ母校に復学した。留学中の成績を評価しそのまま卒業させてもらう可能性もあったが、志望校への進学は覚束なかったので1学年下への編入となった。すぐ3年生となり、それからの1年は受験勉強中心の生活を送ることになる。両親が経営していた小さな会社を譲渡し故郷の福岡へ引き上げたので、私は母の知人宅へお世話になり下宿というよりは新たなホームステイのような形になった。

かつての下級生と一緒にいるという状態にはすぐ慣れた。私は特別な存在と見られていたらしいが、不愉快な思いもせず気持ちよく勉学に集中できた。同期卒業となった同窓生から今も集まりの案内をもらい、一足先に卒業した仲間とも別な場での交流が続く。

大学受験は将来の職業選択にかかわる進路の大まかな決断を意味する。留学中は「将来は何になるつもりか」と仕事の夢を聞かれることがしばしばあった。それに対し私は「土木技術者 *civil engineer* になりたい」と答えることにしていた。渡航準備の際、若戸大橋の工事現場を見て強い感銘を受け、「これぞ男の仕事」と思ったのだ。

しかし、シドニー滞在中にその意識は少しずつ変化していった。その大きな要因がシドニー・ハーバーブリッジにある。巨大ながら美しさも備えた鉄骨橋で、車道8車線と複線の鉄道という構成。若戸大橋は当初2車線だったので、大いに引け目を感じ、誰が橋の車線数を決めるのか、について考えた。その結果、土木工事のためには、前提となる「計画」の果たす役割が重要だと気づいた。もう一つ、シドニーの街並み、特に美しい住宅地の風景を見て、一つ一つの建築も大切だが環境を含めた全体としての計画性が大事なことを感じた。

そこに日本から一つの情報がもたらされた。2年後の1964年に都市計画専門の「都市工学科」が東大工学部に新設されるというのである。都市工学を選べば建築も土木も、もちろん都市全体のことも一式学べる。そのような状況から志望進路は決まった。

都市工学から住宅地計画、住宅設計へ

1年後、幸いにも志望の大学入試に合格し、晴れて東大生となった。教養学部の図学・製図の授業で、教授からクラス全員に高校での製図の経験を問われたことがあり、私が唯一の経験者だったことを誇らしく思った。優秀な学生が多く他の科目では自信喪失しそうな場面もあったが、英語と製図には自信があった。オーストラリア留学の賜物である。また、その他の外国語としてドイツ語とフランス語を選択した。英語をベースに西欧文化への窓を複数に広げようとしたようだ。

希望通り都市工学科の都市計画コースに進学した。交通工学も面白かったが、より建築的な要素が強く都市の美観に関わるアーバンデザインへの関心を強めた。就職先は当時の日本住宅公団。住宅への関心というよりは、「都市をデザインする」可能性を期待したためである。採用試験の面接では、浪人していないのに卒業予定が1年遅れている理由を問われた。高校時代にロータリーの交換留学生としてオーストラリアで1年過ごしたことを答えると、以後のやりとりはその話題だけで終わってしまった。

公団で最初に取り組んだ仕事は「団地設計」、つまり住宅団地の全体配置設計である。大きいプロジェクトだと 20 ヘクタールもの土地に、標準化された 5 階建ての集合住宅をはじめ道路、学校、公園、商業施設などを合理的に配置する作業だ。

入社 3 年目、美しく快適な都市空間のデザイン原理を学ぶ、という名目でフランスへ留学する計画を実行した。入社当初から語学などの準備を重ねていたのだが、その年のフランス政府の給費留学生試験に合格し、実現の道が開けた。翌年から約 2 年間ドイツ国境に位置するストラスブールという街で 2 度目の留学生活を送ることになる。今度は大陸ヨーロッパの文化に直接触れる機会でもあった。

帰国後は住宅建築の企画や設計に関する業務が多く、この分野への関心も深まった。自らの一級建築士資格で設計し工事発注した住宅は数千戸に及ぶ。しかし、日本の住宅不足が解消され居住水準も大いに改善されたところで、別な形で社会貢献できないか、第三世界での国際協力に挑戦してみたい、という気持ちが強まった。40 代半ば、志願してインドネシアで居住分野における技術協力に携わることになった。

海外での技術協力、環境問題への目覚め

3 度目の海外生活は、これまでと違って学ぶことから教えることに目的が変わった。立場は国際協力事業団 JICA の長期派遣専門家。勤務先はインドネシア共和国公共事業省人間居住総局住宅局という役所である。勤務地は首都ジャカルタで、期間は約 2 年半。居住状態の改善や住宅を中心とする再開発、中高層住宅建設における技術的ノウハウの移転が目的だが、本質的にはこの分野における担当者の技術力を高めることであった。

ここでもコミュニケーションのツール「言語」は重要な要素で、多くの派遣専門家は英語の特訓に事前研修の多くを費やしたが、私は現地の公用語インドネシア語習得に専念できた。交換留学中に獲得した英語の実力があればこそ出来たことだ。お蔭で赴任する時にはインドネシア語での日常会話程度は出来るようになっていた。

この分野に飛び込んだ遠因が、オーストラリアからの帰路、マニラと香港のスラム街を見て衝撃を受けた体験にあることに疑いの余地はない。他方、地理的に日本とオーストラリアの間に位置する発展途上国にいたことから、日豪関係がますます発展し交流が深まる様子を、まるで両国間に渡された立派な橋の下にいて、うらやましく見上げているようなイメージを抱いたことがある。

教える立場で赴任したが、教えられ目覚めた一つエピソードを書き残したい。昔の事情はさて置き、日本で建物を取り壊す際は殆どの素材を廃棄物として扱い、部材を再利用するのは稀である。私が現地で見えて感心したのは、丁寧に取り壊された建物からまだ使える部材を取り出し、種類ごとに分類・再整備して安価で販売する「古材市場」の存在だ。使えるものを捨てずに再利用することで資源の有効利用と廃棄物の削減になる。私の環境問題への目覚めはジャカルタの古材市場にあった、といって過言ではない。

資源・廃棄物から環境問題へ目が向き、エネルギーと地球温暖化問題に強い危機感

を持つことになった。帰国して8年目、第3の職場、大阪ガス（株）エネルギー・文化研究所で、住まいと自然環境との共存・調和に関する研究・発信活動へ入ることになる。

かつてオーストラリアで知った豊かなライフスタイルは、エネルギーと資源の多消費と一体のもので、決して理想の形ではないことも改めて認識された。拡散した都市の形、自動車を主体とする移動手手段、広い家、肉中心の食生活、給湯・調理・暖房など全てのエネルギー用途を電気でまかなう形など、当時体験した都市と住まいと暮らし方は、言わば持続可能性とは逆の実例として役立っているのかもしれない。

私に残った財産

すでに常勤から退き自分の職業人生を振り返ってみると、1年間のオーストラリア留学が私に残した財産の大きさを痛感する。進路の選択、適性の発見、英語能力、社会性の獲得などである。言葉の要素は英語にとどまらず、手紙を書くことを通じて日本語の力も向上し、英語を基礎に他のヨーロッパ言語を習得することにつながった。

職業活動だけではなく、生き方そのものへの基本的な姿勢にも影響はあった。「人生を enjoy する」という概念は明らかにオーストラリア人の生き方から学んだ。

他の海外生活の経験も加えた「国際的視点」はもう一つの財産だ。つまり、外から自国を見る、多様な世界を認める等の力に加えより広い視野でものを見る習慣を得た。総じて人生観の重要な要素となった。

そして、何よりも一生忘れ得ない美しい思い出が残った。その後、長く続いた交友関係や時間をおいて復活したご縁も貴重な宝だ。

社会への還元、感謝の気持

私がオーストラリア留学を通じて個人的に受けた恩は、必ずしも与えてくれた方々へ直接返せた訳ではない。その代り、職業活動ないし社会活動を通じて、よりよい社会づくりを心掛けることが本当の恩返し、と考える。

その代表的な概念が、「持続可能な社会づくり」への貢献と信じている。私の最後の仕事は、住宅・生活における「自然」との調和の追求であり、日常の暮らしを楽しみつつも未来世代が困らないよう「環境」を良い形で残すことである。自らの実践や研究成果を何らかの手段で発信することは、終生続けたいと思う。

留学当時に得た様々な経験とその後の自分の生き方を振り返ると、50年前のロータリー青少年交換が私に与えた影響の大きさが改めて実感される。

このプログラムの存在、ロータリー関係者の尽力、ホストファミリーの親切、教師や両親・兄弟の支援などに、感謝してもしきれない程の大きな恩義を感じている。

第2章

オーストラリアの旧知 および RI青少年交換役員からの寄稿

Contributions from old Australian friends and Youth Exchange officers



Our cross-nation friendship since Rotary Exchange 1962

Wyverne Smith (née Jarratt)

I have Japanese friends whom I love very much. I visit Japan quite often and although there are times when I don't quite know what to do, I feel at home in the Japanese culture. I even have a beginner's knowledge of the Japanese language (on a par with a five-year old, I am told). For these gifts I am grateful to the Rotary Exchange Programme, and in particular the 1962 exchange with Japanese students.

In 1962, I was the seventeen-year-old daughter of an Australian Rotarian (Lew Jarratt). I had very little knowledge or understanding of the Japanese people. Probably, foremost in my mind was the Second World War. My father had fought in the war and John, the cousin of my mother (Margaret Jarratt), died in Borneo, sadly after the end of the war, when Japanese soldiers in the jungle did not know the war had finished. Every Anzac Day, I would march in the parade and put flowers on the war memorial. My parents bore no grudges against the Japanese people, and my father was prominent in the Rotary endeavour to work for world peace through this exchange programme for the youth of both countries. My family waited eagerly for our student to arrive. Toshiko Kojima was to stay with our family first, so we met her at Sydney Airport.

It was all such a novelty for us. Toshiko spoke limited English and found many of our customs strange. We spoke no Japanese at all. Of course, she was extremely polite and anxious to please us and we were keen to make her welcome. I remember demonstrating how to have a bath in a western style. Toshiko and I shared a bedroom and gradually we became close friends. What I feel guilty about now is my ignorance at the time. We were keen to show her Aussie ways and to teach her how to speak English our way. I don't remember giving much thought to learning about Japan. I think I learnt how to say "hello" in Japanese, but that was all. I learnt two other foreign languages at school, so I am amazed that I didn't try to learn Japanese as well. In the year 2000, I went to Japan for the first time and found it all so different that I felt as though I was in another world. I wondered why I hadn't asked more questions of Toshiko, when I had the chance in 1962.

Toshiko did her best to share Japanese culture with us. She told us about her family and her country and she had brought photos and gifts. One day, she cooked us a Japanese meal, but I remember that we didn't really like the food. At that time, Australians ate English food – the post-war migrants had not had much effect on our diet yet. I know now that it would have been extremely difficult for Toshiko to make a Japanese meal – in those days it

would have been impossible to buy the ingredients and we had no Japanese utensils. Of course, we could not use chopsticks. I think in 1962, the learning was mostly one way. We expected Toshiko to do all the learning and for that I feel ashamed. It was not until much later when going to Japan for the first time, that I was the one in a strange culture and doing all the learning. Toshiko taught me how to have a bath Japanese style and how to behave correctly at an onsen (hot spring). Toshiko is still teaching me Japanese manners and is guiding my learning of the Japanese language (日本語) .

However, in spite of my lack of such learning in 1962, what I see as the most important aspect of the student exchange has happened. The most amazing friendships have been formed. What we found was that our nationality and race made no difference. Under the surface differences, we were the same. Toshiko and I are truly sisters. We understand and accept each other. When in Japan, I feel utterly accepted, loved and safe. As an adult I am excited to learn Japanese history and culture. We bow together at the temples. We cried together at the Nagasaki War Museum and Memorial. We have a mutual understanding of the history of our countries. I enjoy my times in the remote mountain village, Nakatsue, where Toshiko lives with her husband, Kiyoshi. We also had two opportunities to include our husbands in holidays together – once in Japan and once in Australia.

In 1962, We had some contact with the other students who lived in Sydney (a 2-hour drive away). My family took Toshiko to Sydney several times. My best memory is that of Keisuke Hama's eighteenth birthday party. All of the Japanese students were there, but Keisuke and I particularly enjoyed each other's company, and today we have a strong friendship. I should include a little story here.

I had no contact with Keisuke from the time he left Australia until 1997, when my daughter Alison toured Japan with the Queensland Youth Orchestra. He attended the Fukuoka concert with Toshiko. Keisuke met Alison and gave her a letter to give to me, and so we renewed our friendship. I have visited him and his family in Nara a number of times. Keisuke has been a wonderful tour guide to me, and also to my husband and another Australian friend. Keisuke is a great friend - we also share a deep concern for the global environment.

As far as Japanese-Australian relationships are concerned, I think the purpose of the Rotary International Youth Exchange Programme to promote peace has been achieved. I cannot think of any better way to keep countries at peace than through the promotion of life-long, individual cross-nation friendships amongst people. Toshiko and I are grateful for our friendship and as we grow older, through the medium of email, we remind each other of our blessings.

Kazuyo at Bossley Park with the Pollard Family

David Pollard

As background to a few recollections of Kazuyo's stay with our family during her visit to Australia way back in 1962, I would first like to set the scene regarding the various members of our family and the place in which we lived during that time.



My mother Phyllis, or Phyl as she was usually known, was of pioneering New Zealand country stock, her great grandfather having arrived there from England with his family around 1840. She was raised on a sheep and dairy farm on the north island of New Zealand, and after training and working as a nurse had travelled to England in the 1930s, where she again worked as a nurse and later at hotels in London and elsewhere in the UK, before returning to Australia where she met and married my father.

My father John, or Jack as he was usually known, was born in Melbourne, where his parents' families had settled from England and Ireland in the 1830s. He left school relatively early and became a businessman, and during the 1940s was the managing director of an import and export company in Sydney. He travelled extensively around various parts of the world on business from around the mid 1940s, until the family settled down at Bossley Park in Sydney's semi-rural outer fringe in the early 1950s.

In 1962 my two younger sisters, Jann and Toni, were at that time respectively a nurse (- following in my mother's footsteps) and a student studying for an Arts degree at the University of Sydney. And I was in my final Honours year of a Science degree at the same university, studying biology.

Having lived throughout the 1940s in the south-eastern suburbs of Sydney, by the early 1950s our parents had decided to get us all a bit closer to nature and a healthier semi-rural lifestyle, so they bought a produce and general/grocery store at Bossley Park in Sydney's outer western "Green Belt" area in 1953. It was in the capacity of manager of this business that my father became a member of the local branch of Rotary International.

Out here in Sydney's "Green Belt", the minimum size of a block of land was usually two hectares, and most of our customers and neighbours were small-scale chicken farmers or market gardeners – mostly post-war migrants from Italy and other parts of southern and central Europe. Although our block was only one hectare in extent, at one time or another during the 1950s we kept chickens, ducks, a few turkeys, several sheep, a goat, a cow, dogs and cats, and a couple of horses. While we were still at school, us kids had the daily job of feeding and watering all of these farm animals, collecting the eggs, and milking the cow and the goat. The horses were mainly ridden by our Dad (who had been an army reserve cavalry officer between the wars in the then equivalent of the "Light Horse" regiment in Victoria) and also our Mum (who, as a farm girl, had ridden her own horse to and from school); and the sheep were shorn once a year by a visiting itinerant shearer. The eggs and milk we produced were mainly used by the family, but also sometimes traded for vegetables and fruit from some of our market gardening neighbours. Some of the milk was churned into butter by our Mum; and it was my job to chop the heads off and clean the no-longer laying chickens and ducks for food, and also the annual Christmas turkey. These headless birds were then plunged into boiling water in our Mum's wood-fired laundry copper to soften the feathers before being plucked, and their down was saved for stuffing pillows. So, we weren't exactly full-time farmers, but we did learn quite a lot about the realities of rural life out there on Sydney's semi-rural fringe.

By the early 1960s, however, the three of us kids were either working (in the case of Jann), or studying (in the case of Toni and myself), and our parents were fully occupied with running the business at our "Bossley Park Stores". The half hectare back paddock of our block was by this time leased to an Italian market gardener neighbour as a farm field to grow tomatoes and beans.

As a schoolgirl, Jann had already spent some time overseas with our New Zealand relatives, and Toni was in the United States at the time Kazuyo stayed with us, on an AFS student exchange scholarship, staying with a family in Omaha, Nebraska, from mid 1962 to mid 1963. So our parents decided to invite an exchange student from Japan to stay with the family for three months on a Rotary scholarship in 1962. It was thus that, when Kazuyo came to visit Australia that year, she stayed with us at our home in Bossley Park.

No doubt Kazuyo will describe her own experiences and adventures during her time here in Australia, including her stay with us at Bossley Park, in more detail in her own account in this volume. However, as far as we could ascertain at the time, she greatly enjoyed her first stay here in this country together with our family, and we have kept in regular contact ever since. I would imagine that the semi-rural family lifestyle there at Bossley Park, and

no doubt also the food, was probably quite different from what she had been used to back in Japan, and although she was learning English at high school back home, the rather broad Australian accent of many of the people here at that time may have been a problem for her. But nonetheless we all got on very well, and after a while I don't think that conversation was at all a problem to her. She attended the local high school in the nearby suburb of Fairfield, where the three of us had been students, and her main interactions at our home during the week were mostly with our parents, but also with Jann and myself on the weekends (-I had a small flat in the city near the university where I mainly stayed during the week, and Jann spent most of her week in the nurses' quarters at the hospital where she worked). By the time Toni returned from the USA, Kazuyo was then staying with another family nearby, but we still caught up with her for various social and family occasions and outings.

My two sisters remember several occasions when Kazuyo demonstrated various Japanese cultural arts and skills to them, such as how to dress up in the traditional formal Japanese women's kimono and obi, and how to make paper origami birds, etc. She already showed herself to be very artistic while here in Australia, and later perfected the art of watercolour painting back in Japan, which she still continues. I too remember attending various social events, including some associated with Rotary, together with her and other members of the family, and also once taking her to a formal ball - I think it was at the Trocadero ballroom in the city, from which she still has a very nice photo of the two of us smiling there together.

Kazuyo has kept up her English language and has since gone on to become involved with various international friendship organisations, in relation to which she has travelled widely throughout the world, including several trips back to Australia. On one of her trips back here she came with her sister and three of their children, and they all stayed with us at our home here in Balmain, an inner western suburb of Sydney. On another trip she visited with her husband Kenji, and on her most recent trip she had an exhibition of her Bokusaiga* paintings at a prominent art gallery in the city of Sydney. (*墨彩画、編者注)

And of course we hope that we will see her back here for further exhibitions of her art works in the future (-her Christmas cards to us each year are always of one of her beautiful watercolour paintings, usually of something from nature). And maybe one day I will also get the opportunity to visit her over there in Japan at her home in Fukuoka.

David Pollard

Sydney, Australia

The First International Exchange Student to Hurstville Boys' High School

Dear Readers,

It was on an occasional day in February 1962, when a Sydney school, Hurstville Boys' High School, had its first visit from Keisuke Hama. He was one of the first students in the Rotary Youth Exchange Scheme between Japan and Australia. His stay lasted just 10 months but left an indelible impact to this day.

Being one of the few schools chosen to host a Japanese Rotary exchange student, Hurstville Boys' High School's status in the community increased, but more importantly, prompted the school to change its attitude, from an insular one to that of a school with a broader international outlook. This also led the school to become a centre for teaching foreign languages.

The arrival of a foreign student to a Sydney school 50 years ago, was of great importance in overcoming prejudice, bias and racial vilification and discrimination, that lingered on from previous historical events.

Unfortunately Kei had to endure some anti-Japanese sentiment in the early days. This must have been a daunting and frightening experience for a young man in a strange new country. Fortunately Kei's character and personality soon overcame these attitudes.

Similarly, Kei made several visits to other Sydney schools, mostly Fort Street High, where the Japanese language was taught. This further enhanced Kei's acceptance, and that of Japan and its culture.

Please forgive my fading memory, but at 99 years old I still remember several items of importance to me and Kei. On some mornings, in order to protect him from insensitive derogatory anti-Japanese comments, from some of the students, I remember walking with Kei from the train station to school. Although only a small thing, it was worthwhile in my view, in that it formed the foundation of an enduring friendship.

Another memory of mine is that of his extraordinary skill in technical drawing. His work was so brilliant that his teachers were awe struck as they surveyed his work.

I also remember the Friday afternoon sessions. I encouraged 4th and 5th year students (students in the last two years of high school) to stay behind on Friday afternoon for additional English tuition. I provided all the resources at my own expense, but these classes not only increased the general tone of the school, but increased the students' diligence, and work ethic. Kei was a regular participant.

But perhaps my most important memory is the enduring friendship that has transcended the passing years. I remember following his remarkable career, our regular correspondence, and of course his visits to my home. I remember a special person, who I am privileged to know.

And all this would not have been possible without the Rotary Youth Exchange Programme.

Roy B Reidy

OAM BEM BA Dip Ed MACE

Rotary Youth Exchange - from Japan in 1962 and what I think of the program today

From - **Bede Goodman**

As a teacher in his 5th year of teaching in 1962, I was told that I would be having a Japanese student in my English Class. The Principal of Hurstville Boys High was Mr. Ross Thomas, and the English Master was Mr. Roy Reidy. Mr Reidy had decided that I would be the teacher within his department to teach this new student. As well as being his English teacher, I was also what was known as the ROLL TEACHER for the Class 4B. The Roll Teacher was responsible for checking the class roll:- for attendance, leave, and notes explaining any absences or sickness.

What would this Japanese student be like? I had no previous contact with any Japanese, and had no idea how well I would be able to communicate with **Keisuke HAMA**.

Keisuke proved to be a hard working, interested - and interesting - member of the class. I can not recall any major difficulties in communication and his enthusiastic participation in most school activities , including sports, made him an asset to the School.

His presence in the class posed no problems, as I recall - and this must be so, as contact has been maintained over the years between Keisuke and members of the School Staff of the time, and several of his classmates. Keisuke's memories of his time at Hurstville Boys' High must be pleasant, for, on one of his visits to Australia he arranged to visit the School and bring his daughter Megumi to see the Australian High School where he had attended for a year. It was with great pleasure that the School welcomed Keisuke and Megumi in 1989. This visit was a great personal pleasure to me, as I had returned to HBHS as Principal in 1988, after several years teaching in other schools within New South Wales.

In Australia at the time (1962) there was still a residual dislike of Japan and Japanese among certain people- (including some of the School Staff)- but I do not recall such feelings influencing their attitude towards Keisuke, nor such feelings being evident in the pupils of Hurstville Boys' High .

In 1962 I had no real knowledge of Rotary - I knew such an organization existed, but not its aims and objectives. The School Head Master (Principal) Mr. Ross Thomas was a member of the Rotary Club of Hurstville, and the presence of a Rotary Exchange Student in my class was my first contact with Rotary.

Since becoming a Rotarian myself in 1976, I can say that the 1962 Japanese Youth Exchange Program was a marvellous example, 16 years after the end of the War in the Pacific, of Rotary at work - in keeping with Rotary's 4 Way Test, the program was in TRUTH aimed at, and I think achieved, a step towards Peace between our two nations.

The Exchange DID "build goodwill and better friendships": evidenced above through the mutual contacts between Keisuke and members of the School, Hurstville Rotary, AND his Host families.

WAS "beneficial to all concerned" - the Australian students learnt of Japan and its culture from Keisuke; as he learnt from contact with the Australian School system, and people

And WAS "Fair to all concerned"

As a teacher, and now a Rotarian, it is very inspiring to know that Keisuke has achieved so highly in his profession.

Since 1976, my experience of Rotary Exchange Students has increased - and I now feel that the earlier years - say the 1960s and 1970s, - were the years when the Program met its objectives, of encouraging greater understanding and friendship between the Youth of various countries. The most receptive and all round beneficial Exchanges have been, in my experience, from Japan. The Exchanges with which I have been associated, notably from the Americas, have been no more than "sponsored holidays" for the participants. The students have already had experience of overseas countries, because of the increasing ease of travel, and their families' ability to provide such experiences. Several have provided CVs that do not stand up to scrutiny as to accuracy of the candidates' interests, activities and community involvements. Further, they have not a true understanding of THEIR RESPONSIBILITIES to the Exchange program and to their Host Parents.

The success of the Exchange Program relies on a THOROUGH BRIEFING of participants BEFORE they embark on their exchange - a briefing in ALL aspects of the program:- and on the supervision provided by the Host Club's Counsellor. All in all, my opinion - at variance with many other Rotarians, - is that the Youth Exchange Program, today, is accessing the wrong students, and has probably outlived its worth.

It is my privilege to have had Keisuke Hama as a student in my 1962 English Class at Hurstville Boys' High. Congratulations to Keisuke on his achievements in the subsequent years.

Bede Goodman.

19th June, 2012.

Congratulations on the Memorial Book

from John Moon, Rotary Club of Hunters Hill

Dear Masako and her friends,

Congratulations on your efforts at recording the first stage of our Rotary Youth Exchange Programme between Australia and Japan.

Looking back to the 1960's our Records show just how popular the Exchange Programme had proved to be and we find the on-going result over the years has been the forging of lifetime Friendships.

In 1966 I was the District Chairman and had the pleasure of welcoming Japanese students.

In 1968 - 69, as District Governor the programme was enlarged, the World President of Rotary International was Kiyoshi Togasaki.

In the 1970 -71 Rotary year, my wife and I were involved in the hosting programme and this alone has led us, together with our own family members, to have a constant contact with those who came here some 50 years ago.

We in turn have visited Japan and enjoyed your remarkable hospitality. Our dear "Rotary daughter" has been Masako Harada nee Tachibana. Her late father Kazuo Tachibana had joined Rotary before his daughter's visit to Australia. He was the president of Yanagawa Rotary Club when she was hosted by our Club of Hunters Hill as one of the first Rotary Exchange Students.

In all my years I am sure there is no other programme which has drawn together so many people, from divergent backgrounds so successfully.

June and I send our warmest good wishes and the hope for a successful Memorial Book.

JOHN MOON, A.M., Past District Governor
Sydney, Australia

Acknowledging Fifty Years of Rotary Youth Exchange

Stuart McDonald

Rotary youth exchange promotes world peace and cultural understanding. In 1961, an Australian Rotarian Don Farquhar expressed very similar words as he addressed the 1961 Convention of Rotary International held in Tokyo. His topic was Building Bridges of Friendship to Japan.

This is just part of Don's amazing story and that of another special person in his life, Yoko Miyazaki.

Don was a person of both immense courage and foresight. In 1942, during World War II, Don was blinded in action against the Japanese. However he maintained a desire and a mission in life to promote peace and goodwill and not the opposite.

In his address to the conference in Tokyo he spoke of the need for reconciliation, of a need to build both friendships and cultural understanding with Japan and the world. He saw that the best means of meeting these goals would be to embrace Rotary's relatively new concept of student exchange. The challenge was to initiate an exchange of students with Japan.

Subsequently, a Japanese district governor, Kanejiro Matsumoto, proposed Don that he would arrange that first exchange. After some initial apprehension and planning, an exchange was arranged. This was between the Rotary club of Rosebud, Australia and the Rotary club of Kurume, Japan.

In January 1962 Yoko arrived in Melbourne, Australia and, with her, the first bridge of friendship with Japan through the world of Rotary youth exchange was opened. Her arrival was considered historically so significant it is permanently recorded with photographs in the National Archives of Australia.

Within a few weeks another group of Japanese students arrived in Sydney, Australia and in the following year an Australian student, Kenneth Angel, went to Kumamoto, Japan. The exchange program had commenced.

Yoko was very popular. She had a very good year of exchange and visited and spoke to

many Rotary clubs, community groups and individuals. No doubt the many questions asked would not have all been easy, especially for a very young Japanese girl.

After her year in Australia, Yoko returned home and completed her high school and college. She then gained a job as a flight stewardess with Qantas so as to further her new interest of being an ambassador of goodwill. It was not until more than forty years later that she was reconnected with Rotary after having lived for many years in Egypt.

In the latter half of 2006, a challenge was made to contact Yoko. It soon became obvious that nobody had had any contact with her since well before 1981, when she went to live in Egypt. After some enquires an amazing thing happened. Because she was still in contact with a school friend, the sister of a Rotarian from Kurume, she was located living in Tokyo.

The following few months make you appreciate the depth of Rotary youth exchange. When Yoko was contacted, she was in disbelief that someone from Rotary should be in contact with her after so many years. She was able to list her four host families by name, provide their addresses, as they were in 1962. Then with some searching, her only remaining family in Australia was located living in north Queensland. Thanks to an email address, she was contacted and within two days, Sally, one of her host sisters was able to reunite with her in Tokyo airport, for the first time in over forty years. Since then there has been a full-scale family reunion.

This is just one great story of youth exchange. Fifty years later thousands and thousands of memories and friendships have been formed between people and cultures of every corner of the world with Japan. The challenge for us all is to renew those memories and rekindle those friendships.

Rotary Youth Exchange continuing to promote peace and cultural understanding to The World.

Stuart McDonald
Program Development Officer
Rotary Youth Exchange Australia

素晴らしいR I 青少年交換プログラム

神田 憲

Ken Kanda

1972年のR I (国際ロータリー)規定審議会に於いて決議されたこの国際青少年交換プログラムは、数ある国際奉仕活動の内でも最も価値ある奉仕活動の一つであります。

派遣交換先地区のロータリアンの家庭でホストされ、その家族の一員として過ごし、現地の学校に通学してありのままの生活体験をし、その国の風俗・習慣を見聞しながら、国際理解と国際親善を推進するものであります。

1962年（昭和37年）に当時高校生であった皆さんがオーストラリアに旅立たれました。この皆さんこそ日本のロータリー青少年交換プログラムでの派遣第一期生です。東京オリンピック2年前、当時はまだ海外渡航の自由化解禁（1964年4月1日）の前であり、また海外の情報が余り入らなかった時代でした。

私と同年代の第一期生の皆さん、我々の将来を担う若人に、ご自身の貴重な経験・留学の素晴らしさを Rotex（ロータリー青少年交換プログラムでの留学経験者）として日本各地のロータリークラブで語りつないで頂きたいと思えます。

私自身1985年からクラブ、1990年に地区、2000年にR Iと、今日に至るまで国際ロータリー青少年交換プログラムに携わってきました。今後も一人でも多くの生徒を、この素晴らしい交換事業で派遣・受入ができるよう、日本34地区の青少年交換委員会の委員皆さん、世界のYEOsの皆さんと共に進めていきたいと思えます。

RIJYEC 理事

元 RI 青少年交換委員

元 RI 青少年奉仕支援グループ・ゾーンコーディネーター

(2760 地区 名古屋大須 RC、元会長)

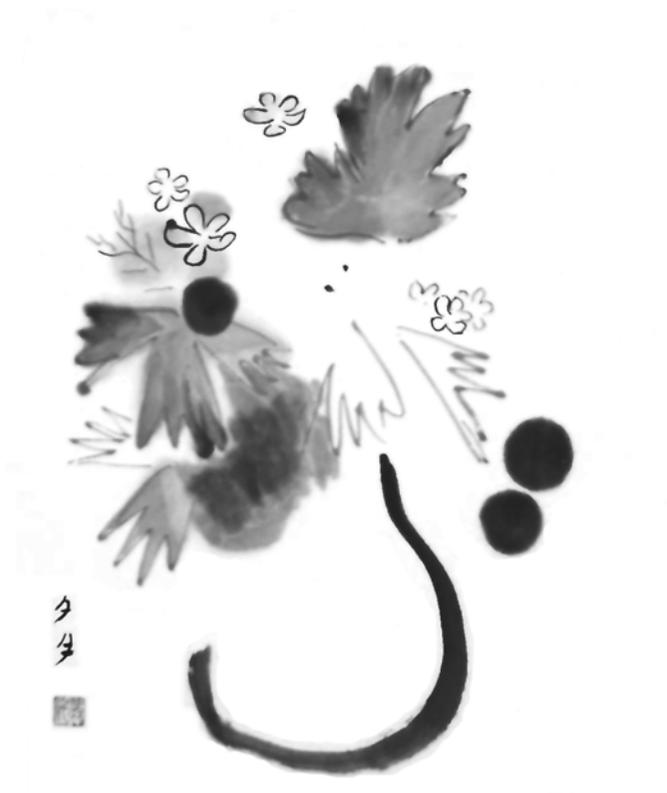
編者注：YEOs：Youth Exchange Officers

第3章

座談会

素晴らしかったあの1年とその後を振り返る

Discussions recalling that wonderful year and our lives since then



座談会 素晴らしかったあの1年とその後を振り返る

開催時期：2012年5月26日14:30～17:30

開催場所：福岡県柳川市「御花」にて

参加者：竹下 由美、辻[中村] 数代、濱 恵介、原田[立花] 万紗子、
福生[松浦] 尚子、吉田[小島] 敏子（五十音順、[]内は旧姓）

今日はロータリー青少年交換第1期生9名のうち6名が集まりました。50年ぶりの再会もあるようですが、皆さんお元気そうで何よりです。

ここは旧柳川藩主立花家の別邸を引き継ぐ「御花」、原田さんのご実家でもあります。社長の立花寛茂氏（柳川RC、第2700地区青少年交換委員会カウンセラー）には何かと便宜を図っていただき有難く存じます。ゆかりのあるこの場所でオーストラリア留学50周年記念の座談会を開くことができるのは、実に喜ばしいことです。それより50年もの間、我々が何らかの形で連絡を保てたことが奇跡に近いのかも知れません。

テーマは仮に「素晴らしかったあの1年とその後を振り返る」とします。長い人生を送ったあとに留学体験とその影響を語り合うのは、意義のあることだと思います。半世紀も前のことを思い出すのは大変ですが、歳をとっても若い頃のことは忘れないと言います。他の人の話を聞くと忘れていた記憶が蘇るかもしれません。懐かしい話に花が咲き、話題がどんどん拡散しそうです。それを防ぐために、できるだけテーマに沿った発言をしてくださるよう、よろしくお願いします。（濱/進行役を兼ねる）

応募の動機

—— 最初に、皆さんがどんな動機でロータリー青少年交換に応募したのか、伺います。

吉田：私はアメリカへ留学したい気持ちがありました。でもそのレベルにないことも認識していました。そのことを英語の先生に伝えていたので、ロータリーから留学生募集の話しが学校に来たとき、私に声をかけてくださったのでしょう。

福生：新聞で留学生募集の記事を見た友達が私に知らせてくれたのがきっかけです。通っていた高校がオーストラリア系のカトリックということもあり、オーストラリアという国には興味がありました。これは良いチャンスかも、と思って家族に相談したら、「応募してみたら」という話になったんです。

吉田：応募したときは「どうせ試験で振り落とされるだろう」程度の考えで、実現するとは思ってなかったですね。

辻：私は「留学」という具体的な希望は持っていなかったんですけど、両親は戦前外地（台湾）暮らしだったし、父は戦後処理に関係する技術協力の仕事で外国へ出かけることもあり、留学生が家にも良く来ていました。母はミッション系の学校出で英語もできた。家には外国人も出入りしていたので、外国に行くことにあまり抵抗がなく「行ってみたいな」という程度だったと思います。

竹下：私の高校はミッションスクールで、シスターはイタリア系の方が殆どだったから、外国への馴染みや関心はありました。英語を話せることへの憧れが最も強い動機だったと思います。当時、英語をしゃべる国と言えばアメリカ、という観念しかなかったので、万紗子さんから「オーストラリアに行かんね」と聞かれても、イメージ



が全くなく何語をしゃべるのかさえ知らないほど。あの頃、海外の生きた映像を見るのはテレビの「兼高かおる世界の旅」くらいで、よく見ていました。この番組は1959年に始まって、スポンサーのパナム航空が飛んでいたアメリカ・ヨーロッパが主な対象だから、まだオーストラリアは取材してなかったんじゃないかしら。とにかく、甘い認識で応募し留学してしまい、行ってから赤面するようなことが沢山ありました。

—— 同じ柳川出身の原田さんの場合は、お父様（立花和雄氏）がロータリークラブの会長をされていた影響ですか。

原田：ええ、父は松本兼二郎さんが東京の世界大会でファーカーさんの話に感激したことを聞いていました。クラブに留学生募集の話が来たとき、父はまわりを見わたし、私に「行って見ないか」と言ってくれたのです。でも、それより現実的な動機がありました。高校3年生の2学期も半ば過ぎて、大学受験が目の前に迫っているのに志望校が決まらず、入試に落ちたら恥ずかしいし、どうしようかと思っていた時にこの話が来たのです。私の家族には国際的な気分があったので、東京へ行くのも外国へ行くのも似たようなもんだし、留学すれば問題を1年先送りできて英語力も付くだろうと思ったわけ。つまり受験からエスケープするため決めたと言えます。自信もなかった代わり、何も知らず不安もなかったですね。

濱：実は僕にも現実逃避と言うべき理由がありました。2年生の秋の選挙で不本意ながら生徒会長になってしまい、海外留学の話が来たのは文化祭をやった後でしたが、総会や運動会などいろいろな生徒会行事の負担が待ち受けていました。手記にも書いた通り「外国への憧れ」が動機の第一に違いはないけれど、「留学すれば生徒会長から逃れられる」という下心もあった。結果的に正当な理由でその重苦しさから解放されたんです。後を託した当時の副会長（宮崎大学名誉教授、声楽家）には、今でも「生徒会長を押し付けられた」ことを言われます。

—— 皆さんそれぞれの思いや都合があったようですね。青少年交換の本来目的にかなう「平和・親善に尽くしたかった」などという殊勝な動機ではなかったのは、ごく自然なことと思われませう。

日豪関係の認識・覚悟

——— ところで、応募や渡航に際し、オーストラリアが第二次世界大戦で日本と交戦した相手、つまり「旧敵国」であることの認識はありましたか。

福生：そんな知識なかったわ。オーストラリアの修道院を母体とした学校でしたが、両国間の戦争についての説明はなかったと思います。向こうで記念館を見学し、映画を見て初めて「そうだったんだ」と認識した有様でした。

竹下：私も旧敵国の認識はなかったですね。戦時中の話は親からいろいろ聞いていましたが敵はアメリカでした。ホームステイ先のテレビでオーストラリア軍が日本軍と戦う様子を見てショックでした。勿論オーストラリアが勝つところしか出さないし、日本は憎い悪者でしかない。

濱：僕も、キャンベラの戦争記念館の前庭に展示された日本海軍の特殊潜航艇を見るまで、実感がなかったと思う。我々が何も知らなかったことの反省は、これから行く若者にきちんと伝えなければならないことですね。

原田：何も知らなかったわ。学校の先生の中にお年を召した方で、なぜか私に冷たく当たる人がいらした。たまたま校長先生がホストクラブのロータリアンであったことから他の先生はとても親切だったのと比べるとちょっと違和感がありましたね。ご家族が戦争の犠牲になったのかもしれませんが。でも、後にはその先生が私に「ジュリアス・シーザー」を個人的に熱心に指導して頂き、とても有難く思いました。

新年をお祝いするパーティに連れて行ってもらった時、恒例なのか、映画上映があり、それが日豪の戦争の場面だったために、場内が明るくなって私自身が何とも居心地の悪い顔をしていたので、連れて行ってくれたロータリアンがとても気にして、「気にしないでいいんだよ」と、言ってくれたのですが、知らなかったとはいえ、オーストラリアの年配の方たちには日本はやはり敵国だったのだな、と初めて知った感じでしたね。同時に「これからの青少年には罪がない」と思ってくれるロータリアンの心の広さに守られていた気がします。

吉田：オーストラリアと戦争したことについては、詳しく知らなかっただけに悲しかったですね。日本が戦争をしかけた歴史があるわけで、絶対戦争をしてはいけないと思ったものです。歴史の授業は明治時代あたりで3学期が終わってしまい、現代史はみんな疎かったのではないかしら。

原田：本当にみんな何も知らず、行ったのね。その方が逆にプレッシャーを感じずに良かったかもしれないけれど。

——— 最近は途中で帰ってくる留学生もいる話を聞きます。皆さんの覚悟のほどはどうでしたか？

福生：せっかくの幸運を無駄にする途中帰国など、考えもしませんでしたね。帰る時は、「もっとオーストラリアに居たい」と思ったほどです。でも、ホームシックにならずに済んだのは、近所に住んでいた日本人家族のお蔭かも。

原田：最近は我慢できず返されるケースもありますよ。日本に来た女子学生で、国に残したボーイフレンドが恋しくて毎日電話する状態になり、「もうお帰りなさい」ということになったみたい。

吉田：当時は高すぎて国際電話なんかできなかったわよね。

竹下：私は一回だけ日本への電話をプレゼントされたことがあるの、3分だけでしたが。

濱：行ったら帰るまで1年間は知人の誰とも会えないのは当たり前でしたね。家族が来ることなど考えられなかった。皆さん、国に残した恋人がいかどうか知りませんが。

辻：私は男の子と話をしたこともなかったから、そんな心配もなかったわ。

原田：いよいよ出発の時、私はうきうきしているのに親は涙をためていたから、子供を未知の外国へ行かせるのに相当心配していたみたいでしたよ。

濱：通知と言えば「無事着いた、元気」という電報だけで。

渡航手続き

—— 当時は海外渡航に制約が多く渡航手続きが大変だったことは、皆さんそろって書いておられます。

竹下：海外渡航が自由化されたのは東京オリンピックが開かれた1964年で、それまでは政府関係とか特別な許可をもらった人しか外国に行けなかった。外貨を買うのには大蔵省の許可が要ったりしましたね。

吉田：文部省が実施する留学生試験というのがあって、あれはプレッシャーだった。東京まで往復するだけでも大変だったし。

濱：パート・ギャランティーというのは、滞在費は向こう持ちだったけれど、往復旅費は自己負担。それにあてる外貨は貴重だったから無駄に使わせないため、最低限の英語力があるかどうかをチェックする、という趣旨で日本銀行がそのような条件を課していたんです。小島、中村、宮本、濱の4人は正直に受けたけど、これを受けずに済んだ人がいましたね。何か特別な方法があったのかな。

原田：え？そんな試験があったの、全然知らなかったわ。

福生：私と篠崎さんの場合は学校がオーストラリア系だったので、そのルートで何の名目だったか円とドルを相殺してもらって、試験を受けずに済んだ記憶があります。でも、それが特別なことなんて思ってもいませんでしたよ。

竹下：私は沖縄（まだアメリカの占領下）に父の知人が居て、米ドルを買える立場にあったので、そのルートを使って外貨を買えました。

原田：そうだったの。父も竹下さんのお父様に大変お世話になったわけね。

辻：試験の内容は英語での面接だけ。試験官は3人いて、一人は外国人でした。文部省で受験したけれど、貴重な外貨の管理は日銀だったのね。

濱：当時の気分として、まともに試験を受けた組とうまく免れた組の間に溝ができたような記憶があります。とっくに時効ですけど。

オーストラリアの第一印象、対日感情

—— 情報の少ない時代でしたから、あまり予備知識もなしに渡豪した訳ですが、何に一番驚きましたか。手記に書かれたことも含めて、お話しください。

竹下：ダーウィンを出てシドニーに着くまでの景色が強烈。雲がなく地面が良く見えて、どこまでも続く赤茶けた砂漠の大地。「ああ、これがオーストラリアだ！」という気持ちでした。あの景色は忘れられません。

濱：着陸寸前に見えた住宅地の景色も印象的だったな。緑の中にゆったり並んだ赤い屋根の家、「何てきれいな街だろう！」と感動しました。

原田：私も「まるでおとぎの国みたい」と思ったわ。それから、最初のホストファミリーの家のお孫さんで、3歳の男の子が可愛いと同時に英語をペラペラしゃべるのが驚きで、羨ましかった。

吉田：ダーウィンの空港で機外に降りて見た地平線、コリマルに着いて見た水平線、そして何処までも広がる大きい空は、今まで見たことが無い風景で、その広大さに圧倒されました。

福生：まず、着いたらいきなりテレビ局や新聞社の取材でびっくり。生活レベルも日本と全然違って豊かだった。日本の月給があちらの週給だった気がします。それから街並みが可愛らしかった。私が暮らしたクロナラという街は、海辺にあって今はリゾート地みたいになっているようですが、当時は地味な街でした。

辻：今は居ながらにして世界中からいろんな情報が入るでしょう。何かに感激することや何かを吸収してこようという意欲が減っているのではないかしら。

原田：我々が何の予備知識もなく、何にでも感激し素直に受け入れられたことが、オーストラリア人にとっては誇らしく、嬉しいことだったのでしょね。

濱：その逆のケースで、ロータリアンになった当時の先生から数年前に聞いた話だけれど、アメリカからのロータリー交換留学生がオーストラリアに興味を持たず、休暇で出かけたのに景色も見ないで車の中で本を読んでいたらしい。「あんな態度では招待する意味がない」と憤慨していましたよ。

—— 先ほどもちょっと出ましたが、戦争の記憶や当時の対日感情などはどうだったのでしょうか。

福生：まわりには恐らく戦争体験者がいらしたと思います。でも、それに関して不快なことは何もありませんでした。狭い町だったので、通りを歩いているとよく声をかけられ、見守られている気がして安心でした。

濱：個人的に嫌な思いをしたことはありませんが、後で話を聞くと対日感情は決して良くはなかったようです。オーストラリアは何につけても英国とのつながりが依然として強かったけれど、アジアの一員であることが大事という認識も深まっていたころ。「東経135度線上の隣人」という標語があって、日本との貿易をもっと盛んにすべき、という機運は感じられました。

辻： 日本が排斥の主な相手ではないにしても、白豪主義という政策がまだ生きていた時代ですよ。若い人はこんな言葉をたぶん知らないでしょう。

原田：1962年は今思えば終戦間もないころ、大人にとっては、ついこの間でしょう。オーストラリアとの戦争について何も知らずに過ごして申し訳ない気持ちです。そもそも青少年交換の始まりは戦争で傷つき失明した人の発案で、これはすごいと思う。オーストラリア人は心が広いですね。

濱： そのファーカーさん自身がホストとなって受け入れたのが、ご欠席の関本[宮崎]さん。彼女はファーカーさんが「未だ語られざるオーストラリア人の英雄」200人の一人に選ばれていることを、手記の最後に紹介しています。

吉田：最初のホスト、ジャラッタさんは、戦時中は空軍の通信技師としてダーウィンにいたそうです。ダーウィンは日本軍の空襲を受けた町。その人が日本からの交換留学生受け入れに熱心に動いてくれたのですから、感動的です。

竹下：私がカンタス航空に就職したのは1967年で、当時は戦没者の遺骨収集ツアーがありました。ある年、特殊潜航艇に乗り組みシドニー湾に突入し戦死した方のお母さんが招待され、その予約を入れた記憶があります。随分あとになって、あちこちで激戦や悲劇があったことを知りました。例えば、映画「戦場にかける橋」の舞台と言われるタイのカンチャナブリでは、オーストラリア兵のお墓が沢山あるのを見ました。18、19歳だった若い兵士が、戦闘ではなく捕虜となってから強制労働させられ、飢えや栄養不良で死んだのです。今派遣される若者がそんな歴史を知っているのかどうか。

辻： 戦争のことで忘れられないのは、ホストの一人ゴードン・ベイカーさんのこと。とても私をかわいがってくださった方で、実は脚が少し不自由で子供さんもいなかった。あるパーティの席で他のロータリアンから「ゴードンはフィリピンの『バター



ン死の行軍』で脚をダメにした。だからダンスが出来ない。口髭で下の傷あとを隠している。」などと聞かされてショックでした。後でご本人に「ごめんなさい」と涙ながらに言うと、「謝ることはないんだよ、dear」と慰めてもらった。「それが戦争なんだから」と言われたとき、父がいつも「絶対に戦争してはいけない」という言葉を思い出しました。ファーカーさんもベイカーさんと同じような気持ちだったのではないかしら。

オーストラリアの生活・習慣

—— オーストラリア人や、彼らのライフスタイルについての印象はどうでしたか。

原田：日本との最大の違いは女性を大切にすることかしらね。ミラードさん宅ではご主人が仕事を終えて帰ってくると、奥様に「ダーリン、今日は忙しくて疲れただろう。」

さあここに座って。飲み物を何にする？」とかいがいしく労わるの。ご主人の方がよっぽど忙しく働いていると思うのに。

それに比べて日本人の男は駄目だったわね。表現力に欠けるといふか、芯は優しいんでしょうが、特にオーストラリアのご主人と比べるのが気の毒なくらい。すぐご近所に日本人家族が住んでいらして、3歳のお子さんがある若い夫婦。ご主人は商社勤めで優秀なんだろうけど、奥様への態度がちっとも優しくないの。奥様は、当時日本人社会がなかったし英語もおできにならなかったから、どこで買い物をしたらいいのかも分からず孤立状態。私が訪ねたら、日本語が話せるのでとても喜ばれた。お産で日本に帰れるのを心待ちにされ、シドニーの暮らしを楽しんでいる様子が全くなかったわ。もっとも、結婚してから、あの時の日本人のご主人はごく一般的な亭主関白ただただだと気が付きましたけどね。



竹下：「レディファースト」に慣れてから帰国すると、男性の気配りのなさに困りましたね。目の前で扉がバシッと閉められたり。

原田：私のために椅子を引いてくれたと思って腰掛けたら「俺が座るつもりで椅子を引いたら、万紗子が座っちゃった」なんて兄から言われたことがあったわ。

吉田：日本人と西洋人が混在しているときの振舞い方が難しい。

濱： どちらの文化がその空間や人間関係を支配しているかで決まるのでしょうかね。

竹下：むこうのお父さんが皿洗いをすることにはびっくり。これは当時の日本では考えられなかったもの。

福生：私を含めて、子供達も皿洗いやいろいろ家事の手伝いをよくしてましたね。

竹下：でも洗剤で洗ったお皿をすすがないで布巾で拭いてしまうのは嫌だった。

吉田：どうして水ですすがないのか聞いたら、食べても問題ない洗剤だから大丈夫、という返事でしたよ。

原田：日本と全然違ったことでは、やたら家族のことをほめなかった？「うちの息子はとてもクレバーで」なんて、日本じゃ絶対に言わないわよね。家族への愛情表現かな。文化の違いと言えばそれまでだけれど。

辻：私も少し書いたとおり、身内をほめるのには違和感がありました。そのうち慣れたけれど、ご主人が奥さんの料理をやたらほめるのに戸惑ったわ。

吉田：オーストラリア人の良いところは、とにかくフレンドリー。日本語に適当な訳語がないけれど、どうして最初からこんなに親しげに付き合えるのか不思議でした。でもそれに慣れると、日本人同士の付き合いが冷たく感じられるのは不思議。

竹下：複雑な人間関係への対応のしかたは長い歴史の過程で作られるものでしょう。オーストラリアは歴史の浅い国だから余計な気遣いがなくて済んでいるんじゃないか、と今になって思います。

濱 : 僕が彼らの暮らしから学んだことの第一は「人生を enjoy すること」じゃないかな。それまでは「人生とは苦しいけれど頑張るもの」と思っていたから。この価値観はその後の生き方に強い影響を残したと思う。

竹下 : 彼らは楽しむために働くのよね。あの頃の日本じゃお正月とお盆に数日休むくらいが普通だったし。

福生 : 休暇にはキャンピングカーなんかで出かけてバーベキューをしたり、本当に生活を楽んでいるのは、羨ましい限りでしたね。

吉田 : 今の子供達は私達世代と感覚が全く違うみたい。お金は欲しいだけあるし、なんでも手に入ると思っている。幸せの基準が違うというか。その点、感動がなくなかって不幸かもしれない。

辻 : 何も整っていない社会に行けば、自分たちがいかに恵まれているかを自覚できるでしょう。電気や水道がないところでもランプの下で家族と一緒に食事をするのを幸せと感じる事もできるのに、私たちはあまりに便利さになれているから感謝の気持ちも薄いし、少しでも不都合があれば不便さを嘆くのでしょうか。

福生 : オーストラリアの子供たちは、豊かな生活をしていながら自立心がありましたね。義務教育を終えると早々と就職する子が多かった。

—— 困ったこと、当惑したことについては如何でしょうか。

竹下 : 笑い話だけど、最初の晩ベッドに寝るときにどこの間へ寝るのか分からなかった。シーツが2枚あるのね。結局ベッドカバーの下にある毛布とシーツの間に寝ちゃった。次の日に他の部屋を見て2枚のシーツの間に寝ることが分かった。

吉田 : 私はホストシスターとの二人部屋だったから、彼女に何もかも教えてもらった。

竹下 : それから毎朝、ホストマザーがお砂糖入りのミルクティーを持ってきてくれるの。「好きか？」って聞かれたから「イエス」と言ったら、それから毎朝でしょう。飽きちゃって窓から捨てちゃった。違うものを飲みたいこともあるのよね。

原田 : 何かが好きと言うと、ずっと同じものを出されたのには困ったわね。夕食の前に、最初スイートシェリーとドライシェリーのミックスを勧められて、それが美味しいと答えたら、それから毎晩シェリーのハーフ&ハーフを飲む羽目になってしまった。(未成年なのに良くないね、の声)

福生 : 私はクノールのチキンスープをずっと出されて困ったことを思い出します。結局、美味しいけれど飽きたから、と言ってやっとな断れた。

吉田 : 私は、やはり言葉に苦労しましたね。考えていることがスムーズに出てくるようになるまで時間が掛かり、言う言葉が準備できた時には話題が次に移っていてチャンスを失うことが多かった。静かな人だと思われていたと後で聞いて、英語で聞いたことを日本語に翻訳している間は、静かな人だったんでしょう。

竹下 : 私も言葉が分からなくて、今度の週末に何かがあることは分かっただけで、カジュアルなのかきちんとした服装なのか分からず困りました。教会へ行くときはそれ

なりの身なりをして帽子をかぶらなければならないし。どうしたかと言えば、少ししか持ってなかった服を並べて「どれがいいの」と聞いたりしたものです。

それから、英語のことですごく面白かったのは、10年ほど前、オーストラリアへ行った時「我々は英語が上手になっただろう」と言われたこと。

濱：確かに強いオーストラリア訛にあまり出会わなくなったね。僕は少しさびしい感じがします。本物のオーストラリア英語が減っているのは、国際化の結果だろうか。

吉田：教育の成果かもしれない。皆さんはオーストラリア英語に慣れて、帰って来てから困らなかった？

竹下：カイト（凧）が本当はケイトだったかな、なんて混同したりして。

吉田：日本での英語教育は米語一辺倒だったでしょう。スペルも neighbour と neighbor や mum と mom のように違うものがあったし、高校に戻ってからの試験ではスペルにとっても気を付けた。

濱：僕は困らなかったな。発音は基本的に英国英語に近いから、一定のルールで直せばブリティッシュになる。スペルはもともと英国式だし。米語式のスペルでなければ×ということはなかったと思う。

竹下：カンタス、TAA の次に務めたキャセイ航空では純然たる英国英語。でもオーストラリア英語になじんでいたからすぐ慣れた。アメリカ英語からだったら難しかったと思うの。

——— 食事などは抵抗なく受け入れられましたか。

吉田：お肉が毎日食べられるのは嬉しかったわ。バーベキューも楽しい食事でした。

濱：日本の食事は「ご飯とおかず」の組み合わせなのに、向こうは全部「おかず」でしょう。すごく贅沢だと思った。

竹下：あの頃の食事といえば、ロースト肉にマッシュポテト、インゲンマメなど大体決まっていた。それが英国風というか一般的な食事。何十年たったあとオーストラリアへ行ってみると、食事のバラエティが随分豊かになっていることに驚かされた。いろんな国からの移民のお蔭で、国際化したのね。

福生：私は羊のステーキには困ったわ。匂いがとても嫌だったの。しばらくしてからカリカリに焼いてもらうようにして、やっと食べられるようになった。お肉ばかりだと飽きちゃって、商店街で時々売っていたホタテ貝のフライとチップスを買って食べるのも楽しみでした。包み紙は新聞紙でね。

原田：向こうの食事ではデザートがやたら多くて、最初はとても食べられないと思っていたけど、そのうち大好きになって、なんでも食べるうちにすごく太って困った。あちらでは体重計はストーンやパウンド表示だったでしょう。その換算率が分からないうちは気にしていなかったけど、初めてキログラムに換算した時はびっくりしちやったわ。

吉田：行く先々で「うちで痩せてもらっては困る」と言われて、勧められるままに食べていたら私もだんだん太っちゃった。

竹下：日本のホストファミリーでアメリカ人留学生を受け入れたのに「何も食べてもらえない」と嘆いていた人を知っています。外で買い食いをしていたらしい。もともと本国では家庭的なきちんとした食事をしていない子だったみたい。

—— 家族のあり方も 50 年で随分変わったようですね。当時の家族像を今どのように捉えられますか。

原田：あの当時我々がお世話になったロータリアン家庭は、オーストラリアの中でもハイレベルでとても素晴らしい家族でしたね。三食きちんとした食事が出たし、家族の絆も強く理想的な「ホームドラマ」のよう。でも必ずしもオーストラリア人全てがそのようにリッチだったという訳ではないことが分かったのは、学校のお友達でマレーシアからの私費留学生の下宿に行ったとき。自炊していた台所は汚いという訳ではないけれど、やはり家の様子は見劣りしましたね。

竹下：英連邦の仲間だし中国系マレーシア人が沢山いたわね。彼らは海外へ出ることしか出世の道はないという雰囲気があった。

吉田：学校の昼食には毎朝サンドイッチと果物を用意してもらっていました。おやつ時間もあって、お菓子も持って行っていたのね。

原田：サンドイッチと言ってもそんなに手間をかけず簡単なものだったんじゃない？それを紙袋に入れて、りんごはそのままカバンの中をゴロゴロと転がってた。

福生：おやつ時間に「りんごをかじらせて」なんて言われてちょっとびっくり。でも、そんなことがきっかけで仲良くもなれました。いつもはサンドイッチを持たされていたけど、たまにお金をもらって学校の売店でソーセージロールやミートパイが買ったのは嬉しかったわ。

辻：私は昼食のお金を毎朝渡されていたの。「それでサンドイッチなどを買いなさい」って。たまに忘れられると悲しくて、「お金をください」と言えないほどナイーブだった。

原田：小島さんに呼ばれてウルンゴンに泊りがけで行ったとき、なんだか物悲しい様子があったのを思い出すけれど。一人だけ離れて寂しそう、というのだけじゃなくて。

吉田：シドニーと生活レベルが全然違ったせいかも。ロータリアンでもシドニーの人達ほど豊かではなかったのは確かです。下水道がなくトイレが水洗でない家もあったりして。その代り小さな町だからみんな私のことを知っていて、とてもフレンドリーで、嫌がらせを受けたこともなく、地域の新聞やテレビにはよく出ましたよ。

濱：僕の誕生日パーティには皆さんも招待されたと思うけど、会場のハンコックさんの家を覚えていますか？あの晩集まったのは 5、60 人。みんながダンスを楽しめるほどのホールがあった。夜だから見えなかったけど、崖の下の水辺にはプールがありヨットやモーターボートも持っていた。特に裕福な家族の例としても、今の日本から見ても圧倒的に豊かな暮らしをしていましたね。

吉田：あの時は「こんな立派な家に住んでるの？」と思ってびっくりしたわ。

竹下：万紗子さんのホストには自営業が多かったけれど、その一人でパン屋さんがロールスロイスに乗っているのには驚いた。

辻： ずっとあとでホストファミリーが世界一周の旅をする途中、神戸に寄港したことがありました。その船で会ったポーターの家族は毎年6週間の休暇を取って旅行すると聞いてびっくり。そのような職業の人でもあんなに優雅な休暇を楽しめる国はすごいと思ったわ。

学校・英語の勉強・エピソード

—— 学校のことはどうでしたか？英語にはみんな苦しんだのでしょうか？

竹下：普通の英語だって分からないのに、シェイクスピアのジュリアス・シーザーなんて分かる訳がないでしょう。まったくお手上げ。でも、あらかじめ準備できる科目は、手伝ってもらって良い成績をもらったりしましたよ。

濱： 最初のころ英語の授業は地獄だったな。とても無理と最初からあきらめていたのがよくなかった。あとになって、もっと早くから頑張ればよかったと後悔しました。でも僕は学校で英語の補講を受けさせてもらえたり、ハンコックさん宅では、英語の特訓があったんですよ。ご主人の指導で夕食後にその日の新聞の一部を音読するのが日課になっていた。理解できればそのまま進み、分からないところに行き当たると、発音や意味をきちんと教えてもらった。実用的な英語の勉強になって実にありがたかったな。



辻： 素晴らしいことだね。その方の職業は何ですか。そう、弁護士ならそのようなこともできるわね。

竹下：私は英語の家庭教師を付けてもらったの。その費用はクラブが出してくれました。

原田：試験の時は英和辞書を持ち込んで良いことになり、地理の答えを辞書に書き込んだりした。あれは明らかにカンニングよね。

福生：英語の授業は大変だったわ。現代文じゃなくて古典だもの。しかも試験は論文形式でしょう。時々4軒目の長女から教えてもらうんだけど、匙を投げられていたかも。

竹下：外国に1年もいれば、自然と英語がしゃべれるようになっていている人が多いけれど、そうはならないのよ。ワーキングホリデーで行ったら、まわりが外国から来ている人だったり日本人だったり。それに勤め先が日本食のレストランという場合は、日本語だけで済んでしまう。やはりきちんと言葉の訓練を受けないとダメね。

辻： 英語について私は意地悪なことも言われたわ。ある時クラスで友達に「昨日誰かに会った」と言おうとして「I met 誰々」と言ったら、「あなたはmeetしたんじゃない、You just saw him.」と嘘つきのようないい方をされたの。そう言った子は私のホ

ストシスターで、ホストマザーが私を可愛いがるので、やっかみがあったと数十年経って言い訳していました。

福生：ホストマザーが私のことばかりに構うので、私もあるホストシスターに妬まれた。それに長く気づかず彼女には悪いことをしたわ。

吉田：クラスメートに「週末にシドニーに行った」と話すと「そんなにしょっちゅうシドニーに行くなんて、トシコはスポイルされてる」と言われたことがあった。彼女が spoil を「甘やかされてる」という意味で使ったのか、「だめになる」という意味で使ったのかわからない。今はシドニーも通勤範囲になったけれど、その頃は頻繁に行くところではなかったから、羨ましがられたのかも。

——— その他、楽しかった思い出や記録に残したいエピソードはありませんか。

原田：数少ない日本との関係では、海上自衛隊の船が戦後初めてシドニーに入港したことがあって、小島さんと竹下さんと見学に行ったわよね。これはホストファミリーとは関係なく、コリンという学校の友達が教えてくれて一緒に行くことになった。案内役の若い水兵さんに日本語で挨拶すると、びっくりして喜んでくれた。そうしたら「これから昼休みの休憩に入るので、見学は1時から再開します」と英語でアナウンスしてくれないか頼まれたの。私の英語は頼りないからコリンに頼んだら、自分の声が艦内に響くとあって彼女は大いに張り切ってやってくれた。

竹下：それからカレーライスを御馳走になったわね。梯子のような階段を下りた食堂で。あれは「海軍カレー」だったのかしら。

吉田：新聞には Japanese Navy と書かれて、「日本海軍の復活」と受け取られるんじゃないかと、複雑な思いもあったわ。

原田：私たち可愛かったかどうか知らないけれど、外地で17、18歳の日本人の女の子が自衛艦を訪れるなんて、若い水兵さんにしてみれば、嬉しかったんでしょうね。

竹下：キングスクロスの「スキヤキハウス」に行ったよね。コツコツお小遣いを貯めて。

原田：そうそう、日本食レストランはまだ数えるほどだったし、若い女の子だけで和食を食べているなんて普通じゃないから目立ったのか、駐在の日本人商社マンから声をかけられ、いろいろご馳走になっちゃった。

濱：日本から何か来る、というのには敏感でしたね。八幡製鐵のラグビーチームが「遠征試合」に来たことがあった。主力選手の一人が兄の友人だったので、ハンコック氏に試合見物と面会に連れて行ってもらいました。試合前の式典で国歌「君が代」が流れ、何だかジーンと来てしまって涙を流したのが、なつかしい。

帰国後の生き方・オーストラリア再訪など

——— 帰国後の進路と留学経験との関連や生き方、オーストラリアを再び訪れた時のことなど如何ですか。

吉田：私は1年遅れて高校を卒業したあと、進学はあきらめて商社に就職しました。学費を渡航旅費に使ってしまったからです。その時の初任給が9,000円。あの航空運賃が私の月給の3年分ですね。でも、大学に行きたいと思う気持ちはずっと持ち続け、40代になってから通信教育で大学を卒業し修士号まで取りました。

福生：帰国後は大学で英文学を専攻しました。すぐに結婚して主人が国際的なことにあまり関心がなかったのので、残念ながら国際交流などに直接携わったことはありません。ただ、転勤生活が続いたあと今のところに落ち着いたので、20年間小中学生に英語を教えました。



実は留学のときから一度もオーストラリアを訪れたことがないの。向こうから来られた人達には会いましたけどね。今年の8月には、娘達と7歳と9歳の孫達も連れてクイーンズランドへ旅行します。50年振りのオーストラリア。今から胸がドキドキするほど楽しみです。

竹下：私はまず日本でカンタスの地上勤務をしてからオーストラリアへ行き、労働ビザを取ってTAAに勤めました。それからキャセイ航空に移った。留学体験がなければ考えられないコースですね。でも、まだ元気なうちに退職して、ボランティア活動に専念しました。

原田：結婚した相手がロータリアンで、夫と一緒に青少年交換には随分長く関わりました（原田良康氏、第2580地区、池袋RC）。これまでホストファミリーとしてお世話した交換留学生は何十人になるのかしら。世界中に御世話をした人たちがいることを考えただけで素晴らしいことです。ホストファミリーをしても留学した経験があるからお互いの理解を深められたのでしょう。

吉田：二つの文化を経験したことで、良いことも沢山あったけど悩みも増えましたね。日本の社会では、親の期待と自分の意思の板挟み。働いて自立したかったのに、「女であること」で自分の思いのままにならなくて。半分大人になったのに、帰ってきたら子供扱いに戻った感じ。

辻：知らなければそれなりに平穏でいられる。両面ありますね。私の場合、帰国したら新しい母親が来ていて（実母は渡航の前年に亡くしていた）、別なホームステイが始まったみたいでした。彼女が私の進学に反対したこともあり、私は早く自立したい気持ちだったので、大学へは進まず実務的なことを身につけるためビジネススクールへ行って、福岡のアメリカ文化センターに就職しました。その後、国際交流の団体を立ち上げ、延べ600人ほどのお世話をしました。大学での勉強は私の大きな夢だったし、吉田さんの話も聞いていたので思い切って勉強を始め、60代になって大学の卒業証書を貰いました。やり残したことを達成できて充実した気持ちで嬉しかったわ。

次の予定は6月末からシドニーで開く絵の個展です。またホストファミリーや先生や友人に会うのも楽しみです。

竹下：高齢となったホスト・ホステスの生き方には感心しました。夫と死別したミラード夫人がリタイアメントヴィレッジに入居されてから、万紗子さんと一緒にお訪ねした時のこと。転居の時に持ち物は一切整理して、身のまわりがとてもきれいだったことに感心したわ。私たちが帰る時には、口紅をつけ直して挨拶されたことにも。

吉田：私が初めてオーストラリアを再訪したのは1990年。両親を病気で続けて亡くし茫然としていた時に、ホストペアレントの方々から「これからは私たちを親と思って」という暖かいお手紙を頂いたんです。その時、命には限りがあることにふと気付き、お互いが生きていうちに是非もう一度逢いたいと思いお訪ねしました。再会出来て嬉しかったし、本当の親子になったように感じました。

我々が得た恩恵、果たした役割

——— そろそろ肝心なテーマを語ってまとめに入りたいと思います。我々は平和・親善の使節としてオーストラリアへ行って約1年、ハイスクールへ通い、ホストファミリーと生活を共にしたわけですが、滞在中に期待された役割を十分果たせたのでしょうか。そして、その後の人生において国際的な交流や親善の意識を持ちつづけられたのでしょうか。頂いた恩恵や自身に残った財産などとともにお話しください。

原田：私たちの幸運は、まず良い時に行ったこと。平和を求める雰囲気が高く、日本人の若者が本当に珍しく言わば希少価値があったからか、大歓迎されましたね。使命感や目的意識などあまりなかったし、何をしたかは言えないけれど、恩恵は沢山いただきました。その一つが大人と対等に話ができるようになったこと。もう一つが自分で考え、自分で判断する力を養ったのではないかと思いますね。同じ大学生でも、留学から帰ってきた子は揉まれているから違うみたい。

吉田：本当に温かく迎えられ、有難かったわ。私たちに何ができたのか、国際親善に役立ったのか、自信はないけど、その一方で「日本人の代表として恥ずかしくない行動を」と親からも学校からも言われたことがいつも意識にありましたね。

辻：今思えば、状況が分からないときでも、文句も言わずニコニコしていましたね。素直さやそんなことが幸いしたのでしょうか、誰からも良くして頂いたと思います。今の子は色々知っているからもっと生意気かもしれない。当時は日本全体がつつましく頑張ろうとする気持ちも強かったし、もっと謙虚だったような気がします。

濱：それだけでも素晴らしいことじゃないですか。みんなまじめで正直で、ホストファミリーを困らせることなどしなかったし、「日本から来た青年はこんなにいい子たち」という印象は与えたと思う。「戦場で相対し野蛮と聞いていた日本人とはぜんぜん違う」とってとこかな。僕も好印象を持ってもらおうと努めたのは確かです。

福生：ホストファミリーと一緒に家族のように暮らし、多くの友人達と親しく過ごしたことが、日本と日本人を知ってもらうという点で最大の成果だったと思います。

原田：お世話をしたあの子がいる国とは絶対戦争しない、ということね。

福生：娘達も留学させたかったけど、二人とも消極的で希望は叶わず、孫達には貴重な体験をさせてやれたらいいな、と思っているところ。50年前の経験があったればこそ、今の自分があるんだと改めて思います。ただ、もう少し目的意識を持っていたら、もっと実のある人生になっていたかもしれません。

竹下：私のこれまでの人生は、あの留学を抜きには考えられません。航空会社に勤務したこともそうだし、一番の財産は「ボランティアの概念」を学んだこと。長く国際交流ボランティアが続けられたのも、それを先駆けてやれたのは、向こうでの経験があったことが大きいですね。

原田：青少年交換のお世話の他に、40数年姉妹クラブ（Epping RC）との橋渡しをしています。通訳するにしても案内の場面でも、私が両国の事情や前後関係が分かっているから勤まる場面もあるんです。言葉の訳だけでなく「心の翻訳」をしているのでしょう。今や私の社交性がまわりを巻き込んで行っているみたいですね。

吉田：ずっと後になって北九州国際交流協会に勤め、窓口での情報提供、情報誌の発行な



などを担当しました。その時の思いは、オーストラリアで受けた親切や暖かい気持ちを、今度は海外から来る人たちにお返ししたいということ。異文化に暮らすのは面白いけれど大変です。言葉が不自由な不安などは自分が体験したことなので、日本の生活に溶け込む手助けとなれるよう心掛けました。自分が受けた暖かい気持ちを他の人に伝えていくことで、十分な恩返しになったかと思っています。

濱：就職してからは英会話が出来るのを重宝がられ、会社を訪問する外国からのお客様と接する機会が随分ありました。フランスへ給費留学する機会にも恵まれ、国際会議や外国人技術者向けの研修などにも参加するなど、国際的な交流が公私を問わず沢山あって、外国の友人も多くできました。インドネシアにも住み国際技術協力を携わったことで、開発途上国の事情を肌で感じ、先進国の責任も実感できるようになったと思います。今は奈良で日仏文化交流のお手伝いをしています。

辻：私が留学から得た最大ものは、「自分で考え行動し、自立すること」を体得したことだったと思います。青少年交換の成果としては、ファーカーさんの意志で始まった「豪日の相互理解と友好の確立を若者に託す」という目的は十分達成されプログラムは成功だったと私は確信しています。悲惨な戦争体験を背負いながら、自ら日本からの学生を招くという考えを実行して下さったファーカーさんや、ご自分も戦争捕虜だったにもかかわらず私を娘のように可愛がって下さったベイカーさんのような広い心を持った戦争体験者に、心から感謝と尊敬の気持ちを持ち続けています。

今後のロータリー青少年交換への期待

—— 話は尽きませんが、最後にこれからのロータリー青少年交換に対する期待や意見を述べてもらえますか。一時ほど盛んではないとも聞いています。

原田：青少年交換が新鮮味を失っているのかもしれませんがね。小中学生でも外国へ行ける時代だから。その一方で親の無理解が問題になり得ます。アメリカに派遣した女子のケースで、ホストファミリーが黒人だったことにすごいクレームが親から出て、親を説得したことがありましたが、本人にとっては素晴らしいホストファミリーだったようです。ロータリー青少年交換の場合、1年間ロータリアンの家族とともに過ごす経験に最も大きな価値があると思いますね。

辻： 私が携わった10年間の活動でも国際交流のむずかしさを体験しました。外国人を先入観で理解するひとが多いのも確かです。現実を知らないから、異質なものに対する恐れがある。地球人として同じということを理解してほしい。ホスト希望者の中には白人しかだめとか、英語圏の人を希望するなど差別的な感覚を持って受け入れ条件を云う人も珍しくありませんでしたよ。残念ですね、すぐ説得にあたりましたけど。お互いを分かり合えれば問題などありませんでした。

濱： 日本からの派遣では男子の参加が非常に少ないそうですね。進学や就職に後れを取る、という負担感が女子よりも重いようです。たった1年の遅れなんか、得られるものの大きさを思えば何の問題もないはずなのに。我々の時代のような「海外への憧れ」が希薄になってしまったのでしょうか。僕の場合、留学経験がむしろ自身の存在価値を高めてくれ、仕事の中でもよい影響が沢山あった。これは現在でも共通することだと思います。

竹下： ロータリアン自身の高齢化も問題じゃないかしら。やって来る若者と同世代のお子さんがある家族が目に見えて少なくなっている。ロータリアンの若返りという視点も欠かせませんね。

吉田： その一方で、若い人だけが親善使節ではないと思うの。「シルバー留学」はどうかしら。シニア層なら知識が豊富で人生経験も豊かだし、彼らが交流すればもっと深いところで文化を語り合えるかもしれない。若い時は無理だったけれど、今ならしてあげられることも沢山ありそう。期間は短くて良いから、ロータリアン自身が互いに訪問しあって一緒に暮らすプログラムはどうでしょう。

竹下： 英語をもう一度やりなおそうとイギリスに語学留学したとき、参加者はヨーロッパ各地からのシニア層が多くて会話のレベルが高く、本当に楽しかったわ。

原田： 今の子供が我慢できないことも問題ですね。アメリカから帰国した子など、日本になじめなくて浮いてしまう。細かい学校の規則など制約が多いことに抵抗感があるみたいね。ある程度は我慢する時期があっても良いでしょうに。

留学生の質については、日本から派遣される学生は十分セレクトされていると思います。むしろ日本に来る方に問題が多いかな。留学先の国が本来の希望とは違う

場合が多いのも理由のひとつ。ホストファミリーにはいろいろ苦情を言う人もいるけれど、実はたいしたことではないの。大きな気持ちで見て許してあげればいい。

日本の生活になじめなかったり、真面目に勉強をしなくて日本語が上手にならなかったり、ホストファミリーを困らせたりした留学生が、意外にも一旦帰国したのちに、すごく勉強して奨学金をもらって再度日本の大学に留学してくるケースも沢山ありますよ。要は日本を好きになって帰ってもらえば十分、という気がします。

そして多くのロータリー交換留学生はその国を本当に好きになっています。私達が芯からオーストラリアを好きになったように。

—— いつの間にか時間が過ぎ、座談会を閉じなければなりません。50年も経っているのに、当時の様子や気持ちが生き生きと蘇るものですね。感動に満ちた素晴らしい1年だったから、に違いありません。

戦争の悲劇を二度と繰り返さないという強い志がこのプログラムの源泉だったことも再確認できました。また、各人が初の青少年交換に参加できた幸運の意識とお世話になった方々への感謝の気持ちを、今なお持ち続けているお話しが随所に出てきました。我々はこれからも良い思い出と感謝の念を持ち続け、平和・親善に限らず何か世の中のお役に立つことができれば素晴らしいことですし、恩返しにもなるでしょう。

本日は有意義な議論が交わせたと思います。本当に有難うございました。

これからもロータリーの青少年交換プログラムが、時代の要請に応じながら、良い形で続いてくれることを期待します。



「御花」の松濤園にて、左から 濱・吉田・辻・原田・福生・竹下・立花寛茂氏 2012. 5. 26

資料編

1. 第1期派遣学生 基礎情報
Basic Information on the First Exchange Students
2. 参考資料集
Reference Materials



1. 第1期派遣学生 基礎情報

Basic Information on the First Exchange Students

以下は、ロータリー青少年交換計画により初めて派遣された第1期留学生9名の基礎情報である。但し、記録が残っていない部分があり、不完全なことをご容赦願う。

なお、1) 記載事項は、特記ない限り1962年渡航時頃のもの。

2) 記載順序は、旧姓による五十音順。

3) スポンサークラブの所属は、全て当時の370地区。

小島 敏子 / Toshiko KOJIMA (Miss)

生年月/month and year of birth : 1944年4月/April 1944

出身校/home school : 福岡県立門司北高等学校/Moji Kita Senior High School

学年/year : 第2学年/2nd Year

校長/principal : 福富栄三/Mr. Eizo Fukutomi

スポンサークラブ/sponsor club : 門司ロータリークラブ/Rotary Club of Moji

所在地/location : 福岡県門司市/Moji City, Fukuoka Prefecture

会長/president : 岡野正実/Mr. Masami Okano

渡航時期/dates of departure from Japan and arrival to Australia :

1962年2月9日東京羽田発/1962年2月10日シドニー着

Departed from Tokyo 9 Feb. 1962 arrived at Sydney Mascot 10 Feb.ホスト

クラブ/host club : Rotary Club of Corrimal (D.275)

所在地/location : Corrimal, NSW, Australia

会長/president : Mr. G. Tipper (1961-62), Mr. L. Jarratt (62-63)ホスト

名・住所/host families and addresses :

Lew & Margaret Jarratt 6 Powell Avenue, Corrimal, NSW

N. Carr 360 Princes Highway, Corrimal, NSW

John & Ruby Hall 151 Princes Highway, Corrimal, NSW

Warner & Ursula Reed, 7 St. John's Ave, Mangarton, Wollongong, NSW

John & Nancy Hamment,

Southern Mines Rescue Station P.O. Box 5 Corrimal, NSW

Trevis & Priscilla Birch, 2 Ronald Street, Corrimal, NSW

Ian & Dorothy Findlay,

9 Aristo Crescent, Mount Ousley, Fairy Meadow, NSW

George & Marry Tipper, 2 Ronald Street, Corrimal, NSW

通学校／attended school : Corrimal High School

編入学年／enrolled year : 4th Year

校長／principal : Mr. R.W. Caldwell

帰国時期／date of departure from Australia and arrival to Japan :

1963年1月23日シドニー発、23日東京羽田着

Departed from Sydney 23 Jan. 1963, arrived at Tokyo 23 Jan. 現在／
today : 吉田敏子、大分県日田市在住／Toshiko Yoshida lives in Hita, Oita-pref.

竹下 由美 / Yoshimi TAKESHITA (Miss)

生年月／month and year of birth : 1944年1月／January 1944

出身校／home school : 明光学園高等学校*／Meiko-gakuen Senior High School

学年／year : 第3学年／3rd Year *大牟田市

スポンサークラブ／sponsor club : 柳川／Rotary Club of Yanagawa

所在地／location : 福岡県柳川市／Yanagawa City, Fukuoka Prefecture

会長／president : 立花和雄／Mr. Kazuo Tachibana

渡航時期／dates of departure from Japan and arrival to Australia :

1962年2月9日東京羽田発、2月10日シドニー着

Departed from Tokyo 9 Feb. 1962, arrived at Sydney Mascot 10 Feb. ホスト
クラブ／host club : Rotary Club of Botany (D.275)

所在地／location : Botany, NSW, Australia

会長／president : Mr. A. Hatrick ホスト名・住所／host families and
addresses : Mr. and Mrs. J. Mills, 2 Cawarra Road, NSW

Mr. and Mrs. Hansen,

通学校／attended school : Willoughby Girls' High School

編入学年／enrolled year : 5th Year

校長／principal : Miss Schumaker

帰国時期／date of departure from Australia and arrival to Japan :

1963年2月シドニー発、東京羽田着

Departed from Sydney, February 1963, arrived at Tokyo Haneda
現在／today : 福岡県久留米市在住、Yoshimi Takeshita lives in Kurume, Fukuoka-pref.

立花 万紗子 / Masako TACHIBANA (Miss)

生年月／month and year of birth : 1944年1月／January 1944

出身校／home school : 福岡県立伝習館高等学校／Denshukan Senior High School

学年／year : 3rd Year

スポンサークラブ／sponsor club : 柳川／Rotary Club of Yanagawa

所在地／location : 福岡県柳川市／Yanagawa City, Fukuoka Prefecture

会長／president : 立花和雄／Mr. Kazuo Tachibana 渡航時期／dates of departure from Japan and arrival to Australia :

1962年2月9日東京羽田発、2月10日シドニー着

Departed from Tokyo 9 Feb. 1962, arrived at Sydney Mascot 10 Feb. ホストクラブ／host club : Rotary Club of Hunters Hill (D.275, later D.268)

所在地／location : Hunters Hill, NSW, Australia

会長／president : Mr. George Dando (61-62), Mr. Eric Primrose (62-63)ホスト名／host families : Mr. and Mrs. Thomson, Dando, Millard, Moon, Schahinger, Primrose, Hornor and Unwin

通学校／attended school : Hunters Hill High School

編入学年／enrolled year : 5th Year

校長／principal : Mr. Jim Ray

学級担任／roll teacher : Mrs. Leadbetter (?)

帰国時期／date of departure from Australia and arrival to Japan :

1963年1月シドニー発、東京羽田着

Departed from Sydney, January 1963, arrived at Tokyo Haneda

現在／today : 原田万紗子、東京都文京区在住／Masako Harada lives in Tokyo

中村 数代 / Kazuyo NAKAMURA (Miss)

生年月／month and year of birth : 1944年10月／October 1944

出身校／home school : 山口県立萩高等学校／Hagi Senior High School

学年／year : /2nd Year

校長／principal : 福田雪雄／Mr. Yukio Fukuda

スポンサークラブ／sponsor club : 萩ロータリークラブ／Rotary Club of Hagi

所在地／location : 山口県萩市／Hagi City, Yamaguchi Prefecture

会長／president : 林良雄／Mr. Yoshio Hayashi

渡航時期／dates of departure from Japan and arrival to Australia :

1962年2月19日東京羽田発、2月20日シドニー着

Departed from Tokyo 19 Feb. 1962, arrived at Sydney Mascot 20 Feb. ホストクラブ／host club : Rotary Club of Fairfield (D.275, later D.268)

所在地／location : Fairfield, NSW, Australia

会長／president : Mr. T. Everingham(1961-62), Mr. Sattler(62-63)

ホスト名・住所／host families and addresses :

Tom & Ivy Everingham 41 Niblic Crescent, Dundas, NSW

John & Phyl Pollard "Trees" Bossley Road, Bossley Park, NSW

Warren & Dorothy Byrnes 129 Crescent, Fairfield, NSW

Bill & Millie Bradford 37 Smithfield St., Fairfield, NSW

Stan & Marion Nagle 901 Horsley Drive, Smithfield, NSW
Bill & Doreen Goodchild 28 Wrentmore St. Fairfield, NSW
Norman & Gladys Tunncliff 4 Henry St., Turrella, Sydney, NSW
Gordon & Roma Baker 61 Braeside St. Wahroonga, NSW

通学校／attended school : Fairfield Girls' High School

編入学年／enrolled year : 4th Year

校長／principal : Miss Muriel Dear

学級担任／roll teacher : Mrs. Mullin

帰国時期／date of departure from Australia and arrival to Japan :

1963年2月13日シドニー発、13日東京羽田着

Departed from Sydney 13 Feb. 1963, arrived at Tokyo 13 Feb.

現在／today : 辻数代、福岡県志免町在住／Kazuyo Tsuji lives in Shime, Fukuoka-pref

濱 惠介 / Keisuke HAMA (Mr.)

生年月／month and year of birth : 1944年4月／April 1944

出身校／home school : 宮崎県立小林高等学校／Kobayashi Senior High School

学年／year : 第2学年／2nd Year

校長／principal : 高山義盛／Mr. Yoshimori Takayama スポンサークラブ／

sponsor club : 小林ロータリークラブ／Rotary Club of Kobayashi

所在地／location : 宮崎県小林市／Kobayashi City, Miyazaki Prefecture

会長／president : 横山通幹／Mr. Michimoto Yokoyama

渡航時期／dates of departure from Japan and arrival to Australia :

1962年2月9日東京羽田発、2月10日シドニー着

Departed from Tokyo 9 Feb. 1962, arrived at Sydney Mascot 10 Feb. ホス

トクラブ／host club : Rotary Club of Hurstville (D.275)

所在地／location : Hurstville, NSW, Australia

会長／president : Mr. John Crawford (1961-62), Mr. Wal W. Scott (62-63)

ホスト名・住所／host families and addresses :

Dennis & Beryl Andreasen 41 Gardinia St., Beverly Hills, NSW

Ron & Rita Hayes 35 The Mall, South Hurstville, NSW Ted &

Betty Hancock 40 Pleasant Way, Blakehurst, NSW Ray & Rene Everrit

36 Stuart St., Blakehurst, NSW Wal & Olga Scott 3 Como St.,

Blakehurst, NSW

通学校／attended school : Hurstville Boys' High School

編入学年／enrolled Year : 4th Year

校長／principal : Mr. Ross D. Thomas

学級担任／roll teacher : Mr. Bede Goodman

帰国時期／dates of departure from Australia and arrival to Japan :

1963年1月6日 シドニー港発、2月3日 神戸港着

Departed from Sydney Darling Harbour 6 Jan. 1963,

Arrived at Port of Kobe 3 February

現在／today : 奈良県奈良市在住／Keisuke Hama lives in Nara.

前田 裕子 / Yuko MAEDA (Miss)

生年月／month and year of birth : 1944年2月／February 1944

出身校／home school : 聖和女子学院 高等部／Seiwa Girls' Senior High School,

学年／year : 第3学年／3rd Year

校長／principal : マザー・キャサリン・テレザ Mother Catherine Theresa

スポンサークラブ／sponsor club : 佐世保ロータリークラブ／Rotary Club of Sasebo

所在地／location : 長崎県佐世保市／Sasebo City, Nagasaki Prefecture

会長／president : 富永猪佐雄／Mr. Isao Tominaga

渡航時期／dates of departure from Japan and arrival to Australia :

1962年2月9日東京発、2月10日シドニー着

Departed from Tokyo 9 Feb. 1962, arrived at Sydney Mascot 10 Feb.ホスト

クラブ／host club : Rotary Club of Parramatta (D.275, later 268)

所在地／location : Parramatta, NSW, Australia

会長／president : Mr. Aubun

ホスト名／host families : C. L. Robinson, Kohler, Thomas, Harvey, J. S. Pincott,

Hewson,

Hingston and Pedersen

通学校／Attended school : MacArthur Girls' High School

編入学年／enrolled year : 第4学年／4th Year

校長／principal : Mrs. Barrett

帰国時期／date of departure from Australia and arrival to Japan :

1963年1月シドニー発、東京羽田着

Departed from Sydney, Jan. 1963, arrived at Tokyo

現在／today : 埼玉県春日部市在住／Yuko Shinozaki lives in Kasukabe, Saitama-pref.

松浦 尚子 / Naoko MATSUURA (Miss)

生年月／month and year of birth : 1945年2月／February 1945

出身校／home school : 聖和女子学院高等部／Seiwa Girls' Senior High School

学年／year : 第2学年／2nd Year

校長／principal : マザー・キャサリン・テレザ／Mother Catherine Theresa

スポンサークラブ／sponsor club : 佐世保ロータリークラブ／Rotary Club of Sasebo

所在地/location : 長崎県佐世保市/Sasebo City, Nagasaki Prefecture

会長/president : 富永猪佐雄/Mr. Isao Tominaga

渡航時期/dates of departure from Japan and arrival to Australia :

1962年2月9日東京羽田発、2月10日シドニー着

Departed from Tokyo 9 Feb. 1962, arrived at Sydney Mascot 10 Feb.

ホストクラブ/host clubs :

Rotary Club of Cronulla (D.275) and Rotary Club of Caringbah

所在地/location : Cronulla and Caringbah, NSW, Australia

会長/president : Mr. John Adair (Cronulla RC)

ホスト名・住所/host names and addresses : Mr. Alan Mackay 46 Cronulla Street,
Cronulla, NSW

Mr. B. Bradley 107 Kingsway, Cronulla, NSW

Mr. J. Hand

Mr. R. H. Breakspear

通学校/attended school : Cronulla High School

編入学年/enrolled year : 4th Year

校長/principal : Mr. E. G. Pidgeon

帰国時期/date of departure from Australia and arrival to Japan :

1963年1月シドニー発、東京羽田着

Departed from Sydney, Jan. 1963, arrived at Tokyo

現在/today : 福生尚子、奈良県奈良市在住/Naoko Fukusho lives in Nara

宮崎 洋子 / Yoko MIYAZAKI (Miss)

生年月/month and year of birth : 1945年9月/September 1945

出身校/home school : 信愛女学園高等学校/Shin-ai Girls' Senior High School

学年/year : 第1学年/1st Year

校長/principal : 松永きく/Ms. Kiku Matsunaga

スポンサークラブ/sponsor club : 久留米ロータリークラブ/Rotary Club of Kurume

所在地/location : 福岡県久留米市/Kurume City, Fukuoka Prefecture

会長/president : 永岡幾兵衛/Mr. Ikubei Nagaoka

渡航時期/dates of departure from Japan and arrival to Australia :

1962年1月17日東京羽田発、1月18日シドニー乗り換え、メルボルン着

Departed from Tokyo Haneda 17 Jan. 1962, transferred at Sydney Mascot
and arrived at Melbourne Essendon 18 Jan.

ホストクラブ/host club : Rotary Club of Rosebud (D.282)

所在地/location : Rosebud, Victoria, Australia

会長/president : Mr. Nelson

ホスト名/host families :

Donald and Joane Farquhar, Fred and Mrs. Jarman, Peter and Pat Parkinson, Mr. and Mrs. Billot

通学校／attended school : Rosebud High School

編入学年／enrolled year : 4th Year

校長／principal : Mr. Hudson, 教頭／vice-principal : Ms. Pat Waller

帰国時期／date of departure from Australia and arrival to Japan :

1963年1月メルボルン発、シドニー乗り換え、東京羽田着

Departed from Melbourne Essendon Jan. 1963, transferred at Sydney Mascot, arrived at Tokyo

現在／today : 関本洋子、千葉県千葉市在住／Yoko Sekimoto lives in Chiba.

宮本喜久男 / Kikuo MIYAMOTO (Mr.)

生年月／month and year of birth : 1944年8月／August 1944

出身校／home school : 山口県立萩高等学校／Hagi Senior High School

学年／year : 第2学年／2nd Year

スポンサークラブ／sponsor club : 萩ロータリークラブ／Rotary Club of Hagi

所在地／location : 山口県萩市／Hagi City, Yamaguchi Prefecture

会長／president : 林良雄／Mr. Yoshio Hayashi

渡航時期／dates of departure from Japan and arrival to Australia :

1962年2月19日東京羽田発、2月20日シドニー着

Departed from Tokyo 19 Feb. 1962, arrived at Sydney Mascot 20 Feb. ホ

ストクラブ／host club : Rotary Club of North Sydney (D.275, later 268)

所在地／location : North Sydney, NSW, Australia

会長／president : Mr. John Hallstrom(61-62), Mr. Bruce Marriage(62-63)

ホスト名・住所／host families and addresses : Mr. & Mrs. Bill C. Steanes,
8 MacPherson St., Cremorne, NSW

Mr. & Mrs. Book

no information about 2 others

通学校／attended school : North Sydney Boys' High School

編入学年／enrolled year : 4th Year

校長／principal : Mr. Tom Mason

帰国時期／date of departure from Australia and arrival to Japan :

1963年3月シドニー発、東京羽田着

Departed from Sydney, March 1963, arrived at Tokyo

現在／today : 米国シカゴ在住／Kikuo Miyamoto lives in Chicago, USA

2. 参考資料集 Reference Materials

資料 - 1

第 370 地区ガバナー発 各クラブ会長宛て留学生募集案内 (昭和 36 年 11 月 28 日)

(小林 RC 濱 謙次 手書きの写しより)

36. 11. 28

国際ロータリー第 370 地区
全ロータリークラブ会長各位

松本 兼二郎

拝 啓

豪州第 275 地区ガバナーから下記内容の留学生提案がありました。

学年始めは明春 1 月末との事ですから、申込は急を要します。申込用紙は 12 部ほど送って来ておりますが、全クラブにお分けするには足りませんので、御申込先着順に折り返しお送りしますから、ご希望の向は大至急速達便を以って御申出下さい。

1. 本提案の対象 高等学校の学生 15 歳 乃至 17 歳
2. 留学期間 12 ヶ月、12 ヶ月の留学期間を終えたら直ちに順路家庭に帰ることを条件とする
3. 給費条件 豪州滞在中の費用はすべて負担する (学費、食費、小遣い、時折の衣服の補充等)
但し、日本から豪州へ至る往復旅費は自弁のこと
4. 本留学生は総数 3 名を対象としている。
5. 此の外健康証明書等を要しますが、詳細は申込書に記載してあります。
6. 前述の通り新学期は 1 月末に始まる由に付、遅くとも 12 月中には申込書が先方に到着しなければ、手続完了が困難だと思いますから御希望の向は大至急御申越下さい。

尚、此の提案をして来た第 275 地区ガバナー Sleath Lowrey はレークプラシッドで殆どすべてのグループディスカッションで小生と同じグループに属し、又帰路桑港から横浜まで同船して非常に親しくしている人です。夫妻とも素人はなれした声楽家です。ご参考までに申し添えます。

敬 具

編者注：松本兼二郎 (まつもと・かねじろう) 氏は第 370 地区 1961-62 年度ガバナー。

1961 年 5 月に米国レークプラシッドでガバナー研修会が開催された。

桑港=サンフランシスコ

資料- 2

第 275 地区青少年交換委員長からの招待状 1961 (昭和 36) 年 12 月 27 日



ROTARY INTERNATIONAL

Service Above Self - He Profits Most Who Serves Best

Telephones:

Office: 43-6572, JF 2017 Private: JA 4021

SLEATH LOWREY
GOVERNOR DISTRICT 275

429 Pacific Highway,
P.O. Box 11,
CROWS NEST, N.S.W.
AUSTRALIA

46 Cronulla Street.
Cronulla, N.S.W.
Australia.
27th. December, 1961.

Mr. Keisuke Hama.
Honmachi 2.
Kobayashi City.
Miyozaki Prefecture.
JAPAN.

Dear Keisuke,

Your application to come to Australia under the Rotary Youth Exchange Project has been received and we are most happy to accept it. You will be very welcome in our country.

May I explain that I have the responsibility of organising the Youth Exchange Project in this Rotary district.

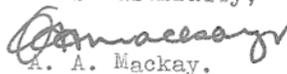
Today, on your behalf, I placed application with the Department of Immigration for your admission to Australia, that Department, will, in turn, advise the Australian Embassy, No. 9 Mita, Tsuna-Machi, Minato-Ku, Tokyo. You should make application to that Embassy for your visa without delay.

Our school year commences on 30th January next, so we would like you to arrive here in Sydney on the 23rd or 24th January if you can. I know that time is rather short. Be sure to advise me of your intended travel arrangements, flight number etc.

As soon as I know which Rotary Club is to act as your host I will write again. I have enclosed a letter guaranteeing your expenses whilst in Australia. You may need this letter when applying for your visa.

With best wishes.

Yours faithfully,


A. A. Mackay.

Enclos.

この招待状には以下のギャランティー証明書が添付されていた (文面のみ転記)。

Dear Mr. Hama

On behalf of District 275 I hereby guarantee the payment of all expenses during your stay in Australia under the Rotary Youth Exchange project, which is limited to twelve

(12) months.

Yours faithfully,
A. A. Mackay, (Signature)
for: Governor. District 275.
Rotary International

資料-3 NSW 州教育省の就学許可証送付の通知 1962年1月11日



ROTARY INTERNATIONAL

Service Above Self - He Profits Most Who Serves Best

Telephones:

Office: 43-6572, JF 2017 Private: JA 4021

SLEATH LOWREY
GOVERNOR DISTRICT 275

429 Pacific Highway,
P.O. Box 11,
CROWS' NEST, N.S.W.
AUSTRALIA
46 Cronulla Street,
Cronulla. N.S.W.
Australia.
11th. January, 1962.

Mr. Keisuke Hama.
Honmachi 2.
Kobayashi City.
Miyozaki Prefecture.
JAPAN.

Dear Keisuke,

Enclosed is an "Authority to Enrol" certificate issued by our Department of Education which authorises your enrolment in a selected high school of matriculation standard.

You may need this certificate when applying for your passport and visa. It is important that you bring this certificate with you when you come to Australia.

I have learned from other students of difficulties in obtaining a passport due to your Exchange Control Laws. District Governor Kanejiro Matsumoto is fully informed of steps taken to overcome these problems. If you meet with difficulty in the matter of your passport and visa please get in touch with Mr. Matsumoto through your sponsor Rotary Club, I am sure he will do all he can to help.

Thank you for your thoughtful expressions on international goodwill which you wrote on your application - I'm sure you will enjoy Australia just as much as we will enjoy meeting you and learning at first hand more about your home Country.

Do excuse this somewhat hasty note - time is short and I have many letters to write to students.

I hope you meet no difficulty in getting away - I am looking forward to early news of your anticipated arrival.

Yours sincerely,

Alan Mackay.
Alan Mackay.

Enclos.

同封された書類の表題は以下のとおりで、内容は 1962 年度の NSW 州立学校に就学することを許可する文書および一般的な就学案内である。

DEPARTMENT OF EDUCATION, NEW SOUTH WALES
INFORMATION FOR THE GUIDANCE of OVERSEAS STUDENTS and AUTHORITY TO ENROLL

資料 - 4

D370 ガバナー マンスリーレター (昭和 37 年 1 月 15 日)

久留米ロータリークラブ会員 宮崎幸一君令嬢洋子さん、豪州留学決定
(Miss Yoko Miyazaki chosen as an Exchange Student to Australia)

R.I.第 282 区奨学生計画に基づく留学生として宮崎洋子さんが決定しました。この留学生提案は、例の盲目のロータリアン、Farquhar 君によってもたらされたものです。

洋子さんは目下渡航手続中ですが、予定通り許可が取れば来る 1 月 17 日羽田発の予定です。

留学期間は 1 ヶ年、その間 Farquhar の家の外に 3 家庭、計 4 家庭に 3 ヶ月ずつ世話になることになっています。

豪州からは、この外 275 区からも提案が来ていますが、この方は大変申込が多く、3 名受け入れの所に既に 8 件の申込を取り次ぎました。撰定はすべて先方に委せてありますので誰が幸運の籤を引き当てるかわかりません。

編者注：12 月末には 8 名に招待状 (資料-2) が届き、渡航手続きに入っていた。

資料-5

在日オーストラリア大使館副領事発、VISA 申請に関する通知 昭和 37 年 1 月 15 日

編者注：Visa 発給を至急申請すること、その付帯条件などが指示されている。



AUSTRALIAN EMBASSY,
TOKYO.

In reply quote No.

Memorandum No.

15th January 1962

Dear Sir,

I believe that your daughter has been nominated by Rotary International to study for 12 months in Australia. The conditions for a visa in such cases include a satisfactory medical examination and production of a police no-record certificate. As these formalities take some time I am sending you the necessary forms so that the processing may begin immediately.

Please take the enclosed form to the Hiroshima Red Cross Hospital, together with a passport-sized photograph of your daughter. The hospital will carry out the necessary examination and forward the results to this Embassy for transmission to Australia. I shall inform you of the result as soon as possible.

Please fill in the attached visa application form and return it to me in due course. I shall write to you at a later date concerning placement of the visa in your daughter's passport.

Yours faithfully,


(R.G. Parker)
Vice Consul

Mr. Minoru Matsuura,
119 Mantoku-chu,
Sasebo,
Nagasaki-ken

資料－6

留学生選考試験期日の通知 昭和37年1月18日

昭和37年1月18日

浜 恵介 殿

日本銀行為替管理局（印）

留学生の選考試験期日の通知について

先般ご申請のありました留学生選考試験が下記により実施されますから通知します。

記

日 時 1月29日（月）前10時0分から

場 所 科学技術庁（文部省ビル5階） 別紙略図

以 上

編者注：「留学生選考試験」の実施主体は日本銀行為替管理局で、文部省科学技術庁がこれを代行した。試験の内容は、英語による口頭試問だけであった。

資料－ 7

留学生の渡豪を伝える新聞記事

毎日新聞福岡県版 昭和 37 年 1 月 23 日

女子高生が豪州へ留学 柳川市

豪州シドニー国際ロータリークラブの招きを受け、柳川市の女子高校生二人が二月九日羽田発のジェット旅客機で留学する。

柳川市ロータリークラブ立花和雄会長（五四）の二女万紗子さん（一八）＝柳川市伝習館高校三年＝と同市城内、竹下鉄工 KK 竹下与三一専務（四二）の長女由美さん＝大牟田市明光女学院三年＝。

話しのおこりは日本ロータリー山口県・九州地区のガバナー松本健次郎氏とシドニーのガバナー、スターズ氏は、かねて親しい間がらで、昨年十一月スターズ・ガバナーから、経費は一切持つから、留学生を寄越さないかと松本ガバナーあてに申し入れがあった。松本ガバナーは地区ロータリヤンに希望者を募り、選考の結果、山口県萩市二人、門司市一人、柳川市二人、長崎県佐世保市二人が、このほど豪州留学生に選ばれた。

豪州滞在は一年間であちらのロータリヤン家庭に三ヵ月ずつ滞在して生活する。立花会長、竹下専務両家では、いま渡航準備に大わらわ、二月四日に柳川を出発する。

編者注：人名の誤記、留学生の出身地不備など原文のまま。

同・宮崎県版 昭和 37 年 1 月

学業も最優秀 豪州へ留学する浜君

ロータリークラブの推薦でオーストラリアのシドニーに留学することになった小林高校普通科二年浜恵介君は（17）＝写真＝は同校でも最優秀の学業成績で生徒会委員長をやっている。身長 1 尺 80 ㌢、初の留学生を出した荣誉に学校側も喜び、先生たちも浜君の渡航書類づくりの諸準備に大わらわとなっている。留学期間は 1 年間で現地の習慣、風俗、歴史などを十分勉強、日本の紹介もしたいと浜君は渡航を前に若い胸をたぎらせている。実家は元日立金属工業宮崎工場長をしていた実父（59）が小林市本町に日立製品の販売を営み恵介君は二男で四人兄弟の末っ子。

資料 - 8

D370 ガバナー マンスリーレター (昭和 37 年 2 月 15 日)

R. I. 第 275 区 (豪州) 留学交換学生
Exchange Students invited by District 275

豪州の R.I. 第 275 区から交換留学生の提案があったことに就いては、既に各クラブ宛書信によって御通知申し上げましたが、これに関する中間報告を左に記します。

この提案は既報の通り、ゆくゆくは相互に留学生 (男女高校在生) を交換したい計画だそうですが、差し当りは日本より豪州へ招く、所謂「片道交換学生」の提案です。

最初の提案は 3 名受け入れと云うことであつたにも拘らず、当方より申込みの 10 名に対し 8 名受け入れを承諾して参りました。(残りの 2 名は、申込みが遅れたために、詮衡の対象にされなかったものと想像されます) これは非常な好意と申さねばなりません。

ところが残念なことには、この提案が往復旅費だけは自弁という、所謂「part guaranty」である為に、渡航許可がなかなか面倒なのです。結局外務省が行なう留学生試験に合格しなければ、渡航許可が貰えないと云うことになり、候補者は 1 月 29 日東京で行われる試験を受けることになりました。(もっともこの中、立花、竹下、前田、松浦の四嬢だけは、オールギャランティーが取れたので受験の必要が無くなったと云う報告がありました。) 全員滞りなく難関を突破して、275 地区の好意に答えることが出来ますよう祈っている次第です。(このガバナー月報がお手許に届く頃は既に最終結果が分っている筈です)

左に最終候補者の名前と推薦クラブ名を記します。(申込書受付順)

立花万紗子	柳川ロータリークラブ
竹下 由美	〃
宮本喜久男	萩
中村 数代	〃
前田 裕子	佐世保
松浦 尚子	〃
小島 敏子	門司
浜 恵介	小林

資料-9

門司ロータリークラブ会報 (昭和 37 年 2 月)

松本ガバナー講演記録



門司ロータリークラブ

事務所 門司市錦町3番地の2
門司商工会議所内
例会場 門司市元清滝町1丁目
門司倶楽部
例会日 毎週水曜日 12.30~13.30
印刷所 合資会社 渡辺印刷所

VoL. 7 No. 1, 2 Jan., Feb. 1962



無
関
心
は
罪
惡
々
各
人
が
責
任
を
果
せ
々

松本ガバナーの講演
(門司ロータリークラブにて
昭和 37 年 2 月 18 日)

松本ガバナーの講演

37. 2. 18—門司 R. C. で

最初に小島さん（豪州留学生）へ一言申し上げます。275区のカバナーは若く夫婦ともに声楽家で船中の仮装舞踏会に優勝した程の方で、非常に気さくな人です。お父様も御心置きなく送り出してよいと存じます。

2月23日はR. I. 第57回目の創立記念日を迎えますが、この長い歴史の内にロータリーは少しづつ変貌しています。最初シカゴでポールハリス外3人の友一職業の違う4人が週に1度各家庭を交互に回りお互に職業知識を深めておりました。その後自分達の知識や親睦を深めるだけではものたりなくなり、人数を増し自分達の住んでいる町のために奉仕をしたらと誰からともなく話で、これが現在の奉仕団体としてのロータリーにまで発達したのです。それが今日ではさらに国際ロータリーの名の示す如く（最初は国際ロータリーとはいいませんでした。最近特に国際という字が大寫しになってきたようです。）エービー会長もたびたび世界中のロータリアンに色々な手段を通じて呼びかけていますが、特に強調していますのは国際奉仕の精神でした。水爆、原爆、宇宙開発等の国際競争で

世界が再び戦乱のさなかに巻込まれる危険が少くないという現状がエービー会長の国際奉仕の面を特に「ロータリーとして力を入れねばならない」という結論に到達した結果だと思います。しかしながら国際奉仕といってもロータリーの国際奉仕と政治家のそれとは違うのです。

ロータリーは1人1人のロータリーのロータリアンの力によって表れ現在世界中に1万1千以上のロータリークラブがあり、会員総数も51万を多分越えたのですが、この数の力でRの力を発揮しよう。そして「特に国際奉仕の面にロータリーの力を発揮しようではないか」とエービー会長が呼びかけているのであります。従って51万有余というロータリアンの力はただ数がそこにあるというだけでは力にならない。51万のロータリアンが1人1人自分の任務を果してこそ初めてその集積が力になるのです。従って51万のロータリアンの中に1人でも傍観者の態度があってはならないと思います。ポール・ハリスのいった有名な言葉に「無関心は進歩の敵だ」という言葉がありますが、我々は無関心であってはならない。「特にロータリアンは無関心であってはならない」と57年もの昔ポール・ハリスはいったのです。そしてそ

の精神は今もなお連綿として受継がれ多分これからも永久にロータリアンの中に生きていく事と思えます。無関心であってはならない。1人1人が積極的に実践しなければならない。エービー会長は年度目標に「行動に努めよ」を第一に掲げ次に「理解に道を求めよ」、「指導力を高めよ」これらを含めて行動ということ今年を今年努力目標として掲げているのも決して由なきにあらずと思えます。

私は東京大会の時、ある1つの小さな出来ごとにつづったのですが、出来ごとというより具体的にいいますと、東京大会第4日目の国際親善会議のことでその時私は偶々アジア部会のパネルメンバーを仰せつかりました。パネルメンバーの人々の話が終ってこれから質問に入りますという会長の声に応じて立ち上がったのが、豪州から来た1人の盲目のロータリアンであります。丁度小島さんの行かれる留学生組織と同様留学生を1年間ロータリアンの家庭で3カ月づつ置く点等も殆んどあらゆる点が同じであります。この留学生制度を設けたのもこの人でありまして、この人の名はファーカーといいロータリアン誌に「理解は家庭から始まる」という記事を寄稿しています。これは豪州で知り合った1人の日本人に関してであります。質問ではありませんが国際親善に関係あると思えますので、もしお許しが頂ければ話し度いと申し出て話



しました。その話というのはこうです。

私は3月号のロータリアン誌に寄稿しましたように1人の日本を知っています。この人は非常に親切な方です。私は豪州の生れで第二次世界大戦中にアメリカの空軍に志願し、当時日本が占領していたラバウルにいました。その時日本軍の放った砲弾によって目をやられそれ以来両眼とも失明してしまいました。し

かし、私は日本人を恨んではいません。というのは戦争は政府と政府の争いであって お互い1人1人の間には憎しみはないと思うのです。今度東京へ参りましたのも 東京大会に出席したいという目的のほかに、私の曾って知っている日本人の国は どんな国であろうか、その同胞達はどんな人であるかを知りたかったからであり、東京へ参りましてからも街頭や乗物の中やホテルで毎日のように日本人の親切を受けました。そして大会の第1日目で 私は日本人の非常な親切に接しました。それは丁度天皇、皇后両陛下の行幸啓になる日のことでした。私は幸にも席があり座っていました。私の隣りに1人の若い日本女性が座っていました。一 後で分ったのですが、その人は福島県の白川クラブの2、3年前の会長大木さんの娘さんで 東京の大学で学んでおられ 御両親とともにこの大会に参加されたわけですよ — その隣りの女性が 暫くして私が両眼とも見えないことを知り不具者に対する親切心から 色々私の身の廻りの世話をしてくるようになりました。(東京大会に御出席の方は御存じと思いますが、英語と日本語との間に 同時通訳をやっている、これを場内のみで放送しました。従って携帯ラジオを持っておれば 同時通訳を聞くことができたわけですよ) 私がラジオを持ってないことに気付くと若い女性は彼女のラジオのダイヤルを日本語から英語に切変えイヤホーンを私の耳にあてがってくれました。お蔭で私は日本語は一言もわからないのに 日本人と同様すべての日本語を知ることができました。また日本人のするようにすることができました。その女性は「今両陛下が会場の入口に姿をお見せになられましたので立ちましょ、う」といって腕をとって立たせてくれました。そして「あなたは「君が代」を御存じないでしょうか、もしできるなら私についてお歌いなさい」といって私の耳に口を寄せて歌ってくれました。御蔭で私はまがりなりにも「君が代」を歌うことができました。このように終始私について些細ではありますが 愛情ある親切な行為を示してくれました。私は些細な行為ではあるが、国際親善の根本になるのは こういう人の善意だと思しますので敢えてお話しいたしました。

私はこの話を聞き大変感動致しました。また多分私と同様感銘を受けた人も少なくないでしょう。そしてその人々は私が数10回もこの話をしていると同様に近隣の人、知人等に話したことでしょ。ファーカ自身もこの話を祖国に帰って人に伝えたことと思います。現に私はファーカと今もなお文通をしています、

ラジオ、テレビに数回でたと書いてありました。この影響を考えて見ますと こんな極めて些細な行為ではあるが 世界中の人に訴えるものは大きいのではなからうか、しかも仮に51万のロータリアンが1人残らず形を変えた行動によって こういう善意を世界中にまき散らすならば、世界中の有力な政治家によるより世界平和への大巾な歩みが51万のロータリアンによってあるいはなし得るのでは……少くとも政治家の数倍もの仕事ができ得るのではなからうかと思うのであります。シュバイツァー博士が「我々は良き人、良き夫、良き父であるだけでは十分ではない。社会人としての我々は 何か社会の為、世の為、人の為に有益なことをなし得ねば良き社会人とはいいい難い」。51万人のロータリアンは 幸いにも大きな組織を持っています。



私どもロータリアンは所謂ロータリー活動を遂行することによってそれがとりもなおさず世のため、人のために寄与することになるのであります。これ程幸せな立場はないと思います。どうぞ、この上ともロータリーの理想推進に御尽力下さいませようお願い申し上げます。

編者注：講演冒頭にあるように、この例会には留学することになった小島敏子さんと父君が学校長とともに招かれている。なお講演の実施日は1月18日で、会報に記された日付2月18日は誤り。

資料-10 QANTAS 極東線時刻表 (1962年2月1日～)

編者注：時刻表にあるとおり、シドニー便は週3往復。香港、マニラ、ダーウィン経由で時間は約16時間半を要した。東京・シドニー間の片道航空運賃(エコノミークラス)は453.60米ドルであることが料金表に記されている。なお、帰路(1963年1~2月にはダーウィン経由が廃され、朝シドニー発、同日の夜東京着で運行されていた、とのことである。



FAR EAST ROUTE

First and Economy Class

AUSTRALIA to HONG KONG and JAPAN

SYMBOLS :

☉ Boeing 707.

★★ Super Constellation.

+ or -- on G.M.T.	NORTHBOUND READ DOWN All times local	Tue.	Thu.	Thu.	Sun.
		QF274 F/Y ☉	QF230 F/Y★★	QF274 F/Y ☉	QF274 F/Y ☉
+10	SYDNEY dep.	2200 (S)	1200 M	2100 (S)	2200 (S)
+10	PORT MORESBY dep.		1900 2000 M		
+9½	DARWIN arr. dep.	Wed. 0140 0225		Fri. 0140 0225	Mon. 0140 0225
+8	MANILA arr. dep.	0500 0550	Fri. 0400	0500 0550	0500 0550
+8	HONG KONG arr. dep.	M 0735 0845		M 0735 0845	M 0735 0845
+9	TOKYO arr.	M 1305		M 1305	M 1305

JAPAN and HONG KONG to AUSTRALIA

+ or -- on G.M.T.	SOUTHBOUND READ DOWN All times local	Mon.	Wed.	Fri.	Fri.
		QF275 F/Y ☉	QF275 F/Y ☉	QF275 F/Y ☉	QF231 F/Y★★
+9	TOKYO dep.	1700	1700	1700	
+8	HONG KONG arr.	M 2025	M 2025	M 2025	
+8	MANILA arr. dep.	2110 (S) 2255 2340	2110 (S) 2255 2340	2110 (S) 2255 2340	2359
+9½	DARWIN arr. dep.	Tue. 0520 0605	Thu. 0520 0605	Sat. 0520 0605	
+10	PORT MORESBY arr. dep.	M	M	M	M 1200 1300
+10	SYDNEY arr.	1025	1025	1025	M 1945

Meal Schedule : ☒ Main Meal. (S) Supper.

Sleeper Chairs : Full length Sleeper Chairs are provided for all First Class passengers on QANTAS Far East Super Constellation Services.

Traffic Rights : SYDNEY-PORT MORESBY or v.v., SYDNEY-DARWIN or v.v. Local traffic not permitted.
HONG KONG-MANILA or v.v. Local traffic not permitted; however, passengers may be uplifted at Manila for discharge at Hong Kong or vice versa provided they have travelled or are ticketed to travel between Manila and Australia/New Guinea by QANTAS.
HONG KONG-TOKYO or v.v. All traffic may be carried whose documentation includes through air travel additional to Hong Kong-Japan and vice versa.

資料-11 シドニーへの無事到着を知らせる電報 1962年2月11日



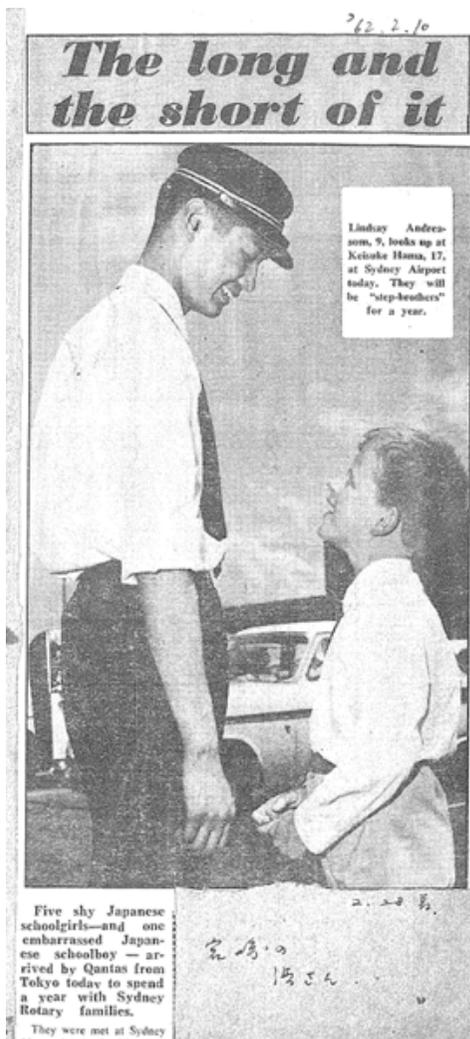
本文：
TOSHIKA ARRIVED SAFELY STOP WELL
AND HAPPY KIND REGARDS JARRATT

資料-12 日本からの留学生到着を伝える新聞記事 1962年2月



NAOKO MATSURA, 17 today, and YUKO MAEDA, 18—two of six Japanese teenagers who arrived in Sydney yesterday to spend a year in the homes of Rotary International club members.

松浦・前田



Five shy Japanese schoolgirls—and one embarrassed Japanese schoolboy — arrived by Qantas from Tokyo today to spend a year with Sydney Rotary families.

They were met at Sydney

濱

JAPANESE GIRL HERE TO STUDY

An 18-year-old Japanese girl arrived in Australia this week to begin a twelve months' study course at MacArthur Girls' High School in Parramatta.

Rotary-sponsored

She is Yuko Maeda, from Sasebo Nagasaki Prefecture, and is one of eight Japanese children of high school age brought to Australia under the auspices of Rotary International.

While she is studying at MacArthur Girls' School, Yuko will live in the North Parramatta home of Rotarian Charles Robinson and family.

Mr. Robinson's three children, Janette, 17; Judith, 15; and Marsh, 9; have already become firm friends with their Oriental "sister."

Yuko, who speaks little English, but understands it perfectly, has enthralled the Robinson family with her display of traditional Japanese costumes and dances.

A high school graduate in Japan, Yuko was attending Seiwa Girls' High School which is run by an Australian order of missionary Nuns.

Yuko is intensely interested in English literature, history and music.

Picture at left shows Yuko playing the piano for her host's children, and at right, she poses in a colourful national costume.



前田



小島

She's eager to learn



JAPANESE GIRL ROTARY GUEST

An eager-faced Japanese girl who flew in to Mascot on Saturday morning has already decided that Australia is "just fine."

With blue-black hair and some English to her credit, 17-year-old Toshika Kojima, of Moji, Japan, is excited and "happy" about her 12-month visit to Australia.

But she can't get over the amount of "space" here.

"In Japan we only have such a small island with many houses — here space all around and houses only few," she said with a smile (looking up her Japanese dictionary for "few").

This week Toshika will be enrolled as a pupil of Corrimal High School.

In Japan, she attends the North High School at Moji — one of the oldest sea ports in Japan — and has one more year to do when she goes back home.

Toshika is staying with Mr and Mrs Lew Jarratt in their modern home in Powell Ave, Corrimal.

She is one of five Japanese high school students who have been brought to Australia by Rotary District 275 to help promote international understanding and peace between the two nations.

All the students will be guests of Rotary Clubs and will stay in the homes of Rotary members.

Toshika is the only student to come to the Greater Wollongong area.

She will stay with Mr and Mrs Jarratt, who have two teenage daughters, for about two months, and will then go to the home of another Corrimal Rotarian.

Judging by her happy expression and her eagerness to learn, it won't be long before Toshika fits easily into the pattern of Australian living.

Already she has sampled an Australian bush picnic, an informal afternoon with friends of her own age, featuring a buffet-style tea, and her first church service.

Yesterday afternoon Toshika met a group of teenagers who will be her schoolmates at Corrimal High.

She was dressed in a Western-style dress of deep blue with a white collar and a pair of pointed-toe flaties.

Toshika has three brothers — two of whom are married, and 14-year-old Eitaro.

"I have a niece — she's three and called Naoko," she added proudly.

PICTURE: Toshika "wipes up" yesterday for Mrs Margaret Jarratt in the kitchen of her Corrimal home.

資料 - 13

District 275 Conference 1962 (地区年次大会 1962年2月21日付招待状)



ROTARY INTERNATIONAL

Service Above Self - He Profits Most Who Serves Best

Telephones:

Office: 43-6572, JF 2017 Private: JA 4021

SLEATH LOWREY
GOVERNOR DISTRICT 275

429 Pacific Highway,
P.O. Box 11,
CROWS NEST, N.S.W.
AUSTRALIA

21st February, 1962.

53 9747
KEISUKE / 7
Mr. Kikuo Miyamoto,
C/- W.C. Steanes Esq., 90 6693
8 MacPherson St.,
CREMORNE.

Dear Kikuo :

This letter is to invite you to be a guest at our Conference to be held on 5th and 6th March at the Australian Jockey Club's pavilion, Randwick.

We will be happy to have you throughout the Conference of course, but particularly on Tuesday afternoon at 4 p.m. when we plan to have you on the stage in your National costume. (if you have one with you) with the other young people, under the chairmanship of Past President Alan Mackay, who will introduce you all and then President Leon Becker will conduct an interview.

We are very proud to have 9 young people - 8 from Japan and 1 from India - and we would like you to come in contact with as many people as possible.

The Conference terminates at 5.30 p.m. and after a buffet tea we are having a theatre party. Again we would like you to be our guest for the buffet tea and the theatre party.

With kindest regards.

Yours sincerely,

Sleath Lowrey
Governor, District 275

編者注：275地区年次大会の開催日は3月5～6日。我々留学生は、6日の午後のセッションに招待され、「もしお持ちならば、National costumeで登壇を」との要請があった。
なお、この招待状は宮本喜久男君宛てで、封筒の入れ間違いか、濱に郵送されたもの。

District 275 Conference 1962 (1962年3月5・6日開催、大会資料より)



SLEATH LOWREY
Governor, District 275,
Rotary International,

Sleath Lowrey is a Senior Active member of the Rotary Club of North Sydney. He has been a member of that Club since 1942. He served as President during the year 1950-51.

He has been general Manager of "O. J. Williams" of Crows Nest, for the past 19 years prior to which he was with the English Scottish & Australian Bank Ltd. for 18 years.

He was born in Failford, N.S.W.

He has served as a Councillor of the Sydney Suburban Shop Keepers Association for 16 years and as President for 2 years. He was a member of the Conciliation Committee of the Shop Assistants Metropolitan Award for 10 years and for 6 years he was President of the Crows Nest Chamber of Commerce.

He is a Past Chairman of the Board of Roseville Girls' College.

A MESSAGE FROM THE DISTRICT GOVERNOR

"He who would serve must ACT"

A warm welcome to all Rotarians and their ladies to our Annual District Conference. We are proud to have His Excellency, The Governor of New South Wales, Lieutenant-General Sir Eric Woodward, K.C.M.G., C.B., C.B.E., D.S.O., to officially open our Conference. His Excellency's generous patronage to Rotary in our District is gratefully acknowledged.

The President of Rotary International, Joseph A. Abey, has honoured us by appointing as his personal representative, Dr. Theodore H. Wilson, Third Vice-President of Rotary International and Chairman of the Executive Committee of the Board of Rotary International. We are delighted to have Vice-President Ted and his wife Helen with us and we give them a sincere welcome to our District.

We are appreciative of the presence at our Conference of the First Vice-President of Rotary International, Douglas Stewart, and his wife Elvie. We are proud of the further honour that Doug's high appointment brings to our District.

As we gather for the last Conference of our old 275th District, I cannot but recall many happy memories of Conferences over the last 20 years. Of course, the title of the District has twice been changed and, of greater significance, the area has twice been changed, but the spirit has not changed, and I feel confident that from the 1st July next, when yet another change takes place and we become two Districts, the spirit of Rotary will be as strong as ever; for the smaller number of Clubs will give the District Governor a greater opportunity to keep in closer touch with his officers, with a corresponding increase in efficiency.

However, whatever the title of the District might be, we are inspired with enthusiasm on the occasion of the District Conference, whether it is the fellowship, meeting many old friends again, or capturing the spark of reedication, or getting agitated about some new angle of approach or critical of some of the old ideas. Conferences do have the effect of kindling the spark of Rotary in many Rotarians, who hitherto had not caught the real spirit of the movement.

I hope that this Conference will stimulate the thinking of EVERY individual Rotarian present, not only that many problems may be explored in depth, but above all that each one will be inspired to really exemplify his Rotary membership with sincere and purposeful Rotary ACTION.

275 地区ガバナー、スリース・ラウリーの肖像・略歴とメッセージ

プログラムの一部、青少年交換プロジェクト (YEP) として留学生 9 名が紹介された。

Vive le Rotary!

Chorus

Vive le, Vive le, Rotary!
Vive le, Vive le, Rotary!
Truth is our right,
Love is our might,
Vive le Rotary!
The grooming of man is a duty we claim.
Vive le Rotary!
Let's carry on business with fame to our name.
Vive le Rotary!

The man with a smile, is the fellow we need.
Vive le Rotary!
Who loses himself in the shaming of greed.
Vive le Rotary!

Chorus

2.10 SEVENTH PLENARY SESSION
"Rotarians Are Expected To Be Leaders In Their Vocations."
An Address—"Leadership", by Sir Charles Moses, C.B.E., General Manager, Australian Broadcasting Commission.

2.40 Consideration of Resolutions.

2.50 Introduction of District Governor Nominee, District 275, 1962/63, Harry Arthy, of Rotary Club of Sydney.
Introduction of District Governor Nominee, District 268, 1962/63, Ed. Hill, of Rotary Club of Blackheath.

3.05 EIGHTH PLENARY SESSION
"International House."

4.15 Our Youth Exchange Project (Y.E.P.)
Chairman: Past President Alan Mackay, Rotary Club of Cronulla.
Leon Becker, President Rotary Club of Warringah, will interview our Teenage Guests—

Miss Rita Bhandari	Calcutta	India
Miss Toshiko Kojima	Moji-shi	Japan
Miss Yuko Moeda	Sasebo	Japan
Miss Naoko Matsura	Sasebo	Japan
Miss Kazuyo Nakamura	Hagi City	Japan
Miss Masako Tachibana	Yanagawa	Japan
Miss Yoshimi Takeshita	Yanagawa	Japan
Mr. Kikuo Miyamoto	Hagi City	Japan
Mr. Keisuke Hama	Kobayashi	Japan

4.55 Conference Announcements and Report of Registrations by Conference Secretary, Lionel Manches.

5.00 Final Message from Dr. Theodore H. Wilson, The Personal Representative of the President of Rotary International.

5.20 Closing Address by District Governor Sleath Lowrey.

5.30 Conference Adjourns for Fellowship.

TUESDAY EVENING

6.00— 7.30 Buffet.

8.00 Theatre Party—Theatre Royal—"Oliver".

275 区招待の高校生留学生豪州に安着

High School Students Invited by District 275 Arrived in Sydney.

前号でお知らせした 8 人の高校生の中、先発の 6 人即ち先の人達が 2 月 10 日シドニー空港に安着したとの報せが、275 区ガバナー、スリース・ラウリー君から参りました。

門 司	小島 敏子
佐世保	前田 裕子
同	松浦 尚子
柳 川	立花万紗子
同	竹下 由美
小 林	浜 恵介

そして、「シドニー空港で之等 6 人の若人達を迎えた時の感激は口に云い現わせな
いほど大きかった」と述べています。

残りの二人、即ち宮本喜久男君と中村数代さんも、2 月 19 日無事到着した筈です。
(ラウリー君の手紙は 2 月 12 日附でした)

そして、ラウリー君の手紙は、「兼君、吾々二人の友情の知遇が、この両地区の間
のこの企画の実現を齎したことを実に嬉しく思う。そして更に、これが国際親善と理
解の巨大な増進の結果にまで導かれむことを記念する」と結んでおります。

後記: ラウリー君の手紙を追っかけるようにして、同地区、交換学生委員長アラン・
マッカー君から来信、残りの二人も元気で到着の旨を報じて来ました。長崎、諫早、
日南の各クラブから推薦された三名の学生は、申込書が銚衡委員会に間に合わなかつ
た為に、取り上げることが出来なかったことを大変残念に思うと附記してありました。

編者注: 齎 (もたら) した

豪州との高等学校生徒交換計画について

High School Students Exchange Program with Australia

御承知のように、本年度は当地区から 282 区に一人、275 区に八人（共に豪州）高等学校学生の留学生を派遣致しました。

282 区の方は、例の盲目のローアリアン、ファークアー氏の斡旋によって創始された計画で、今のところ先方から日本へ同じように高校生の留学生を出したいと云う計画はないようです。ところが 275 区の方は、将来は相互に留学生を交換する計画にまで発展させたいと考えております。毎年双方から相手国に何人かの留学生を出すか、或いは今年こちらからむこうへ留学生を送れば、次の年は先方からこちらへ留学生を迎えると云うふうに、隔年交互式に行くか等の詳細は、今後の話合いに待たなければなりません、むこうの世話になる一方であってはならないと思います。

むこうの高等学校学生をこちらに迎えるに就いては、いろいろの条件が必要になって参りましょうが、細かい事は別にして、基本的のことを二、三次に記しますので、各会員洩れなく御考慮を頂きたいと思います。

まず第一は、こちらに、むこうの学生が来た場合これを受け入れて呉れる高等学校を見つけることです。そしてその受入確約を取り付けることです。勿論、その学校が十分資格条件を備えていることが必要であることは申すまでもありません。

第二には、この留学生はロータリアンの家庭に置いて貰ってそこから学校に通う立前になっていますので、進んで置いてやろうと云うロータリアンが必要です。豪州側では、各学生に対し夫々異なったロータリークラブをスポンサークラブとして割り当て、そのクラブの会員の家庭に一ヶ所三ヶ月ずつ世話になる仕組みです。日本側でも必ず奏しななければならないと云う訳ではありませんが、この方法は良い方法だと思いますので、こちらでもこの方法を採用したらいいのではないかと思います。留学期間中（一ヶ年です）同じ家庭に世話になるより、四つの異なった家庭生活を経験する方が、見聞も広まると云うものでしょう。そこで、この方法を採用することになると、受入留学生一人について、これを自分の家庭に置いてやろうと云う有志ロータリアンが四人必要な訳です。この場合、そのロータリアンやその奥さんが英語が出来ると云う必要は必ずしもありませんが、同じ位の年輩の子女があることは極めて望ましいと思います。否、その必要があると云った方がいいかもしれません。それでこそ初めて青少年による国際親善が本当に達成出来ると思います。同年輩の子女が居れば、それによって言葉の不自由もカバーして余りあると思いますし、又お互いに日本語と英語の上達も早くなると思います。

出来れば明年四月の高校新学期には、275 区からの留学生を受け入れる態勢を整えたいと思います。

上述の第一、第二の問題、即ち受入可能の学校を見つけることと、三ヵ月間喜んで豪州からの留学高校生を家庭に置いてやろうと云うロータリアンを見つけること（一つのクラブで四人必要です）を、各クラブとも会長の責任でご尽力頂きたいと思えます。特に平素国際奉仕の機会に恵まれていないと歎いているクラブに取っては好箇の機会ですから、進んで御協力を戴きたいと思えます。

豪州では二月又は三月始めから新学期が始まりますから、こちらの受け入れ態勢がきまったら、遅くとも十月中には先方にこちらの提案を申し送らなければなりません。その為には申込書や添付書類の明細を研究したり、諸印刷物を拵らえたり、種々の準備が必要なので七月頃から準備に入らなければなりません。就ては、前述の学校及び会員家庭の受入態勢が整ったクラブは、そのクラブ会長から、来る七月十五日迄に私の所に御申出で頂きたいと思えます。その頃は既に私のガバナーとしての任期は終了しておりますが、ガバナー事務所は、残務の関係で七月二十日頃まで存置する予定ですから、現在のガバナー事務所宛で結構です。

資料 - 17

Annual Rotary Ball (ロータリー舞踏会、5月4日開催) 招待状



275th District

ROTARY CLUB OF PARRAMATTA

N.S.W., AUSTRALIA

P.O. BOX 172, PARRAMATTA

PRESIDENT:

L. J. (LES) GENNER
70 MACQUARIE STREET
PARRAMATTA
TELEPHONE:
BUSINESS: PRIVATE:
YL 9027 YY 3989

HON SECRETARY:

B. S. (BRUCE) SMITH
P.O. Box 172
PARRAMATTA.
TELEPHONE:
BUSINESS: PRIVATE:
YL 9564 YY 3179

27th April, 1962.

Mr. Keisuya Hama,
C/- Ron Hayes,
35 The Mall,
SOUTH HURSTVILLE.

Dear Mr. Hama,

On behalf of District Governor, Sleath Lowrey, and his Committee I have much pleasure in inviting you to be our guest at the Annual Rotary Ball to be held in the Trocadero, George Street, Sydney, commencing at 8.30 p.m., Friday 4th May, 1962.

During the function it will be our pleasure to present you to Sir John Northcott, K.C.M.G., K.C.V.O., C.B., who until recently was Governor of this State.

We look forward to sharing an enjoyable evening with you.

Yours faithfully,



E.J. GENNER.
MEMBER OF COMMITTEE

編者注：舞踏会の途中、参加したロータリー交換留学生は、前 NSW 州総督 Sir John Northcott に一人ひとり拝謁した。

ノースコット卿は軍人で、第一次・第二次世界大戦に従軍し、1945-46年に英連邦占領軍(B.C.O.F.)の司令官として日本に駐留。1946年から57年までN.S.W.州総督に任ぜられ、オーストラリア生まれ最初の総督、かつ最も長期わたる総督の一人として敬愛を集めた。

出典：<http://adb.anu.edu.au/biography/northcott-sir-john-11257>

SOUTH COAST TIMES, MONDAY, JUNE 18, 1962

TOSHIKO AND FRIENDS SANG AT CONCERT



A Japanese girl who has "adapted herself wonderfully to Australian school life," according to her headmaster, Mr. R. Caldwell, appeared with two Japanese friends at Corrimal High School's Annual Concert, on Saturday night.

コリマル・ハイスクールの音楽祭にて 立花、小島、前田

The girls are all members of a Rotary scheme to bring Japanese students to study at Australian schools.

Toshiko Kojima, the Corrimal student, invited her friends, Yuko Maeda, of Nagasaki (a Parramatta High School student) and Masaki Tachibana, of Fukuoka (who attends Hunter's Hill school) to appear with her at the concert.

The girls wore flowered kimonos, bright brocade obis and charming smiles.

They sang Japanese folk songs about cherry blossoms and an old castle, as well as a Russian folk song, and thought it all part of the wonderful time they're having in Australia.

Toshiko is living with her third local family, Mr and Mrs. S. Hall, of Corrimal.

She has found people "very kind" and she loves the "very big" view the Australian landscape presents.

The girls hope to take home what they call 'good Australian customs,' mainly concerning husbands.

They are absolutely in agreement about this.

They say: "The husband works very much. This very nice."

Pretty Yuko finds Australian "boys very kind."

Toshiko also loves Australian barbecues. She hopes to take the custom home, along with some poinsettias to plant in the family garden.

The girls found their school life in Japan much harder and stricter, with bigger classes than they now attend and they are amazed at the friendly relations that exist between students and teachers.

They all "like everything" about Australia.

A total of six students involved in the Rotary scheme will be returning to Japan in January.

○豪州との高等学校生徒交換計画について High School Students Exchange Program with Australia

前号でご報告しましたのち、中津 RC と久留米 RC から各々 1 人の豪州第 275 地区の高校生をひきうけたいとお申し出がありました。これに柳井 RC、宇部 RC、熊本 RC の 3 クラブを加え、5 クラブがそれぞれ 1 人の高校生を預かってくださることになりました。上記 5RC に対し厚くお礼を申し上げます。

次に松本前ガバナーから下のようなお手紙を戴きました。

「次の如き内容の手紙が小生宛てに來ましたので、「進藤ガバナーと地区青少年交換委員長に移牒する」旨返事しておくつもりです。

発信人 R. K. Senior, International Service chairman, Rotary club of Sale, Victoria,
Australia

書信内容概略

「ローズバッド・ロータリー・クラブのドン・ファーカーからのリコメンデーション（紹介）によって貴殿に手紙を書く。日本の印象並びに宮崎洋子嬢の事は同君から詳しく聞いた。自分のクラブでも同様の企画を実現したいと思う。セールスの町はメルボルンの当方 130 哩にある人口 7 千の町です。

日本から 16 または 17 才の女子学生を 1 名、明年の 2 月から招きたい。条件はドンから聞いた通りをそのまま踏襲する。即ち

- (一) 2 月から 12 月までセール・クラブが世話して高等学校に通わせる。
- (二) 日本豪州間の往復旅費は留学生の両親が負担する。
- (三) 当地では当クラブの会員 6 人が寄寓させる。(各々 2 ヶ月ずつ)
- (四) セール・ロータリークラブは留学生滞在中書籍を含む一般費用を負担する。以上

就いては以上の条件で希望クラブを募って頂ければ幸いです。去年の経験から、次の諸点をご参考に供します。

- (一) 往復旅費はおおよそ幾何かを調べて募集要領の参考資料として掲げること。
- (二) 応募は必ずクラブを経由すること。(そしてクラブが万事責任を持つこと)
- (三) 往復旅費が自弁であるため、渡航許可に制約がある。即ち外務省の留学生試験にパスすることが条件になる。(最近は外貨事情が悪いので昨年より厳しいのではないかと懸念する) この試験は大してむずかしいものではないが(英語だけと聞いているし、その英語もかなり程度は低いらしい) 何ヶ月に 1 度しか行われないから出来るだけ早くアプライ(出願)する必要があるし、出来れば中牟田委員長の手で試験期日を調べておいて頂くと、すべてがスムーズに運ぶのに役立つと思う。

以上が松本パスト・ガバナーのお手紙の要旨です。豪州行きの旅費については、私は直接調べる暇がありませんでしたが、日本ロータリー・グループの旅費について、東京 RC の青少年交換委員長・矢野一郎氏が調べられたところでは、大阪商船の定期航路によると、船賃片道神戸・シドニー間 112,899 円、往復 214,502 円ほどとなっています。（私の月報の 9 月 15 日号参照）シドニーから目的地のセールまで船か飛行機で行かねばなりません。これで大体の見当はおつきでせう。

そこで当地区内のロータリアンで、16 または 17 才の女子学生のお嬢さんを、セールの町に留学させたいご希望がございましたら、至急私なり、中牟田喜一郎君（当地区青少年交換委員長・福岡 RC 所属）なりへ、お申し出ください。希望者が多い場合の選考方法については、当方にお任せください。

追記 私の調べたところでは、東京～メルボルン間の飛行料金は 474 ドル（約 170,000 円）です。

資料-20
在学・成績等証明書

1962年12月13日
濱 惠介



HURSTVILLE BOYS' HIGH SCHOOL
FOREST ROAD, HURSTVILLE
13th. December, 1962.

PHONE: LW 3943

TO WHOM IT MAY CONCERN

Keisuke Hama has attended this school since 22nd. February, 1962.

It has been a pleasure to have had him with us.

His demeanour, attendance and co-operation have been excellent.

As a student he has improved his English considerably and topped the Science Honours group.

In gaining 1st. place in Technical Drawing, this student has completed four years work in nine months.

Again he came first in Maths. 1. and Maths.11 - a fine record!

In his final speech, made to an audience of almost 1,000, Keisuke gave a message of goodwill and peace and made a plea for international understanding.

We wish him well.

Ross D. Thomas
ROSS D. THOMAS.
Headmaster.

1962年12月14日
小島 敏子



Si 6341

HIGH SCHOOL
Corrimal, N.S.W.
14th December 1962

REFERENCE: Toshiko Kojima.

This is to certify that
TOSHIKO KOJIMA
has attended the Corrimal High School during the year 1962.
She has studied English, Biology, Art, Home Economics, History, and Mathematics III.

She has shown great interest in her life among Australian students, and has been very popular with them.

Her conduct at the school has been excellent. Her manner is polite and correct at all times.

At the recent school Speech Night, Toshiko made a speech of thanks, in farewell to her Australian friends.

We wish her every happiness in the future.

L. Caldwell
Principal.

○豪州から高校生が来ます

A Young Lad is Coming from Australia to Kumamoto

かねて待望していました豪州からの高校生招待が実現します。豪州の第 268 区の国際青少年交換委員長のロビンソン君 (C. L. Robinson) は当方の要請に応じて、日本に 1 年間留学を希望する高校生を見つけることに非常な尽力をしてくださった結果、ケニス・ノーマン・エンジェル (Kenneth Norman Angel) という 16 才の少年を推薦してきました。私はさっそく当地区の国際青少年交換委員長中牟田喜一郎君 (福岡 RC) と相談の結果、喜んでこの推薦をうけいれ、エンジェル君をむこう 1 年間熊本 RC にお世話願うこととし、熊本市の九州学院高校の校長さんにご承諾を得たうえ、その旨ロビンソン君へお知らせしました。多分 5 月中には来日するであります。

昨年度当地区から 8 人の男女高校生が第 268 区並びに第 275 区 (この両地区は昨年までは 1 地区でありました) にお世話になったのです。もちろん私どもは第 275 区のガバナーにも招待状を出しましたが、残念ながらこの地区では、今年度は志願者が見つからなかったそうです。来年度でもよろしければ推薦したいと返事が来ています。そんなわけで、今年度は豪州から 1 少年をうけいれるだけで辛抱せねばなりません。お引き受けを申し出てくださった柳井、宇部西、中津の 3 クラブにはご希望にそえず残念ですが、さきをお楽しみにお待ちください。なおケン少年 (愛称 Ken) は夏休み中に旅行などすることでしょう。そんな場合 3 クラブには優先的にお世話を願うことでしょう。

何しろ当地区で豪州からの学生を預かるのは初めての経験です。ケン少年は言葉のことでかなりの不自由を感じることでしょう。しかし九州学院高校はミッションスクールで、英語はなかなか盛んなようですし、熊本 RC では増永ガバナーをはじめ、4 人のロータリアンのお宅で、順々にお世話くださることになっていますから、きつとうまくいくだらうと大いに期待しています。

なおエンジェル少年のスポンサークラブは、豪州ニュー・サウス・ウェールズのパラマッタのロータリー・クラブで、ロビンソン君はこのクラブのメンバーなのです。

Rotary Club of Parramatta, New South Wales, Australia

○豪州フェアフィールド RC からの贈物 Gifts from Fairfield RC, Australia

昨年当 370 地区から豪州に招かれた高校生 の 1 人、萩クラブから派遣された中村数代がお世話になった豪州フェアフィールド・クラブ（第 280 地区）の名誉幹事スティーヴ・ポール（Steve Paul）君から手紙が来ました。それによりますと、中村嬢のかの地に滞在中のカラースライド 8 枚と、同嬢の送別会の時の皆さんの挨拶などのテープと、をポール君から中村嬢のもとに送られたそうです。これはもちろん中村嬢の私有物であるけれども、他のロータリアン諸君がこれを見ることを、また聞くことを望まれるならば、中村嬢は喜んでお貸しするでありましょう、ということです。

私はさっそくポール君に手紙を書いて、ご厚意を謝し、このことを私の月報に書いて地区のすべてのロータリアンに伝えましょうと約束しました。どうぞ皆さん、このカラースライドやテープを中村さんから借りて、かの女の豪州生活をしのび、フェアフィールド・クラブの皆さんのご親切に対する感謝を中村嬢とわかとうではありませんか。

資料-22

中村数代に贈られたテープ・スライド等に関する新聞記事 1963.2

JAPANESE VISITOR GIVEN TAPE

A tape recording of her farewell by Fairfield Rotary Club was given to Japanese student, Kazuyo Nakamura when she returned home last week.



MR. SATTLER

Kazuyo came to Fairfield 12 months ago under the Rotary exchange student plan.

In that time she attended Fairfield Girls' High School as a fourth year student, and lived with the families of many local Rotarians.

Nearly 30 pupils from local schools were among guests at the club's farewell to Kazuyo.

Past president of Cabramatta Rotary Club and former secretary of Fairfield Club, Mr. Ray Herman was also present.

President, Mr. J. Sattler welcomed the guests and expressed regret at Kazuyo's departure.

Goodwill

"She has not only endeared herself to every-

one, but the experiment has developed international understanding and goodwill," he said.

Mr. Sattler added a tribute to Kazuyo's "grace" and friendly personality" and wished her a happy future.

Kazuyo was presented with several mementoes of her year-long stay in Fairfield, including an ornate necklet, a bracelet and a set of coloured slides.

Past president, Mr. T. Everingham, who as president had welcomed Kazuyo to Australia last year, endorsed Mr. Sattler's remarks.

Local school captains, Jill Davies, Fairfield Girls' High; Christine Pearman, Our Lady of the Rosary Convent; Richard Levandov-

sky, Patrician Brothers, and John Brewer, Fairfield Boys' High, also praised their fellow student from Japan.

Mr. Ted Steel, was welcomed back at the meeting after a term in hospital.

Attendance last week was 95.56 per cent.

資料-23

25 Years of Service The Rotary Club of Hunters Hill, April 1983

(立花万紗子のホストクラブ、25周年記念誌より抜粋)

1961-62 PRESIDENT GEORGE DANDO (page14-15)

(前略)

The ladies also played a big part in Club activities because we had our first Rotary Youth Exchange Student with us in the person of Masako Tachibana who arrived with another nine Japanese students on 10th of February, 1962. Seven Rotary families were to host her in their homes during her twelve months stay with us. (編者注：一緒に到着した他の留学生は5名、万紗子のホストファミリーは8家族)

The Club financed her out-of-pocket expenses by asking all fellows to pay the sum of two shillings each week with their dinner dues and this was put into a special fund for the purpose. Youth Exchange was allowing us to really share an International experiences!

(中略)

As time went by our Japanese student “Marsh” was really accepted into our homes and there were many tears as she moved from one home to another. The “movals” were quiet events in the Club’s activities. President George and his wife Joan did so much to make sure this whole project was a success and when he handed over the reins of the Club at 30th June, 1962 there was no doubt that it had been and was to continue for the rest of the 1962 calendar year.

編集・「友」地区委員
林 初彦・岐阜

地区のたより

第263地区・岐阜・三重

着実に発展する青少年交換
その生い立ちと背景について

岐阜 武藤 昌一

わが地区より最初の交換学生として、各務原RCがスポンサーした山田真理さん(当時、岐阜高校1年在学中)が、オーストラリア260地区ボーデザートRC(現964地区)へ1年間派遣されたのは、あたかも、360地区から分離独立したばかりの361地区初代ガバナーであった故山中義一会員の時、1967年1月であった。翌1968年1月、その見返りとして、オーストラリアのボーデザートRCより、エリザベス(愛称リビー)・サリバンさんが当地区受け入れ第1号の交換学生として来日し、岐阜クラブがホストすることとなった。リビーは、県立岐阜商業高校へ通学しながら、1年間の滞在を終えて帰国したが、これが、当地区における青少年交換の始まりであった。

1969年には、地区に正式に国際青少年交換委員会が創設され、その初代委員長に故山中バスターガバナー、委員に現岡本ガバナーが就任し、ようやく青少年交換もその軌道に乗ったのである。翌1970年には、岐阜RCに地区内他クラブにさきがけて青少年交換委員会が特別委員会として設けられ、山内正通前会長が初代委員長に就任した。

以来、当地区とオーストラリアの交換は年を追って拡大、発展を遂げ、今日に至ったが、ロータリーの提唱する青少年交換プログラムは、いつ、いかにして始められたのであろうか。青少年交換は、現在でこそ世界理解のための最も成功したプログラムの一つとして、世界中のロータリーの指導者たちの間に認められているが、最初はRI理事会の外で考えられ、非公式に創始され発展したのである。1950年代の後半に、「地域社会の高校生に対し、文化、習慣、信仰などの全く異なった国を訪問し、1年間をその土地のロータリークラブの保護下で、複数のホ

スト家庭でさまざまな生活体験をしつつ、高校生活を送り、その国の言語を習得し、自己の見聞を広めるとともに、自分の国を代表する親善使節として、受け入れ国の人々との友好親善を増進し、国際的感覚を身につけさせよう」というアイデアを抱いていたロータリアンがいた。

それは米国の偉大な作家マーク・トゥエインの曾孫に当たる人で、ネブラスカ州545地区のスコッツブラフRCの会員でバスターガバナーのハーリー・シェーパーであった。彼は1958—59年度のガバナーを対象としたアメリカのレック・ブラシッドでの国際協議会へオブザーバーとして、自ら赴き、世界中より参加したガバナーノミニーに自己の意見を述べようとした。しかし、ハーリーは、たまたまトイレで隣り合わせたオーストラリアのガバナーノミニーに青少年交換に対する自分のアイデアを語ったところ、即座に同意を得たのである。そのガバナーノミニーこそオーストラリア・メルボルンより会議に出席した280地区(現980地区)エッセンダナーRCの会員ジョー・ブラッドバリーであった。

ハーリーと青少年交換の実現を約し、オーストラリアに帰り、間もなく、ガバナーに就任したジョーは、その年、1958年7月、280地区のロータリー財団委員に新任されたばかりのマートルフォードRC会員のピーター・パーネットに新しい交換プロジェクトの推進を命じた。しかし、青少年交換はロータリー財団活動を阻害するものだというメルボルンをはじめとする大都市のロータリアンの猛烈な反対があった。それにもくじけずピーターはローリーとジョーの夢を実現すべく、自分のクラブをはじめ主にビクトリア州北東部農業地帯のクラブの協力を得ることに成功し、ついに1959年1月になって米国のRCとの間で3人の男子生徒を相互交換する

に至ったのである。これら3人の男子生徒こそ世界最初のロータリー交換学生で、しかも、ハーリーのアイデアとジョーの協力による所産である。ハーリーもジョーもその後他界したが、ジョーは今でもオーストラリアで「青少年交換の父」として、その栄誉をたたえられている。

さて、日本との交換であるが、1959年、ジョー・ブラッドバリーは、日本の12地区のガバナーに親書を送り、青少年交換についての意見を求めるとともにその協力を依頼したが、2、3のガバナーより丁寧な断りの返書が来たのみでほかは返事すらなかったという。一方1955年、ビクトリア州の保養地ローズバッドという町にロータリークラブが創立されるや、ドン・ファークファーは自らチャーターメンバーとして加入した。彼は第2次世界大戦でオーストラリア空軍に志願し、1942年9月に対空砲火のために負傷して、永遠に盲目の身となり、復員後医師の勧めでメルボルンを去り、この地で夫人とともに貸別荘を営んでいた。彼は1958年には全盲の身でありながら、クラブ会員に選ばれ、地域社会のため奉仕の誠を尽くすのであった。戦争で失明して一時は極度の人間不信に陥ったが、ロータリーに入会してからは、戦争の愚劣さを痛感し、世界の平和がいかに重要であるかを周りの人々に説いたドンは、かつての敵国日本との友好を確立することこそ、最も重要なことだと悟った。そして青少年交換という新しいプログラムにより日本人の高校生を招待し、自分のクラブでホストするのが一番の近道であると考えて、パストガバナーのジョー・ブラッドバリーに相談を求めた。そこでジョーは、この盲目の

今年も元気な交換学生が大勢やって来た



平成元年6月号

ロータリアンであるドンが日本との戦争により失明したことを知り、彼をこそ日本との青少年交換の橋を架けるために利用すべき最良の人物であると考え、自らエッセンデンRC会員より募金した500ポンドの金をドンに贈り、1961年5月に東京で開催された国際ロータリーの世界大会にドンの参加を要請したのであった。大会に出席したドンは、幸いにも、今は故人となった当時ガバナーノミニーの九州地区八幡RCの松本兼二郎氏に会い、ジョーの意を伝えるとともに、自己の所属するローズバッドRCに日本人の女子高校生の派遣方を求めた。当時、オーストラリアでは依然反日感情が強かったので、ドンはあえて女子学生の選出を願ったという。7月より地区ガバナーに就任した松本氏は公式訪問の都度、訪問クラブでドンに約束した交換学生の選出を要請し、その結果、久留米RCがスポンサーした宮崎洋子さんを決定し、翌1962年1月、ドンのクラブへ派遣した。これが日本人交換学生第1号である。

ローズバッド“ばらのつぼみ”という美しい名前を持ったRCで始められた日本との青少年交換が、今では年間それぞれ100人を超す多きになっている。

既述の通り、当地区にとっては1967年が青少年交換の創始の年、以来年を追って盛んになり、現在では国内随一の交換実績を誇る。当地区の交換先はオーストラリア、アメリカ、ニュージーランドの3カ国、31地区、1967年から1989年の地区全体の実績は、

岐阜県 (26RC)	派遣 312人	受入 309人
三重県 (17RC)	派遣 99人	受入 94人
合計 43RC	派遣 411人	受入 403人

(1989年9月の派遣、受入を含む)

RIはその綱領の中で「奉仕の理想に結ばれた会員が、世界的親交によって国際間の理解と親善と平和を推進すること」を推奨しているが、この青少年交換プログラムこそ、まさにびったりであり、これをさらに発展させることが世界平和、世界理解への礎となることを確信する。

編集後記

記念誌作成の企画をしてから間もなく東日本大震災が起き、原発事故の余りの深刻さから、それどころではない気持ちで半年が経過してしまいました。元派遣学生に原稿依頼をしたのが2011年9月末。年末に原稿が集まり始めてから、編集と校正を進めること約4ヶ月、ようやく記念誌の原型が出来上がった。その間、自分自身の原稿を書き進めると同時に、関係者にメッセージの寄稿をお願いしたり、提出の遅い仲間へ催促のEメールを送ったりした。大型連休中には仮とじの記念誌一次案を関係者に送付した。5月末には筑後・柳川の「御花」（立花さんのご実家）で元派遣学生6名による座談会を開催し、その内容も収録することができた。残念ながら米国在住の宮本君からは寄稿が得られず、彼の思い出を本誌に載せることは叶わなかった。

当記念誌の各章の扉には辻数代さんの墨彩絵を挿画として使わせていただいた。同様の手法で制作された彼女の作品群は、シドニーで開かれた展覧会でも紹介され日豪文化交流の懸け橋役を担ったという背景がある。

発案当初は仲間内による思い出文集と手持ち資料の整理程度を考えていたが、内容は次第に充実した。各人が思い出を語るだけでなく、青少年交換が実現した経緯を発掘し、関連資料を整理し、関係者からメッセージを頂戴した。これらを総合的に収録することで本誌は「50周年記念誌」の名に恥じない保存に値する図書になったと思う。

さて余談になるが、編集作業を進める過程で青少年交換の経緯について、私は一つの仮説をイメージするに至った。これまで太平洋戦争で失明したドナルド・ファーカーが和解と親善のため自らホストとなってメルボルン近郊のクラブへ留学生を招待し、松本兼二郎らの働きで宮崎洋子が派遣されたことはよく語られた。しかし、それを追うようにシドニー近郊へ8名もの留学生が招待された背景については、よく分かっていなかった。今回再発見されたもう一人のキーパーソンは、第275地区ガバナーのスリース・ラウリーである。「歴史探索」で述べたとおり、松本兼二郎との人間関係はこちらが先に出来ている。私の勝手な推測だが、シドニー及び周辺地域を預かるガバナーのメルボルンに対するライバル意識がそうさせたのではないか。つまり、日豪青少年交換の発案と最初の1名の荣誉はメルボルンのものになったが、シドニーの方が実質的な受け入れ体制でまさっていること、さらにはオーストラリアを代表する第一の都市はシドニーであることを日本に示すため3名の受け入れをオファーし、志願者が多いのを見るやそれを8名にまで増やした、というのが私の推測である。ラウリーの自伝があれば謎は解かれるだろうが、これは次の楽しみにしておこう。

原稿を書いていただいた方々、関係資料を提供と確認等にお手数をおかけした方々に心からお礼申し上げる。私自身も大切な記録の編集がようやく終了したことにより、肩の荷を下ろすと同時に大きな満足を感じている。

2012年7月

編集担当 濱 恵介

追記

この記念誌は基本的に日本の読者を対象に制作された。オーストラリア側から寄稿を頂いたので、その部分は英語である。日本の読者の多くが英文を理解する一方、ほとんどのオーストラリアの読者にはその部分しか理解できない可能性が高い。彼らから「日本語の部分も読みたい」という強い希望がでることは容易に想像できる。残念ながら限られた誌面と能力それに資金の理由から、今回は（主な見出しを除き）英訳を付けることができなかった。

オーストラリアの読者には期待に添うことができず申し訳ない。もしご要望があり条件を整えば、英語訳は実現できる。その可能性があることをご理解願いたい。（濱）

Postscript

This memorial book has been prepared basically for Japanese readers. As we have a number of contributions from the Australian side, they are in English. While a majority of Japanese readers can read English, it is very probable that most Australian readers only understand that part. I can easily imagine they would strongly like to also read the Japanese part. Unfortunately, we could not realise the English translation this time, except main titles, because of the limitation of pages, capacity and financial resources.

I apologise to Australian readers for not yet having met their expectation. Should there be enough interest and facilities for it, an English translation could be made. Please understand that there is still a possibility for this to be done.

Keisuke Hama

オーストラリア留学から半世紀

ロータリー青少年交換第1期生派遣 50周年記念誌 第2刷

制作：ロータリー青少年交換 第1期派遣学生有志

編著者：濱 恵介 奈良市学園朝日町 13-3

寄稿者：齋藤直美、原田光久、吉田敏子、竹下由美、原田万紗子、辻 数代、
篠崎裕子、福生尚子、関本洋子、Wyverne Smith, David Pollard,
Roy B. Reidy, Bede Goodman, John Moon, Stuart MacDonald,
神田 憲（敬称略・掲載順）

発行：2012年（平成24年）8月15日

非売品

